

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

FAIRY TAIL 龍と妖精

【作者名】

雲珠

【あらすじ】

モンハンのミラージュがフェアリーテイルの世界に来たらどうなるのか？

これはそんな作者が生み出した妄想の惨劇物語である。

処女作なので駄文注意でお願いします。

第一話 龍と精霊の出会い

みがえらん

数多の飛竜を駆逐せし時 伝説はよ

数多の肉を裂き 骨を碎き 血を

啜った時

彼の者はあらわれん

土を焼く者

【くろがね】を溶かす者

水を煮立たす者

風を起こす者

木を薙ぐ者

炎を生み出す者

その者の名は ミラボレア

その者の名は 宿命の戦い

ス

その者の名は 避けられぬ

死

喉あらば叫べ

耳あらば聞け

心あらば祈れ

ミラボレアス

天と地とを覆い尽く

す

彼の者の名を

天と地とを覆い尽く

す

彼の者の名を

「こりゃスゲエな」

ハンター達に討伐されかけた私は、必死の思いで逃げてきた。逃げる途中、訳の分からない黒い渦に飲み込まれた私は、塔から森へと場所を移していた。

最初こそ混乱したが、傷を治すために森で休んでいる内に環境に適応した。

うん。だって塔に居たのも静かに寝たかっただけだし。別にここがどこでも構わないという結論に落ち着いたのだ。

『・・・・？』

だが何故か、今日に限って私の所に人が来た。えー、戦闘態勢バリバリじゃないですかー。

隠れる場所……は、無い。私の身体より大きい木が無い……！なんかメツチャ目が鋭いんですけど……。

「怪物退治の依頼が来てたが、本物の化け物が相手とはな……」

これ絶対に言葉が分からないと思って言ってますよね。

私ちゃんと人間の言葉分かりますからね！主にハンター達との戦闘中で覚えましたが！

……言ってて悲しくなってきました。

なんか向こうは襲い掛かってこようとしていますし、こちらから話しかけますか。

『私に何か用ですか？』

「!!お前、言葉が……」

『理解出来ますし話せますよ』

「…そうか。なら聞きたいことがある」

『何でしょう？』

人間の男は少し安堵した顔で私に問いかけてきた。

一体何を聞かれるんでしょう…？

「俺はこの村の依頼でお前を討伐しに来た」

『討伐、ですか』

「そうだ。だが大人しく出て行くなら、何もしない」

『それは無理です』

真剣な眼差しで言う人間に対して、私はあっさりと断った。

人間は少しばかり怪訝そうな顔をして私を見上げた。

「何故だ」

『私は怪我を負い、ここで身体を癒しています。動くことは出来ませ
ん』

「そんなに重症なのか？」

『足と翼が特に酷いですね。回復するには少し時間が掛かります』

「それは困ったな…」

難しい顔で悩みだす人間。

討伐すればいいだけ話なのに、どうしてしないのだろう？
今の私を倒すことなんて造作もないのに…。

『私を狩らないのですか？』

「村を襲ったり、人に危害を加えた訳じゃねえんだろ？」

『そんなことしませんし、出来てもやりませんよ。人は愚かで脆いですが、それ故に美しく気高い』

何らかの理由で襲ってくるなら話は別ですが、そうでない限り、私から手を出すことはありません。

「だったら俺も戦わない。別の方法を探す」

『珍しい人間ですね』

「それに、勿体無い気もするしな。折角綺麗なんだからよ」

人間はそう言つと、静かに私の鱗に触った。

私自身は色のないつまらない鱗だと思いましたが、褒められるのは嬉しいですね。

『ふふっ、私が雌だったら口説き落とされましたね』

「てことはお前、雄か。中性的な声だから外見じゃ分らないな」

そうですかね？龍達からは性別を間違われたことなんてありませんけど…。

人間の感覚というのは分かりませんね。

まあ、その感覚の違いが面白といえば面白いのですが。

「ちびっ、どっつするか…」

再び悩みだした人間。

なら、私は素直に助けを求める事にしよう。

『……近くに、村があると言いましたよねっ。』

第二話 龍、人間へ

「いやー！あの怪物を退治して下さい、本当にありがとうございます！」

「礼には及びません。それに、連れを看病して頂いて…」

「いえいえ！あの怪物を退治して下さいです！お連れ様の一人や二人、いくらでも看病致しますぞー！」

人間達がそう話しているのを、私は横たわりながら聞いていた。

一人は私が先程会った人間だ。もう一人は知らないが、この村の人間だろう。

それから二言三言話し、先程の人間がこちらに近付いてきた。

「調子はどうか？」

『回復速度は遅くなりましたが、翼が無い分、足の治りに集中出来そうです』

「そいつは良かった。しかし、あん時は驚いたぜ」

人間はそう言うと、近くに会った椅子に座った。

私はベッドの上で少し身動きし、顔をそちらに向けた。

『そうでしょうね。龍達の間でも古き龍しか方法を知りませんし』

「すると、お前もかなり古いのか？」

『私は祖龍。全ての龍の祖であり、起源です』

「……マジか。いや、最初見た時も半端ねエ存在だとは思ってたがよ……」

人間は私の言葉に素直に驚いているようだった。

私を知る人間と随分と反応が違いますね。

彼らだったら嬉々として私を素材として剥ぎ取るだろう。

『先程から気になっていたのですが、貴方はハンターではないのですか？』

「ハンター？俺は魔導師だ」

『魔導師？魔法が存在しているのですか？』

「……………ああ、お前祖龍って言うてたモンな」

『え、何ですかその“大昔の知識で止まってるのも無理はない”的な目は』

そう言ったものの、よくよく考えれば今の私の状況にも説明がつく。

この世界にはあまり龍の気配がしない。何らかの理由で滅び、数が少なくなっただろう。

恐らくここは私がいた時代よりも未来、もしくはそれに近い世界。これは推測にすぎないが、私は正体の分からない黒い渦によって時空を超えたのだろう。

……………我ながら面白いことに巻き込まれたものだ。

「って、話がズレたな。いつまで人間に変身出来るんだ？」

『私が術を解くか、死ぬまで継続出来ますよ』

「そりゃ便利だな」

『そうでもありませんよ。パワー、スピード、体力、その他諸々、全て半分以下になりますから』

「確かに、初めて見た時ほどの威圧感はないな」

それは単に龍の姿に対して威圧を感じていただけですよ。戦闘の時ならまだしも、普段威圧なんて出していませんし。

『そう言えば、助けて頂いたのにまだ名乗っていませんでしたね』

私はゆっくりと身体を起し、人間の顔を正面から見た。

『我が名はミラボレアス。人の間ではミラ・ルーツと呼ばれていた。此度の件、心より感謝する』

「俺はギルダーツだ。さっきの言葉は訂正するぜ。その姿でもスゲエ威圧だ」

『いやだから出していませんって！』

そう突っ込むと、「どっちが素だよ…」と呟かれた。

どっちも素ですよ。まあ「我」っていつ時は相手に誠意を見せる時ですけどね。

『そうそう、ギルダーツ様は依頼を終えたのでしょうか？帰らないのですか？』

「まだ他にも依頼が残って…いや待て、様ってなんだ」

『え？様は様です。人間も人間同士で“さん”や“ちゃん”をつけるでしょ？』

「竜にとってはそういう感覚なのか…？」

『何故か龍の子達に様を付けると凄く畏まった様子で「止めて下さい！」と泣きながら土下座されますけど』

「それが当たり前前の反応だ！自分の親に様付けで呼ばれたらそうしたくもなるわ」

『そうなんですか？私、親がいる感覚がよく分からなくて…』

初めから一人でしたからね。

友達や仲間と呼ぶ存在はいましたが、親なんて存在しませんし…。

初めて子が出来た時も、無償の愛に戸惑いを感じたのは良い記憶です。

「親を知らずに親になった訳か」

『ええ』

頷くと、空気がしんみりとしてしまった。

その雰囲気を変えるように、ギルダーツ様が口を開いた。

「所で、その様付けはいつ知ったんだ？」

『これは友達からえええむふれい？の一環だと…』

「お前の友達には悪いが、そいつ頭大丈夫か？」

真剣には真剣ですが、少し呆れが混じったような顔。

何故そんなことを聞くのでしょうか？私の友達は皆良い子なのに…。

『良い子ですよ？いつも大勢の人から跪かれて女王様って呼ばれてましたし』

「それ跪いてるんじゃないかって跪かせてんだよ」

『違いますよー。皆さん、凄く嬉しそうでしたし』

「調教済み、だと？」

全く、ギルダーツ様も結構冗談を言う人なんですな。

『でも何故か私が女王様と言ったら泣きながら踏んで下さって言われたんですよ…』

「そうか（コイツ絶対Sだな）」

『あ、ちゃんと断りましたよ？友達を足蹴にするなんて出来ませんか
らね』

ニコリと笑いながらそう言つと、ギルダーツ様が不意に私の肩に手を乗せた。

そして何かをする訳でもなく、そのまま複雑そうな顔で言った。

「とりあえず様付けを止める」

『何ですか!?!』

というか、いつからそんな話に!?

話の脈絡ありませんよね? 無かったですよね!?

私が聞いていなかっただけですか…? ?

「祖先の自覚があるならまず止める」

『じゃあ何と呼べば!?!』

「普通に呼び捨てで良いだろ」

『そ、そんな! ハードルが高すぎます!』

「様付けの方がハードル高いだろ! まず俺のことを呼び捨てで呼んでみる」

『え、う…ぎ、ギルダーツ………さま』

「最後にボソツと付けんな! はいもう一度!」

『…ぎ、ギルダーツ! ……さん!』

……………。

「……………」

『……………』

お互いの間に沈黙が流れる。

様が無理ならさん付けしかない。

いきなり呼び捨ては無理です。

友達や仲間にも様付けで呼んでるのに…。

「なあ、一人称を我で俺の名前言ってみろ」

『? 別に良いが、我でも変わらんと思おっぞ? ギルダーツ』

「……………」

『……………』

二度目の沈黙。

次に沈黙を破ったのは私だった。

『あ、言えましたね』

「おい!?なんだその猫かぶ…いや、龍被りは!」

『被ってませんよ。素です』

「嘘つけ!」

嘘じゃないんですけどね…。

『まあ言えたんだから良いじゃないですか、ギルダーツさん』

「元に戻ってるぞ」

『…いつか出来ますよ。うん。いつか』

「人間と龍の時間を考えろ」

そのままくだらない話が続き、時間は過ぎていった。

人間と話すのは本当に久し振りでしたから、楽しかったですね！。

第三話 妖精の勧誘

「ルーツ、お前ギルドに興味無いか？」

『え？』

あれから数日が経ち、私の怪我也大分回復した。

完治までとはいかないけれど、歩いたり走ったりする分には何の支障もない。

ギルダーツさんは私のことをミラ・ルーツから取り、ルーツと呼んでいる。

なんでもギルドの仲間と同じ名前の人がいるのだとか。

そもそも私の名前は人間がつけた名前ですし、何でも良いんですけどね。

他にもミリアンセスや、酷い時なんかは白ミラとか言われますし。

「今後の予定もないんだ、ろー！」

『一応大陸を旅しようかと思っていました、よー』

「長くなりそう旅だ…なア！」

現在、リハビリを兼ねてギルダーツさんと組み手をしている。

あのクラッシュという魔法、厄介ですね。

下手に触れると腕の一本くらい持って行かれそうです。

まあ腕くらいなら1年あれば再生できますけど。

『でもそうですね。ギルダーツさんが言うなら、ギルドに入ってみるのも悪くないかもしれません』

「お、そうか？」

折角この世界に来たのだし、今出来ることを堪能してみたい。

それにしても、ギルドか…。

ね。
モンスターがモンスターを狩る場所に入るなんて、笑っちゃいますね。

「だったらウチに來いよ。歓迎するぜ」

『えっと、確かフェアリーテイルでしたっけ？』

「ああ」

今までの話を聞く限り、面白そうなギルドではある。

ギルドの話をする時、ギルダーツさんは本当に良い顔をする。

余程大切に、楽しい場所なのでしょうね。

『これも何かの縁ですし、ね』

「お、そうか！ウチに入るか！」

『ええ』

「じゃあついでに手紙もマスターに届けてくれ」

『分かりました。ところで、1つ聞きたいのですが』

「なんだ？」

『そのフェアリーテイルって、どこにあるんですか？』

私の質問にギルダーツさんがコケ、そこら一帯が粉々に砕け散った。
やっぱり魔法って怖いですね。

やっぱり魔法って怖いですね。

「そうだった、祖龍だったな…」

『何でもかんでも祖龍で解決しないで下さいよ』

確かに説明は楽だけど、その一言で全てが片付けられると納得がいかない。

まあ未来から来たなんて馬鹿馬鹿しすぎて、当の本人である私ですら十全に理解してはいません。

これはあくまでも推測であり、仮説の1つでしかない。

「そう怒るな……よッ！」

『!!』

組み手にしては威力の高い攻撃。

私は咄嗟に地面を蹴り、ギルダーツさんから距離を置いた。

その瞬間、私が出た地面が砕け散った。

危ない危ない。やはりあれはクラッシュの魔法ですか。

嫌な予感がしたんですよねー。

「よく避けたな」

『戦闘経験豊富ですからね』

「それを言われたら納得するしかねエな」

『取り敢えず、一度休憩しましょう。もう1時間も動きっぱなしです』

『お』

「ああ、そうだな。ルーツも病み上がりだしな」

病み上がりの人間に対してする攻撃じゃありませんでしたよね、さっきの。

少なくとも3割ほどは殺気が混じっていましたよ。

『ん、大分人間の体にも馴染んできましたね』

私はグッと空に向かって手を伸ばし、体の強張りを解した。そして小さく溜息を吐き、ちらりとギルダーツさんを見た。

フェアリーテイルに行けば、ギルダーツさんみたいに強い人が沢山いるんでしょうか…。

『(楽しみですね)』

まだ見ぬギルドに、想いを馳せた。

第四話 龍と竜

『ここがマグノリアですか…』

背中物を背負い直し、呟く。

ギルダーツさんの話だと此処ですが、聞いた通り広い街ですね。

これは自力で探すより、人に聞いた方が早いですね。

『あの、すみません』

「ん？なんだい？」

道行く人に声を掛け、目的の場所を聞く。

『フェアリーテイルというギルドを知りませんか？』

「フェアリーテイル？また何かやったのかい？」

『また…？いえ、そのギルドに届け物がありました』

「そうかい。フェアリーテイルはあっちだよ。行くなら気を付けなさい」

『はい。ありがとうございます』

お礼を述べ、教えてもらった方向へと進む。

それにしても街の人から随分と警戒、というか危険視されているみたいですね。

ギルダーツさんは楽しい所だと言っていました。この反応を見ると恐くなってきましたよ。

『……………はあ』

手紙があるから、行かない訳にはいかないんですけどね。

……信じてますからね？ギルダーツさん。

「それにしてもあの青年、凄い大剣を持っていたねえ」

後ろの方で、そんな声が聞こえた。

迷うことなく、私はギルドの目の前に着いた。

着いたは良いのですが……

「おらー！」

「ふざけんなクソ炎！」

「グレイ、服！」

「うお!？」

「漢たる者、勝負だ！」

「もう頭来た！」

「やるうってのかい！」

……喧嘩、ですよな？

入るの凄い気まずいんですけど……。

「じいじは目を改めて、もう一度出直すとしてましょう。」

「火竜の」

『すみません、ギルダーツさん。手紙は遅く……』

「咆哮！」

『ッ!!』

背後から炎の気配がし、私は咄嗟に振り返った。

扉が一瞬にして燃やされ、炎はその勢いのまま私に迫って来た。

『この炎は…』

片手でそのまま受け止めると、手にチリツとした痛みを感じる。
この炎、普通の炎じゃありませんね。
いくら人間の姿だからといって、私にダメージが通るなんて…。

「ナツの炎を、素手で…!」
「しかも片手で!?!」

うーん、どうやら注目が集まってしまったようですね。
目を改める必要も無くなりましたし、好都合といえば好都合です。

『初めまして、フェアリーテイルの皆さん』
「なんだ? お前…」

桜色の髪をした人間が、首を傾げる。

…いえ、この感じ…人間というより、龍に近い…?
まさか先程の炎、この少年が?

『私はミラ・ルーツ。マカロフ様はいらっしゃいますか?』

「じいちゃんに何の用だ」

『ギルダーツさんから手紙を預かっているのですが…』

「! お前ギルダーツに会ったのか!?!」

『え、ええ』

表情がコロコロ変わる少年ですね。見ていて飽きません。
龍に似た雰囲気も相まって、私は思わず、彼の頭を撫でた。

「っ! ……なんかお前、懐かしい匂いがする」

『懐かしい、ですか？』

「ああ。分かんねエけど」

分からないのに懐かしい…。

私と会ってその感覚になるのは、龍の者だけ。

この少年、まさか龍？

けど人間に擬人化するには年齢が幼すぎる。

人間と龍の感覚が何らかの形で成り立ち、リンクしている…。

これは…そう、まるで……人と龍が共存しているみたいに。

『私が生涯を掛けても成し得ることが出来なかった、共存の道…』

龍が数を減らした世界で、まさか共存の道を見つけるなんて…。

なんて皮肉でしょうね。これも因果というものでしょうか？

「お前さんが、ワシに用があるというのは」

桜色の少年とほのぼのしていると、足元に小さなお爺さんが現れた。

ん、この人間、強いですね。背中が少しゾワリと来ましたよ。

もし全盛期なら戦ってみたかったですね…。

『ミラ・ルーツといいます。ギルダーツさんから手紙を預かっていま
す』

「ほづ、どねどね…」

ギルダーツさんの手紙をマカロフ様に渡す。

マカロフ様は手紙をその場で読むと、早々に自分の懐にしまった。

早いですね、もう読み終わったのでしょうか？

「お前さん、確かミラ・ルーツと言ったな」

『はい。あ、こちらには同じ名前の方がいらっしやると聞いたので、ルーツで構いません』

「そうか。ではルーツよ、ウチのギルドに入るか？」

『！はい。入れてくれると嬉しいのですが…』

駄目だった時は潔く諦めますが、出来るなら此処に入りたいですね。

龍の子もいますし。

「うむ。皆の者、よく聞けい！フェアリーテイルの新しい仲間じゃー

」！

「うおおおおー！！」

建物内のあちこちで、声上がる。

桜色の少年は口から火を吹いて笑っている。

これは多分、歓迎されている……んですよね？

『ミラ・ルーツです。これからよろしくお願いしますー！』

「うおおおおー！！」

力強い声に、心がほんのりと暖かくなった。

人間に受け入れられるというのは、なんとも良いものですね。

第五話 ルーツvsナツ

「ルーツ！俺と勝負だ！」

『え…』

他の方との自己紹介もそこに、突然龍の子に勝負を挑まれた。断ろうとしましたが、そのやる気に満ちた顔を見ていると断れず…。

何故かギルド前の広場で戦う事になっていました。人のノリほど恐ろしいものはありませんね。

しかも審判がマカロフ様ってどういうことですか？

『……………』

「お前さんも頑張れよー」

今ならまだ引き返せるとマカロフ様に助けを求めるも、凄く良い顔で親指を立てられた。

ええー…止めて下さいってばー。これは諦めろって事ですか？

「それではナツ対ルーツ、始め！」

「燃えて来たー！火竜の鉄拳！」

『！』

炎を手に纏い、私に向かって来る龍の子。

いえ、マカロフ様が言うにはナツ様、でしたね。

私はその攻撃を避けながら、注意深く観察した。

「おりゃー…」

『(炎の属性に加えて、龍の属性も混じってますね)』

身体の方も人間をベースとした龍の属性変化。

つまりナツ様は純粋な龍ではなく、人から龍へと身体を変化させた。

私たち龍が人へと変身するのとはほぼ同じ原理ですね。

ふふ、これは面白いです。

「火竜の鉤爪!」

『おっと』

「だー!避けんなー!」

『そんなこと言われましても…』

炎の属性だけならまだしも、流石に龍属性を纏った攻撃になんて当たりたくありません。

やっと怪我が治ったのに冗談じゃありませんよ。

「こっぴなったら、火竜の…」

『!』

「咆哮!!」

あの技は、先程の…。

私は小さく息を吸い、背負っていた剣を抜いた。

身の丈以上もある、優に2mを超えている巨大な剣。

一切の不純物もなく、ただ白く輝いている。

「な、なんだあの太剣」

「つかデカッ!」

「あんなデカイの扱えんのかよ…」

周りがざわめいているが、今は勝負に集中しなくては。
私はその大剣【アカツキ曉】を自分の前に突き立て、炎の咆哮を防ぐ。
そして【曉】は傷も汚れの1つもなく、炎をやり過ごした。

『(流石は私の牙と爪、そして鱗で出来た剣ですね)』

そう。この大剣【曉】は全て私の身体の一部から作られた物だ。
え？どうやって作ったのか、ですか？

それは勿論、自分の身体で一度融合し、加工したんですよ。
色んなハンターの武器を食べたり取り込んだりしましたからね。
長年生きていれば色んな知識が身につくものです。

『次はこちらから行きますよっ。』

私は【曉】を片手で持ち上げ、薙ぎ払うように振るった。
リーチが長いですからね。この距離からでも十分届く。
本来ならハンデとなる重量も龍の腕力に掛ければ軽い軽い。

『っおっ！危ねっ！』

攻撃を避けたナツ様は、少し大袈裟に私から距離を取った。
どうやら【曉】の危険性を本能的に察しているようですね。

龍の素材から作られた【曉】は、いとも容易く龍の身体を傷つける。

『随分と距離を取られてしまいましたね…』

「火竜の咆哮ー！」

『っっ、』

二度目の咆哮。

私は先程と同じように剣を盾にして攻撃を防いだ。

「火竜の鉄拳!!」

『!成る程...』

咆哮は目くらまし、ですか。

隙を突いて私の後ろへと回り込んだナツ様は、そのまま直接私に攻撃する。

剣での防御は間に合わないと思った私は、攻撃を素手で受け止めた。

「なっ...!」

『ッ、流石に熱い...ですね』

受け止めた手からシュウウウと嫌な音がしている。

確実に焼けてますね、これ。

うっ、自分の肉なのに美味しそうない...

って違いますよ!私!

いや確かに食欲をそそる...じゃなくて!今は戦闘中!

『はっ...』

「!!」

ナツ様に向かって【暁】を振り下ろすが、当たるより先にナツ様が身を引いた。

これまた【暁】のリーチが届かない微妙な距離。

配置取りが上手ですね...

「.....」

じりじりと動きながら、私の隙を探すナツ様。

「おいおい、嘘だろ……」
「ナツー！」

マカロフ様が勝負の終了を告げると、周りが騒ぎだした。その中から青い……生物？が羽をパタパタと動かしてナツ様に近付いた。

私を知るのとは少々違いますが、もしかして猫……でしょうか？

「ナツー、大丈夫ー？」

「う、うーん……」

青い猫が指でつんつんとナツ様の頬つぺたを突くも、目を覚まさず唸り声のみ。

『それほどダメージは無いので、大丈夫ですよ』

「そっか。ルーツって強いんだね」

私の言葉にあっさりと頷く青い猫。

純粹に褒められる事はあまり無いので、少々照れますね。

『えっと、名前をお聞きしても？』

「オイラはハッピーっていうんだ」

『ハッピー様ですね。どうぞよろしくお願いします』

目線の位置まではしゃがめませんでした。なるべく腰を低く降ろし、握手を交わした。

ぶにぶにとした肉球が気持ち良く、何となく離し難かった。今度頼めば触らせて貰えるでしょうか？

「あい。でもオイラのことハッピーでいいよ」

『……ではハッピーさん』

「呼び捨てでいいのに…」

『すみません。勘弁して下さい』

「なんでそこまで必死に!？」

土下座する勢いで(しませんでしたが)許しを請うと驚きと一緒にツッコミを入れられた。

むしろ逆に何でアナタ方は呼び捨てをさせようとするんですか。

基準ですか？呼び捨てが基準装備なんですか!？」

『取り敢えずナツ様を中に運びましょう』

「全員に様付けなんだね。ナツもきつと様なんて要らないとか言う

よ」

『……なんてハードルの高い世界なんでしょう』

「何のハードル!？」

本日2回目のツッコミを貰いながら、私は小さく溜め息を吐いた。

第六話 物語は始まりへ

私がフェアリーテイルに入ってから、実に半年が過ぎました。ギルドの雰囲気にも大分慣れ、偶にですが他のメンバーと一緒に依頼へ行くこともあります。

ああ、そうだ！

最近フェアリーテイルに新しい仲間が入ったそうです。

名前は確かルーシー様、でしたね。

まだお会いしていませんが、会うのがとても楽しみです。

噂では何でもバルカンを素手で19匹も倒したのだとか。

……しかし、バルカンですか。

似ても似つかないですが、私は違うバルカンを想像してしまいましたね。

まあ私が想像したのは龍の方ですが。

『ただいま帰りました』

「んだとこのタレ目野郎」

「なんか言ったかツリ目野郎」

「ああ？」

「やんのか」

ギルドに着くと、ナツさんとグレイさんが恒例の喧嘩をしていた。

あの二人は毎度毎度よく飽きませぬね。

「お帰りなさい、ルーツ。依頼はどうだった？」

『古代文字の解読でしたからね。特に問題はありませんでしたよ』

「そう。良かったわ」

問題どころか依頼主様と意気投合して他の古代文字を解読しまくった結果、依頼料を増加して貰ったんですね…。
こちらら軽く100世紀以上は生きてますからね。
文字という文字は見慣れてますよ。

「わ、白くて綺麗…」

『？ミラさん、こちらの女性は…？』

「新しく入ったルーシィよ。今はナツとチームを組んでるの」

「あ、あの！初めまして！」

ああ、この女性が噂の…。

それにしてもあのナツさんとチーム、ですか。

気苦労が絶えなさそうですね。

『初めまして。ミラ・ルーツです。ルーツと呼んで下さい』

「ルーツ…もしかして、白銀のルーツ!？」

『白銀？ああ、見た目がですか？ふふっ、雪が降ったら擬態出来ますね』

「いえ、そういう意味ではなくて…」

『あはは、冗談です。私の異名でしょう？』

こちらほら自分でも耳にしますからね。

たまに依頼主様からも言われますし。

「つてことは本物の…！」

『はい。今度、是非一緒に依頼に行きましょう』

「え？私と？」

『色々と噂は聞いてますよ』

「聞きたいような、聞きたくないような…」

複雑そうな顔をして呟くルーシィ様。

バルカン19匹を素手で、という噂でしたが、大分尾ヒレが付いてますね。

見たところ星霊魔導師のようですし、流石に素手は無いですね。

「テメエはいつも暑苦しいんだよ！」

「変態バカに言われたくねエよ！」

「鳥頭！」

「サラサラ野郎！」

ナツさん、サラサラは悪口じゃないですよ。

どちらかというと褒め言葉です。

というか何時までやってるんですか…。

流石にこれ以上続けさせておくと物理的な喧嘩になりそうなので、そろそろ止めに入りますか。

『ナツさん、 그레이さん。 いい加減に…』

「大変だア!!エルザが…帰って来た！」

バタンツ!!と大きな音を立て、ギルドに入ってきたロキさん。

その瞬間、ギルド内に雷のような衝撃が走る音を聞いた。

ナツさんと 그레이さんもその例に漏れず、蒼白な顔をしている。

「エルザさんって、前にナツが言ってた…」

「今のフェアリーテイルでは、最強の女魔導師と言っても良いわ」

独特の金属が擦れ合う音が一定間隔で聞こえてくる。

珍しく静かなギルドの中で、その音がやけに大きく聞こえる。

「エルザだ…」

「エルザの足音だ」

「エルザが戻ってきやがった…！」

皆さん、隠しもせず心の内が駄々漏れですね。というより露骨すぎです。

私は嬉しいですけどね。久々の再会ですし。

「このリアクション、エルザさんって本当に凄い魔導師なんだ…！」

何を想像したのか、対面していないルーシー様までブルブルと恐怖で震えていた。

一体何を吹き込まれたんでしょう？

そしてついにエルザさんがギルドに着いた。

何故か片手で巨大なツノを持ち上げている。

ツノを置いた瞬間、地面が大きく揺れた。

「今帰った。マスターはおられるか？」

「おかえり。マスターは今、定例会よ」

「そうか」

エルザさんはミラさんに対してそう返すと、次にギルド内を見渡した。

その鋭い眼光に、ほとんどの人がギクリと身体を固まらせた。

「お前達！旅の途中で噂を聞いた。フェアリーテイルがまた問題ばかり起こしているとな！マスターが許しても、私が許さんぞ！」

そう言っつて、エルザさんの説教タイムが始まった。

「カナ！なんとこの格好で飲んでる…！」

「ビジター！踊りなら外でやれ！」

「ワカバ！吸殻が落ちているぞ！」

「ナブ！相変わらずリクエストボードの前をウロウロしているだけか？仕事をしろ！」

「マカオ！」

「！！」

「……はあ。全く、世話が焼けるな」

「何か言えよ……」

「今日は何も言わずにおいてやるじ」

一人だけスルーされたのが悲しかったのか、ツッコミを入れるマカオさん。

取り敢えずある程度は言ったのか、エルザさんの説教はここで止まった。

「ナツとグレイはいるか？」

「あい！」

ナツさん達の方を見ると、そこにはダラダラと冷や汗を掻きながら両肩を組んでいる2人。

いつ見てもエルザさんを前にした2人は面白いですね。

それと顔、凄い引き攣ってますよ。

「や、やあエルザ。俺たち今日も仲良く……やってる、ぜ？」

「あ、い……」

「ナツがハッピーみたいになったー!？」

「そうか。親友なら時には喧嘩もするだろうが、私はそうやって仲良くしている所を見るのが好きだぞ」

「いや、親友って訳じゃ……」

「あ、い……」

グレイさんが弱々しく反論するが、どつちやらエルザさんには聞こえ

ていないようです。

ナツさんに関してはもう壊れているとしか表現のしようがありません。

「こんなナツ、見たこと無いわ…」

「ナツは昔、エルザに喧嘩を挑んでボコボコにされちゃったのよ」

「あのナツが？」

「グレイは裸で歩いてる所を見つけてボコボコに」

「ロキはエルザを口説くとしてやっぱりボコボコ。自業自得だね」

「やっぱりそういう人…」

ルーシィ様はロキさんの女好きに対して呆れているようだ。

私はロキさんの行動、見ていて楽しいですけどね。

よくあれほど沢山の女性と付き合いながら、仕事と両立出来るものですね。

素直に感心しますよ。

「こん中で被害に遭ってないのはルーツくらいだな」

「ああ、それは分かる気がする」

『運良く見つかっていないだけですよ』

うんうんと頷くルーシィ様に対し、私は静かに言葉を返す。

私はあまり討伐系の依頼は受けませんからね…。

どちらかと言えば珍しい依頼を受けることが多いので、表沙汰になっっていないだけでしよう。

「ナツ、グレイ。それからルーツ。頼みたいことがある」

「えっ?!」

『なんでしよう?』

「仕事先で厄介な話を耳にした。本来ならマスターの判断を仰ぐところだが…」

『そうも言っていてられない状況、ということですね?』

「ああ。私は早期解決が望ましいと判断した。力を貸して欲しい」

エルザさんほどの実力者がそう言うのなら、かなり重要かつ危険度が高いものなのでしょう。

最近あまり身体を動かす依頼はしていなので、運動には丁度良いかもしれませんね。

『分かりました。出発はいつですか?』

「話が早くて助かる。出発は明日、準備をしておいてくれ」

明日、ですか。

エルザさんの事ですから、今すぐに出発だ!と言われると思ったのですがね。

流石に討伐依頼の後ですし、万全の状態で事に臨みたいのですね。

私も明日に備えて【曉】の手入れでもしておきましょう。

「エルザとナツとグレイ、そしてルーツ……」

ナツさんとグレイさんが睨みあっている中、ミラさんが固唾を飲みながら言った。

「考えた事無かったけど、これってフェアリーテイル最強のチームかも……」

第七話 鉄の森《アイゼンヴァルト》

次の日、私達はマグノリア駅に集合していた。

「だアー！何でデメエと一緒にじゃなきゃなんねえんだよ！」

「こっちのセリフだ！エルザの助けなんざ俺一人で十分なんだよ！」

「じゃあお前一人で行けよ！俺は行きたくねー！」

「じゃあ来んなよ！後でエルザにボコられちまえ」

相変わらず、ナツさんとグレイさんと喧嘩している。

私とハッピーさん、そしてルーシイ様はその様子を椅子に座りながら見ていた。

しかしグレイさん、私もいるのに一人で十分とは酷いですね。

悲しいです。シクシク。ああ心が痛む。

これは車内で何か奢ってもらおうしかありませんね。

「他人のフリ、他人のフリ……」

『何も壊さなければ良いのですが』

「なんでルーシイがいるの？」

魚をもぐもぐと食べながら、そう質問するハッピーさん。

そついえは、ぶじつしているのですしょう？

「だってミラさんが、あの二人、絶対エルザの見ていない所で喧嘩するから止めてあげてね。」

「止めてないし」

「だって……」

『私は一緒に依頼が出来て嬉しいですよ？』

「あ、ありがとつ。ルーッさん」

落ち込み気味のルーシイ様に、少しでも気分を払ってもらおうと声を掛ける。

ちよっとは気分が紛れたでしょうか？

「すまない、待たせたな」

「あ、エルザさ………!？」

やってきたエルザさんの姿を見て、ルーシイ様はカチンと固まった。

いえ、正確には姿ではなく荷物の多さに、ですが。

一体何週間分なんでしょう？

「今日も仲良く行ってみよー!」

「あいさー!」

「出た!ハッピー2号!」

どうやらエルザさんが来たことで喧嘩も一時的に休戦となったみたいですね。

「ん?キミは確か、昨日フェアリーテイルにいた……」

「し、新人のルーシイです。ミラさんに頼まれて同行することになりました。よろしく願います」

「私はエルザだ、よろしくな。……そうか、キミがルーシイか」

エルザさん曰く「傭兵ゴリラを指一本で倒した」とのこと。

成る程。エルザさんの方ではそんな噂になっているんですね。

『凄いですね』

「(…っ)違うっ違うっ」

ルーシー様の方を見ると、全力で首を横に振られました。大丈夫です。色々と尾ヒレが付いた噂だというのは理解していますよ。

まあエルザさんの方は期待しているみたいですが。

「エルザ、付き合っても良いが条件がある!」

睨み合いが終わったのか、ナツさんは強気な様子でエルザさんに話しかける。

「なんだ? 言ってみろ」

「帰ってきたら、俺と勝負しろ!」

「ええ!」

「おい早まるな! 死ぬ気か!」

「前にやりあった時とは違う。今の俺ならお前に勝てる!」

自信満々にそう宣言するナツさん。

随分と良い顔をしていますね。

今度、私とも手合わせして欲しいものです。

「確かにお前は成長した。私は些か自信が無いが……良いだろう。受けて立つ」

「おーし、燃えて来たアア!!」

ナツさん、嬉しいのは分かりますけど口から炎は止めましょうね。

一応ここ公共の場ですから。弁償とか面倒です。

「う、うう……」

「ったく、情けねエ奴だな。喧嘩売った直後にコレかよ」

『大丈夫ですか？』

汽車に乗った私達ですが、乗り物に弱いナツさんが早々に酔ってダウン。

何とかしてあげたいですが、私にはどうすることも出来ません。

「毎度のことだけど辛そうね」

「仕方ないな。私の隣に來い」

「あゝ……」

エルザさんの隣に座っていたルーシー様と席を代わったナツさん。

一体どうするのでしょうか？と思って見ていると、エルザさんがナツさんの鳩尾に拳を一発。

そのままナツさんは倒れるように気絶した。

「これなら少しは楽だろう」

「……………」

『確かに意識のない方が楽ですね』

グレイさんとルーシー様は苦笑を浮かべながら、見てないフリを決め込んでいる。

まあナツさんの為にも見てないフリをするのが一番良いでしょう。

「エルザ、そろそろ教えてくれても良いだろう。俺達は何をすればいいんだ」

場が落ち着いた所で、グレイさんがそう尋ねた。

「私達の相手は闇ギルド、アイゼンヴァルト鉄の森、ララバイという魔法で何かしで

かすつもりらしい」

「ララバイ……？」

「って、この間の……」

グレイさんにルーシー様、それからハッピーさんは「ララバイ」という言葉に聞き覚えがあるのか、顔を合わせていた。

ララバイ……そのまま言葉通りに受け取るのなら子守唄、ですね。歌、もしくは音の魔法でしょうか？

「何か知っているのか？」

「えっと、前に依頼の後に……」

ルーシー様曰く、前回の依頼の帰り道で鉄の森の魔導師と戦闘になったとか。

そしてその時、彼等が「ララバイ」という単語を口にしたらしい。

「その連中、鉄の森の脱落組だな。計画について行けず、逃げだしたのだらう」

「その計画が、ララバイと関係あるのか？」

「想像だがな」

「計画って、一体……」

「順番に説明しよう。この間の仕事を終え、帰る途中のことだ……」

次はエルザさんが、こうして事をするに至った理由を話し始めた。

事の始まりは、依頼があったオニバスという街で魔導師の集まる酒場に寄ったことだった。

その酒場に鉄の森のメンバーがおり、ララバイという魔法の封印を解こうとしている会話を聞いた。

そして不覚にもその時は鉄の森のことを思い出せず、後になって思い出したそうだ。

「クソッ、あの時にエリゴールの名に気付いていれば…!」

『確か暗殺系の依頼ばかりを遂行している人物で、ついた渾名が“死神エリゴール”……でしたね』

「暗殺!?!」

「本来、暗殺依頼は評議会の意向で禁止されているのだが鉄アイゼンヴァルトの森は金を選んだ。

その結果、6年前に魔導師ギルド連盟を追放。しかし彼等は命令に従わず、活動を続けている」

「……私、やっぱり帰るのかな」

エルザさんの話を聞き、ダラダラと冷や汗を掻くルーシー様。

一体どうしたのでしょう?。そう珍しい話でもないと思うのですが…。

「不覚だ!。もっと早くに気付いていれば、全員血祭りに上げて何をするのか白状させたものを…!」

「恐ッ!?!」

「成る程。鉄アイゼンヴァルトの森はそのララバイで何かしようとしている。どうせロクでもねエ!。だから食い止めたい、と」

「そうだ。ギルド1つを相手にする以上、私一人では心許ない。だからお前たちの力を借りた」

そう言つと、エルザさんは一度言葉を止め、窓の外を睨みつけた。

「鉄アイゼンヴァルトの森に乗り込むぞ!」

「面白そうだな」

「あい!」

『久々の大暴れですね』

「来るんじゃないかった…!」

しかし、評議院のギルド間抗争禁止条約とやらは良いのでしょうか？

あれは確か正規ギルドだけではなく、闇ギルドとの抗争も禁止されているハズでしたが…。

『まあ要はバレなければ良いんですね。全て残らず潰せば問題ありません』

もしルーシィにルーツの心が聞こえたのならこう言っただろう。

やっぱりこの人もフェアリーテイルの魔導師だ、と。

第八話 呪歌《ララバイ》

何事もなくオニバス駅へと着いた私達。

……？誰か足りないような……？

「アイゼンヴァルト鉄の森の奴等はまだこの街にいるのか？」

「分かん。それをこれから調べる」

「雲を掴むような話だけ……」

「あれ？ナツは？」

「……あぁー!!」

ハッピーさんの一言に周りを見渡すルーシイ様。

その隣で、無情にも私達が乗って来た汽車が発車していった。

「話に夢中で忘れていた……。なんといいことだ！アイツは乗り物に弱いというのに……！私の過失だ。とりあえず私を殴ってくれないか！」

「まあまあ……」

自虐に入るエルザさんを諭すルーシイ様。

さて、どうしましょうか？

汽車自体は別に走って追いつけないスピードではありませんが……。

うーん、あまり悩んでいるとエルザが汽車を止めかねませんし……

「お、お客様！困りますー！」

「仲間のためだ。分かってくれ」

「無茶なこと言わんで下さいー！」

どつやら既に遅かったようですな。

声に顔を上げると、エルザさんが緊急停止レバーを作動させてい

た。

思い付いたら即行動。流石ですね。
なら私もどうにかするとしましょう。

『ルーシー様』

私は呆然としながらエルザさんの行動を見ている彼女に話しかけた。

（ルーシー side）

ナツを汽車の中に置いてきてしまった。
それだけなら良かったけど、運が悪い事に汽車が発車してしまっ
た。

どうしようと慌てっているとエルザは緊急停止用レバーを作動させ
ちやうし、グレイとハッピーに至ってはのんびりすぎ！

こうなったらもうルーツさんしか…！と思っていると、ルーツさん
の方から話しかけられた。

『ルーシー様』

「は、はい」

『少し離れますね。すぐに戻ってきますので』

「え？ちよ、ルーツさん!？」

ルーツさんはニコリと笑いながら、颯爽と駅から出て行ってしまっ
た。

ちよ、なんでー!？」

とうがかさっきはスルーしちゃったけど、様って何!？」

「あ、もしかして……ううん。でも……まさか」

不意に思った。

もしかしてルーツさん、私の正体を知ってる…？

でも私は、一度だって自分のファミリィネームを名乗ったことなんて無い。

だけでもし知ってて、私の事をそう呼んでいるのなら……。

「ルーシィ、ルーツは誰にでも様だよ」

「え？ そうなの？」

「あい。最初はギルドの皆も苦労したよ。…やめさせるのに」

「そ、そうなんだ…」

まるで心を読んだみたいなタイミングだったけど、ホツとした。ただど様付けが標準ってどういうこと？ 昔、何かあったのかな？ 不謹慎だけど、ちょっとだけルーツさんの過去を知りたいと思った。

「私達の荷物を、ホテル・チリ」まで頼む」

「なんで私が!？」

って、そんなことを思ってる場合じゃない!？」

エルザが荷物を駅員に押し付けている。

だ、誰かー！ エルザを止めて!!

『エルザさん、荷物は後でホテルの方が取りに来て下さるそうですよ』

「む？ そうか」

「た、助かった…」

私の心の叫びが届いたのか、ナイスタイミングでルーツさんが戻って来てくれた。

すぐに戻って来てくれるって言ってたけど、本当にすぐ戻って来て

くれた。

でも、一体何をしに行つてたんだろっ？

ホテルの人と話し合つてきた、つてことは分かつたけど。

『ああそれと、魔道四輪をレンタルしてきました。これなら追いつけるでしょっ』

「そうか、よくやった！すぐに追いかけるぞー！」

そつ言つて走り出したエルザ。

すっい、やっぱりルーツつて頼りになる！

『皆さんも行きましょっ？エルザさんに置いて行かれますよ？』

「あいさー！」

「おっ」

「はいー！」

私達もエルザを追い、魔道四輪へ乗り込んだ。

（ルーシィside終）

魔道四輪は運転している人の魔力によってスピードが変わってくる。

エルザさんの凄まじい魔力によって、私達はなんとか汽車に追いついた。

「ナツー！」

止まっている汽車に向かって叫ぶルーシー様だが、運悪く再び列車は動き出した。

こうなったら飛び乗ろうかと車の屋根に立った時、列車の窓を割ってナツさんが飛び出してきた。

「うおおおおおー!？」

『ッ……』

私は軽く驚きながらも、なんとかナツさんを抱きとめた。

重力とスピードで身体を持って行かれそうだったが、そこはなんとか耐えた。

ああ、本当に私が龍で良かったですよ。

「さ、サンキュー。ルーツ」

『いえ』

「ナツー無事か！」

私がナツさんを受け止めたことを確認したのか、エルザさんが急ブレーキをかけた。

完全に車が停止した所で、私とナツさんは車の屋根から落ちた。

「うえっ……おっぶ……」

『大丈夫ですか?』

吐きそうになっているナツさんの背中をさする。

顔を伺うと、治りかけてはいるが所々に掠り傷のようなものを見した。

まさか、汽車の中で戦闘が…?

「何やってんだ、テメエは」

「う、うるせー！よくも置いて行きやがったな！」

「すまない。だが怪我はないようだな。なによりだった」

エルザさんがそう言ってナツさんの頭を抱き寄せた。

それだけなら微笑ましいのですが、エルザさんは鎧を着ているので

…

ゴソッ

「いっー」

まあ、普通に頭をぶつけましたね。

流星にあの音は私でも痛そうです。

『所でナツさん、汽車で何かありませんでしたか？例えばそう、戦闘とか』

「！ああ、よく分かったな。変なヤツに絡まれたんだ」

「変なヤツ？」

「アイゼンヴァルト鉄の森とか言ってる……」

「馬鹿者オー！」

「ぐはッ！」

ナツさんの口から鉄のアイゼンヴァルト森の名が出た瞬間、エルザさんから平手が飛んできた。

「アイゼンヴァルト鉄の森は私達が追っている者だ！何故みすみす見逃した！」

「そ、そんな話し初めて聞いたぞ」

「さっき説明しただろう！人の話はちゃんと聞け！」

頭に疑問符を浮かべているナツさん。

確かに初耳ですよ。気絶していたんですから。とぼっちりを食らうのは嫌なので何も言いませんが。

「色んな意味で凄い人…」

「だろ」

『ですね』

「あい。それがエルザです」

でもルーシイさん、順応力高いですね。

少しずつではありますがエルザさんに慣れてきています。

元々あまり人見知りのしない方、なんでしょうね。

「こうしてはおれん！先程の汽車に乗っていたのだな？すぐに追っぞ」

「どんなヤツだった？」

「あんま特徴無かったな…。あ、そうだ。そっいやドクロっぽい笛持ってたな。三つ目があるドクロだった」

「三つ目の髑髏？」

「趣味悪イな」

「……ルーシイ、どっしたの？」

三つ目の髑髏と聞いてから、ルーシイさんの表情が険しくなった。

「これは……」

『何か知っているんですね？』

「うん。ララバイ、呪いの歌……死の魔法！」

呪いの歌、ですか。

私が元いた世界にも狩猟笛という演奏しながら戦う武器がありました。ですが、呪いの歌なんてありませんでした。

最近でこそ劣化しましたが、昔は聞くだけで瀕死の傷が一瞬にして

回復、とかザラでしたよ。

技術が廃れたのか、それとも受け継ぐ者がいなくなったのか…。

あの頃の絶望は今でも思い出せますね。どうぞこのまま廃れやがって下さい。

「何？」

「呪いの歌？呪歌のことか？」

「私も本で読んだことしか無いけど、禁止されている魔法の1つに呪殺ってあるでしょ？」

「ああ。対象者の命を滅ぼす、呪われた黒魔法だ」

「ララバイは、もっと恐ろしいの！」

命を滅ぼすより、恐ろしい…？

一体どういことなんでしょう？

『どういう意味ですか？』

「その笛の音を聞いた人全てを呪殺する……」
「集団呪殺魔法」
ララバイ 呪歌

「！」

全て？笛の音を聞いた者が？

それはつまり、演奏者ごと……自滅、させる…？

『ッ、エルザさん！』

「分かっている!!」

ルーシイ様からの説明を受けた私達は急いで魔道四輪に乗り込み、汽車の後を追った。

第九話 籠の鳥

エルザさんが全力を出してくれたお陰で、私達はあまり時間を掛けずにオシバナ駅へと到着した。

「なんだアレは！」

しかし、何故かオシバナ駅からは黒い煙があがっていた。街の人達も野次馬の如く、駅周辺に集まっている。

「中の様子はどうなっている！」

「ん？なんだねキミは……グハッ！」

「中の様子は！」

「え？……ガハッ！」

「中の様子！」

「何を……グエッ！」

駅員の人に中の様子を聞こうとしているエルザさん。

しかし、即答できない者は要らないとばかりに殴り倒している。

エルザさん、それじゃ逆効果ですよ。

「エルザがどういう奴か分かって来たろ？」

「何故脱ぐ!？」

「うおー！」

私はもう慣れたので 그레이さんの脱ぎ癖に関しては突っ込みませ
ん。

第一、私も人間の姿を解けば全裸ですしね。人のことを言えた立
場ではありません。

「アイゼンヴァルト鉄の森は中だ。行くぞ！」

「おうー！」

『はー』

エルザさんの後に続き、私達は駅の中に突入した。

中はあまり人の気配がしませんね…。

まあ、ある程度はいるようですけどね。足音とか聞こえますし。

「軍の一個小隊が突入したが、まだ戻ってこないらしい」

『アイゼンヴァルト鉄の森と交戦した、と考えた方が良いでしょうね』

「恐らくな」

そのまま駅の中を走っていると、倒れている人を見つけた。

それも一人や二人ではない。

「あれは…！」

「全滅してるよー！」

軍の人たち全員がうつ伏せになり、苦しそうに呻いている。

良かった、死んではいなさそうですね。

血も出ていませんし、軽い気絶や脳震盪でしょう。

「相手はギルド丸ごと1つ。つまり全員が魔導師だ。軍の小隊では話

にならんか…」

「やはり来たな、フェアリーテイルの蠅共」

「！！」

「な、何この数…！」

駅の中央に着くと、そこには大勢の人達がいた。

恐らく、アイゼンヴァルト鉄の森の魔導師達でしょう。

「貴様がエリゴールか！」

エルザさんが顔を上げた先を見ると、そこには巨大な鎌を持った人物がいた。

不敵な笑みを浮かべて、私達の方を見ている。

「ナツ、起きて！仕事よー！」

「っ、っウ……………」

「無理だよ！汽車、魔道四輪、ルーシィ……………乗り物酔いのスリーコンボだもんー！」

「私は乗り物かい!!」

『大丈夫。そつとしておけばその内起きますよ』

少なくとも、戦闘が始まれば起きるでしょう。

「ここはもつ地面の上ですし。」

「貴様等の目的はなんだ！ララバイで何をしようとしている！」

「分かんねエのか？駅には何がある！」

「飛んだ!？」

「風の魔法だ！」

ふわりと空中に浮かぶエリゴール。

そして彼はそのまま、駅内に設置されていたスピーカーの上に乗った。

「貴様、ララバイを放送するつもりか！」

「ハッハッハ！駅には何千にも野次馬が集まっている。いやあ？音量を上げれば街中に響くだろう。……………死のメロディがな！」

「何の罪もない人達に、ララバイの笛の音を聞かせるつもりか！」

「これは粛清なのだ。権利を奪われた者の存在を知らず、『あ、1つ質問良いですか？』……………なんだデメエは！」

台詞を途中で遮られたのが癪に障ったのか、私に対して怒鳴るエリゴール。

言っておきますが、私は敵と認識した人間には様なんて付けません。

どっせすぐに呼ばなくなる名前ですし、ね。

『ああ、貴方ではありません。そちらの方々にです』

「は？」

「俺達……？」

私が質問したのはエリゴールではなく、他の鉄アイゼンザムルトの森の魔導師達。基本的に、こういった質問は主犯格の人物にするとはぐらかされて終わりです。

『耳栓、持ってますか？』

「耳栓？」

「何言ってるんだコイツ……」

「頭が可笑しくなったか？ハエさんよ」

『もう結構です。その下種な口を閉じてて下さい』

「……っんだとコリア！！」

怒り狂う彼等を見無視し、私は再びエリゴールに視線を向ける。

エルザさん達も私の真意が掴めないのか、無言のままだ。

そんなに難しい事では無いのですがね……。

『いい加減、本当の目的を言ったらどうですか？』

「……なんだと？」

「ルーッ、どっいつことだ」

説明を求めてくるエルザさんに、私は自分の考えを話した。

『聞いた者全てを呪殺する魔法。スピーカーで流せば、アイゼンヴァルト鉄の森の方々も唯では済みませんよね?』

「!」

「:…そっか、自分たちも音を聞いちゃうんだ……」

「耳栓の質問は、そういうことだったのだな」

『はい。彼等に音を防ぐ手段が無い以上、目的はここでララバイを送ることではありません』

私がそう言い切ると、エルザさんがキツとエリゴールを睨みつけた。

その顔は少しの嘘も許さない、とでも言いたげな顔です。

「ほお、蠅の中にも少しは頭の切れるヤツがいたか」

『お褒めの言葉は光栄ですが、ご褒美は目的を白状してくれた方が嬉しいですね』

「フン。……やれ!」

「残念だったな、フェアリーテイルの蠅共!」

アイゼンヴァルトエリゴールの言葉を切っ掛けに、一斉に攻撃を仕掛けてくる鉄の森。

いつの間にか復活したナツさんが炎、グレイさんが氷、私が雷で攻撃を相殺する。

「ナツ…! ナイス復活!」

「おうおう、なんかいっぱい居るじゃねエか」

「敵よ敵! みーんな敵!」

「へっ、面白そうじゃねエか!」

ナツさんが凄みのある顔で、拳を作る。

いつもながらに悪そうな顔ですね!。

「あとは任せたぞ。闇ギルドの恐ろしさを分かせてやれ！」
「逃げた!？」

エリゴールは空中に浮かび、消えた。
あれも風魔法の一種なんでしょうね……。
色んな魔法があるものです。

「ナツ、グレイ。二人でヤツを追うんだ」
「ん？」

「お前たち二人が力を合わせれば、死神エリゴールにだって負けるはずがない」

エルザさんがそう言うが、お互いに無言で睨みあったまま。
返事が無い事に怒ったのか、エルザさんから激を飛ばされた。

「聞いているのか!!」
「あいさー……」

あまりの恐さにハッピーさんと化した2人は、そのまま凄いスピードでエリゴールを追って行った。

その時に鉄アイゼンヴァルトの森の方も二人ほど姿を消しましたが……まあ、あの程度の魔導師なら問題ないでしょう。

「コイツ等を片付けたら、私達もすぐに追っぞ」

「この数を3人で!？」

「ヒッヒ、女2人に優男1人で何をしてくれるんだ？」

「羽を塗り取ってやるぜ、蠅共」

「イッヒッヒー！」

「可愛すぎるのも、罪なモノね……」

「ルーシィ、帰って来てー」

チラリとルーシー様の方を見ると、どうやら自分の世界に入っているみたいですよ。

あまりの人数を前に現実逃避でもしたのでしょうか？

「下劣な……！」

「剣が出てきた！魔法剣!？」

『私も混ざらせて貰いますよ』

「ルーツさんもあんな大剣を片手で軽々と……！」

エルザさんが魔法を発動させると、空中に剣が出現した。

戦闘態勢に入ったエルザさんを見て、私も背負っていた【曉】を抜く。

久々の戦闘です。ワクワクしますね。

「これ以上フェアリーテイルを侮辱してみる。貴様等の明日は保障できんぞー！」

『ああ、私の場合は保障する気もないので悪しからずでお願いします』

「珍しくもねえ！」

「こっちにも魔法剣士はゾロゾロいるぜ!!」

そう言って、彼等は一斉に切りかかってくる。

私とエルザさんはその攻撃が当たる前に、相手の武器を破壊して薙ぎ払った。

「ハアッ！」

『次はこちらの番ですよ』

私は左、エルザさんは右に向かってそれぞれ敵を倒していく。

同じ場所で戦うより、こちらの方が効率が良いですからね。

敵を薙ぎ払いながらエルザさんを見てみると、コロコロと武器を変

えて戦っている。

アレでは相手も対処のしようがありませんね。

『余所見してんじゃねエぞ！クソが！』

『おっと』

光系の魔法が飛んでくるも、持っていた【曉】を盾に防いだ。その隙を狙って四方八方から武器を持った人たちが襲いかかってくる。

良い連携プレーですけど……遅いですよ？

「ぐはっ……！」

「な、なんだコイツ！」

「速いッ!？」

いえ、私が速いのではなくて貴方達が遅いのだと思いますが。しかし数が無駄に多いだけあって、面倒ですね。

『エルザさん……』

「ああ！分かってる……！」

埒が明かれないと思った私は、エルザさんに声を掛ける。

「どうやらエルザさんの方も同じことを考えていたようですね。

「1つ1つ潰すのなら、一撃で倒す方が良い。」

「これで一掃する……！」

『助力しましょう』

エルザさんが武器ごと鎧を換装した。

まるで天使のようなその鎧の名は、天輪の鎧。

そして彼女を中心に、数十本もの剣が円状に出現した。

その姿を見て、私も【曉】を構えた。

「舞え、剣たちよ！循環の剣！」

『風を切り裂き地を焼け。災厄紅雷！』

エルザさんが剣を投げるのと同時に、私も【曉】から雷を相手に向かって放出させる。

相手はもれなく吹っ飛ばされ、ほぼ全員が口から黒い煙を吐いている。

ふう、我ながらよく手加減出来ました。殺さない様に調節するのは、結構難しいんですね。

「す、凄い。一撃でほぼ全滅……」

「あー……」

後ろから、ルーシイ様とハッピーさんの声が聞こえる。

あちらの方もどうやら無事の様子ですね。良かった。

「クソ！俺様が相手だ！」

私がルーシイ様たちの方へ意識を向けていると、生き残った2人の内の1人が殴りかかって来た。

そして私が反応するより先にエルザさんによって反撃された。

……此処まで来ると、同情の念を覚えますね。まあ自業自得なのですが。

「ま、間違いないエー！コイツ等は妖精女王のエルザと、白銀のルーツ！」

一人しか残っていないのに、一体誰に対して語っているんでしょうか？

私は構えていた【曉】を背負い、ゆっくりと相手に近付いた。

「相手が悪すぎるー！」

『あ、』

その速さを戦闘で活かせば良いでしょう……。

と思うほどのスピードで相手は逃走した。

人間、いつの時代も逃げ足だけは速いですよね。

ある意味で感心します。

「エリゴールの所に向かうかもしれん。追ってくれ」

「私が!？」

「頼む！」

「は、はいー！」

後ろに般若が見えるような顔で頼むエルザさん。いやそれ、若干脅しが入ってますよ。

ルーシイ様とハッピーさんはその顔に恐れをなしたのか、さっきの相手と良い勝負な走りで追いかけて行った。

「……ルーツ、何故お前も行かん」

『もう敵はいません。強がらなくても良いでしょう?』

「一体何の……ッ、」

『おっと』

ルーシイ様と共に行かなかった私を睨みつけるエルザさん。

しかし次の瞬間、力が入らなくなった膝が折れた。

私はエルザさんの膝が地面に着く前に、その身体を支えた。

『魔道四輪での全力疾走に天輪の鎧。魔力が枯渇しても可笑しくありませんよ?』

「フッ、バレていたか」

『いつもより魔法の威力も落ちていましたしね』
「そうか。……もう大丈夫だ」

そう言うと、エルザさんは自力で立ち上がった。

もう魔力が回復しつつあるのでしょいか？

若者は回復速度が速くて良いですねー。

『後は皆さんに任せて、少し休みましょう』

「ああ。すまないが、ルーツは外にいる住民たちを避難させてくれ」

『分かりました。避難が終わり次第、すぐに戻ります』

魔力の回復に専念するエルザさんを残し、私は駅の外へと出た。

そうそう、来る途中に倒れていた軍の人達の回収も忘れてはいけません。

第十話 解除魔導師《デイスペラー》

「キミ！一体中で何を…」

『お借りします』

「あ、ちよっ…！」

駅の外に出ると、野次馬からの好奇心の目が突き刺さる。

注目してくれているのなら好都合ですね。

私は駅員の方から拝借したメガホンを口元に当てた。

『この駅は闇の魔導師達によって占拠されています！そして彼等はこの街を滅ぼす魔法を発動させてようとしている。出来るだけ遠くに避難して下さい！』

「ほ、滅ぼすだって!？」

「早く逃げないと…！」

「おい邪魔だ！どけ！」

事態を飲み込めず、混乱を見せる住民の人達。

それでも一人が逃げる姿勢を見せれば、次々と彼等は駅から離れて行った。

「おいキミ！なんてことを言うんだ！そんなパニックになることを…」

『事実を隠しても仕方ありません。それより、貴方達も早く避難し

て下さい』

「えっ？」

『ここは危険です』

真剣な顔でハッキリと言えば、どつやら彼等も事の重大さに気付い

てくれたようだ。

困惑した様子だったが、彼等も避難を始めた。

……ああ、メガホンを返し忘れてしまいました。後日、届けることにしましょう。

「よお、白銀のルーシ」

『エリゴール……。まさか貴方の方から姿を現してくれるとは思いませんでしたよ』

避難する住民たちを見守っていると、目の前にエリゴールが姿を見せた。

私が【曉】を構えるとエリゴールは可笑しそうに笑った。

「この余裕、一体何でしょう？」

「テムエとは女王様共々、一度戦って見たかったが……」

『では望みが叶いますね』

「残念だ。今は相手をしてる暇はねえ！」

『……』

エリゴールが何かの魔法を発動すると同時に、私の身体は後ろに吹っ飛ばされた。

いえ、正確には吹っ飛ばすと言うよりも、中に引き込まれた””でしょうか？

体勢を整えて顔を上げると、そこには風の壁が駅全体を覆っていた。

『これは、風の境界……？』

「それは魔風壁。無理に外に出ようとすれば、風に身体を切り刻まれるぞ」

『成る程。それはまた、面倒ですね』

私はそう言っつて、風の中に腕を突っ込んだ。
流石の私でもちよつと痛いですね。

ですが、多少無理を通せば出れなくはありません。

「化け物がコイツ…」

『酷い言い分ですね。そう言われたのは2回目ですよ』

一度目は勿論ギルダーツさんです。

あの時は龍の姿だったので、仕方ないと言えば仕方ないのですが。
まあその後に綺麗と言ってくれたのでキャラにしましたけど。

「チツ、テメエ等の所為で大分時間を食っちゃったが……俺はこれで
失礼させてもらつ」

『待ちなさい…』

しかし私の声も虚しく、エリゴールは消えた。

目的は分ならず仕舞いですし、早くここから出なければ…。

『くっ……ッ』

耐えられるとはいえ、痛いものは痛い。

龍の身体なら未だしも、人間ですからね。

「ルーツ…これは一体…」

『エルザさん…』

様子の変化に気付いたのか、エルザさんが此方に近付いてくる。

そして、つい気を抜いた瞬間、再び身体を吹っ飛ばされた。

くっ、油断しました。けれどこれで何となくの感覚は掴めました。

次こそは……

「やめるルーツ！その腕では無理だ！」
『え？……ああ、気付きませんでした』

エルザさんの言葉に腕を見ると、そこには赤い筋が何本もあった。どうやら痛覚の方が麻痺してある程度の痛みを遮断していたようです。

ですがこれくらいの傷、30分もあれば完治するでしょう。

「あまり無理をするな」

『……それ、エルザさんとナツさんには言われたくないです』

「ん？ナツがどうかしたのか？」

『いえ、何でもありません』

下手な事を言っただけ被害を受けたことはありませんからね。

沈黙は金とは、人間も便利な言葉を作ったものです。

「しかし、これでは外に出れん……」

『先程倒した鉄アイゼンヴァルトの森の方たちに聞いてみる他ありませんね』

「そうだな」

私達は一度駅の広間に戻り、魔風壁の解除方法を彼等に聞いた。

エルザさんが彼等を縛っておいてくれたため、聞くのにそう時間は掛からなかった。

まあ、返事は全員もれなく「知らない」でしたが。

「吐け！魔風壁の解除方法はなんだ！」

「し、知らねエって！」

『エルザさん、本当に知らないみたいですよ』

さて、全員知らないと困りましたね……。

手がない訳ではありませんが、あまり気乗りはしません。

「エルザ！ルーツ！」

「グレイ…。ナツは一緒じゃないのか？」

「二手に分かれた。つか、それどころじゃねエ！」

グレイさんの焦りようからして、何か分かったのでしょうか？

何にせよ、穏やかに済むようなことではありませんね。

「鉄アイゼンヴァルトの森の本当の目的は、この先の街だ！」

『この先？確か次の駅はクローバー駅、でしたね』

「クローバー……ッ！定例会か！」

エルザさんの言葉に、私もハッと息を飲んだ。

成る程、クローバー駅に行く方法はこの駅のみ。

唯一の交通手段を遮断し、自身は風の魔法で移動する……という算段ですか。

「だが、この駅には魔風壁が…」

「ああ。さっき見てきた。無理矢理出ようとすればミンチになるぜ」

「経験済みのヤツがそこにいる」

チラリとさり気なく私を見るエルザさん。

ちよっ、そこはスルーする所ですよ!?

「なっ、ルーツ！お前、その腕…」

ほらー！気付かれたじゃないですか！本当にもう何でもないので…。

今はもう痛みすらありません。痛々しいのは見た目だけです。

だからそんなに心配そうな目で見ないで下さい。私の良心的ダメージが…！

『大したことはありません』

「嘘つけ。ボロボロじゃねエか」

『本当に大丈夫です。こんなの舐めておけば治ります』

「治るか!!」

いや、治りますよ。龍の治癒力を嘗めないで下さい。

……今は人間ですけど。

「しかし、こうしている間にもエリゴールはマスターたちのところへ近付いているというのに……」

『何か解除方法が分かれば良いのですが』

「……っ！そういえば、アイゼンヴァルト鉄の森の中にカゲという奴がいたハズだ。確か奴は、ララバイの封印をたった一人で解除した！」

「アイゼンヴァルトデイスペラー……解除魔導師か！それなら魔風壁も！」

「探すぞ！カゲを見つuckerんだ！」

「おうー！」

『はい』

そう言っって、私達はカゲを見つけるために走り出した。

そして偶然にも、アイゼンヴァルト鉄の森の不吉な会話が耳に入ってきた。

『（……これは、急いで見つけた方が良さそうですね）』

仲間を始末するなんて、そんな事、誰にもさせたくない。

第十一話 脱出

「ナツ！」

駅の中を探し回っていると、轟音が聞こえてきた。

その発生源に向かうと、カゲを吹っ飛ばすナツさんを見つけた。

「それ以上はいい！彼が必要なんだ！」

「でかした！クソ炎！」

『ナツさん！そこにいると危ないですよ！』

一気に言われたためか、頭の上に何個も疑問符を浮かべるナツさん。
ん。

その時、エルザさんが魔法剣を取り出して彼に斬りかかった。

「ひっ、なんか知んねエけどスンマセン！」

半泣きになりながら、エルザさんの攻撃を避けるナツさん。

けれど、エルザさんの標的はナツさんの後ろにいるカゲだ。

ああ、だから危ないと言ったのに…。

「四の五の言わず、魔風壁を解いてもらおう。いいな」

「わ、分かった…」

『ッ!?避けて!!』

カゲが承諾した瞬間、嫌な魔力を感じ取った私は咄嗟に彼を突き飛ばした。

代わりに、魔法を通して何かが私の身体を刺そうとしている。

が、その程度の魔法では龍の身体を傷つけることは出来ませんよ？

『知ってますか？同族殺しは自然界の中でも禁忌の1つ、なんですよ？』

お互いに承諾しているなら未だしも、きつとコレは違う。

私は、私を刺そうとしていた腕を掴み、目の前の壁を思いっ切り殴った。

『ハッ！』

「ぐわあああああっ!!」

壁が粉々に破壊され、中に隠れていた人物ごと吹っ飛んだ。うん。少しスッキリしました。

しかし、結局建造物の一部を破壊してしまいましたし、これでも私もナツさんのことを言えませぬ。

「な、何故だ」

『アイゼンヴァルト……鉄の森の中に、解除魔導師は貴方一人しかいません。その貴方がいなくなれば、誰もこの駅から出ることは出来ない。……そう、言っていましたよ』

放心しているカゲに、私は迷いながらも真実を告げた。

本当は知らないままの方が良いのかもしれない。

仲間に裏切られたなんて、きつと信じたくもない事だ。

「仲間じゃ、ねエのかよ。同じギルドの……仲間じゃねエのかよ!!」

『ナツさん……』

グツと痛いほど拳を握りしめ、近くの壁を殴るナツさん。

そこから感じ取れるのは、抑えきれないほどの怒り。

例え敵であっても、それは関係ないのですね。

「カゲ！おいカゲ！」

『あの、え、エルザさん…？』

未だに放心状態のカゲに、頭をガンガンと打ちつけながら揺らすエルザさん。

その、この状態にも関わらず真実を告げた私も酷いとは思いますが、流石にそれは…。

精神と物理のダブルパンチは如何なものかと。

「こんな状態じゃ魔法なんて使えねえぞ！」

「やって貰わねばならないんだ！」

……。

私はその場からそっと一歩離れ、笑顔で見守る事にした。

これはもう、時間に身を任せることにしましょう。

「え、えーと、お邪魔だったかしら…？」

「……あい」

『ルーシー様にハッピーさん。来たんですね』

「これ、どういう状況ですか？それと様は要らないです」

『貴女まで！』

！
今まで何も言わなかったら、呼んでいいものだと思っていたのに…

最後の最後でなんたる仕打ち！

私は若干落ち込みながら、状況の説明をぎっくりと話した。

「え!? エリゴールの目的って、定例会だったの!?」
「な、じっちゃんか!」

場所を移し、目の前でゴウゴウと音を立てている魔風壁を見る。
カゲは……まあ、気絶してます。

本人の名誉のために言い訳するなら、安心して気絶した訳ではなく、エルザさんの壁打ちによる軽い脳震盪で気絶しただけです。
とはいえ、暫くは起きそつにないですね。

「魔道四輪車で追い付けなくはない。だが、この魔風壁をどうにかしねエと外には出られねエ」

「そんな」

「ウオオオオオオ!!」

手に炎を纏い、魔風壁に攻撃するナツさん。

しかし、その攻撃はあっさりと弾かれた。

「外に出ようとする」と「レだ」

身体を吹っ飛ばされたナツさんを見て、冷静に言うグレイさん。
ルーシイ様……じゃなくて、ルーシイさんはその様子をアワアワとした様子で見ている。

「起きろ、カゲ! 力を貸してくれ!」

『エルザさん、それ逆効果です』

さらにカゲの頭をガンガンと床に打ちつけるエルザさん。

脳震盪起こしてますから！そっとしておいてあげて下さい！！

「クソオ！こんなモン、突き破ってやらマ!!」

再び魔風壁に攻撃するナツさん。

しかし結果は変わらず、身体を吹っ飛ばされた。

「ナツ！」

「力じゃどうにもなんねェんだよ…」

「急がなきゃマズイよ！アンタの魔法で凍らせたりとか出来ないの
!?!」

「出来たらとっくにやってるよ」

「ルーツさんは…!」

「ん？そうですね、再挑戦してみますか」

話を振られたので、手をパキリと鳴らしながら魔風壁の前に立つ。
さて、前にやった時に感覚は掴めましたし、今回は少し工夫して

……

「やめるルーツ！次は本当に持っていかれるぞ！」

『大丈夫ですよ』

「前の時にズタズタにされただろ。なんでそんなに呑気なんだ…」

ふむ、心配性のグレイさんに免じて腕を突っ込むのは止めます。

けどリトライはします。たかが一度失敗したくらいで諦めるのは
祖龍の名に傷が付きます。

人生は何事も挑戦と言いますしね。……龍ですけど。

『ふうー……』

【曉】を両手で構え、深く息を吐く。

不規則な音と共に紅い雷が大剣に纏わりつき、光を増していく。
放電しそうな程の雷を大剣だけに凝縮し、溜めて、溜めて、溜めて

……

『災厄紅雷』

撃つ

「なっ!？」

「きゃあ！」

「スゲエ！」

「あい！」

紅雷と暴風がせめぎ合い、激しい轟音が鼓膜を刺激する。

ひりひりと、まるで焼けた様な痛みが肌を刺す。

刹那、向こう側の景色が広がり、再び風によって閉ざされた。

『……やはり駄目でしたか』

熱くなった【暁】を冷ますように軽く振るい、背負い直す。

結構魔力を消費しましたね……。今ので五分の一程度は持って行かれたでしょうか？

「一瞬だったけど、あの風を切り裂くなんて……」

「ああ、信じらんねエぜ」

「ルーツ、凄いな！」

『つと、ナツさん……』

抱きついてきたナツさんを受け止め、その頭を撫でる。

結局ダメだった訳ですが、こんなに嬉しそうにされるとは……。

別に大したことはしてないんですがね。

「だが今のも駄目となると、別の方法を考えねばなるまい」
『そうですね。単純に力技では無意味と証明されましたし』

問題は振り出しに戻り、再び悩みだす私達。

その横で、突然ハッピーさんが叫んだ。

「あー！ー!!!」

『っ、ハッピーさん？どうかしました？』

「ルーシィー！思い出したよー！」

「え？な、何が…？」

「コレ！」

そう言っつて、ハッピーさんは金色の鍵を取り出した。

アレは確か黄道十二門の鍵、でしたね。

「それ、バルゴの鍵!? 駄目じゃない！勝手に持って来ちゃ！」

「違っつよ！バルゴ本人が“ルーシィへ”っつて！」

「え!？」

バルゴ……乙女座のことですね。

ああ、そういえばルーシィさんは星霊魔導師でしたね。

「バルゴ? ……ああ！あのメイド「ゴリラ」！」

『冥土? あの見えるか見えないか微妙な服で敵味方構わず魅了しながら自身は相手をフルボッコして天国へ送り出し、容赦なく敵の亡骸から獲物を剥ぎ取るという噂の…?』

「それどんなメイドよ!？」

どんなつて、こんなメイドですが。

正直、あんな服を着て来られたら戦意が喪失するんですよね。

「エバルルが逮捕されたから契約が解除になったんだって。そしたら次はルーシィと契約したいってオイラン家に訪ねて来たんだ」

「嬉しい申し出だけど、今はそれどころじゃないでしょ？ 脱出方法を考えないと」

「でも……」

「うるさい！ 猫は黙って、ニャアニャア」 言ってなさい……」

ハッピーさんの頬つぺたを伸ばすルーシィさん。

なんか、後ろに黒いオーラが出てますよ……？

「……「イツも時々怖いな……」」

「意外と強エんだぜ！」

若干引き気味のグレイさんと、それと対称的に何だか楽しそうなナツさん。

ふふっ、こんな状況ですけど何だか微笑ましいですね。

ほのぼのと温かい目で見守っていると、ハッピーさんが私の方へ飛んできました。

「ルーシー……」

『はい。どうしました？』

泣くまでいってませんが、若干涙目になっているハッピーさん。
片手で抱えながら、引っぱられた頬を撫でた。

「バルゴは地面に潜れるし、魔風壁の下を通過して出られるかなって才イラ思ったの……」

『そうですね。魔風壁の下を通過して………はい？』

「な、何……？」

「マジかよ……？」

「え、えーと…？」
「あ！そっか…！」

成る程、その手がありましたね。
何も結界を破らずとも、避けて通ればいい話でした。
何故こんな事に気付かなかったのでしょうか…。

「やるじゃないハッピー！もう、なんで早く言わないのよー！」
「ルーシィが抓ったから」

「ごめん！後で何かお詫びするから！しますから！させて頂きます！
兎に角鍵を貸してー！」
「あい！お詫びよろしくね！」

お詫びの言葉にあっさり鍵を渡すハッピーさん。
腕の中で機嫌の良いハッピーさんに、小さく耳打ちした。

『狙ってました？』
「あい」
『ふふ、策士ですねー』

猫だからと侮るべからず、ですね。私は侮ってませんが。二度と侮るものですか。

だって普通に剣やらハンマーやらブーメラン、更には爆弾まで投げつけてくる猫がいましたから。
果てにこやし玉まで投げつけられた日にはガチ泣きしましたね。

だってアレ洗っても臭いが消えないんですよ！一週間くらい軽く残るんですよ！

久々に来た友達に「あ、うん。…ごめん。今日は帰るわ」って憐憫の眼差しで気遣われながら避けられた時の気持ち分かります！？

ああ、思い出したらトラウマが…！

「ルーツ、顔色悪いよ。大丈夫？」

『…………ええ、大丈夫です』

下から覗き込むようにして顔を見てきたハッピーさんに、私は思わず視線を逸らした。

言えない、猫一匹に祖龍が泣かされたなんて絶対に言えない。

「我、星霊界との道を繋ぐ者！汝、その呼掛けに応え門を潜れ！」

おっと、ルーシィさんの魔法が始まりましたね。

星霊魔導師の魔法は初めて見ますから、少し興味深いです。

まあ星霊自体は見たことありますが。

「開け、処女宮の扉！バルゴ！」

「お呼びでしょうか？ご主人様」

「…………誰？」

出てきたのは、両手に手枷をしたメイド服の女性。

ナツさんより少し鮮やかなピンク色の髪をしている。

「よう、マルゴ。激痩せやしたな」

「バルゴです。あの時はご迷惑をおかけしました」

「あ、アンタその格好……！」

「私はご主人様の忠実なる星霊。ご主人様の望む姿にて仕事をさせて頂きます」

「前の方が迫力あつて強そうだったぞ」

「そうですか？では……」

バルゴ……さん？（何故か様を付けては逆に失礼な気がした）はそう言つと、巨大化した。

確かに、そちらの姿の方が強そうですね。

「余計な事は言わんでいい！元の華奢な方でいいから！」
「承知しました」

再び、バルゴさんは出てきた方の姿に戻った。
私としては、さっきの巨大な方が好みなのですが…。
いえ、目の保養目的なら今のままでも良いのですが、なんといいま
すか……。こう、本能が刺激されるといつか……。食欲が湧き立つとい
うか……。

アレですね。最近あまり生肉を食べていない所為です。
思考が食に対してストレートになっている気がします。

「兎に角時間がないの！契約は後回しでもいい？」
「畏まりました、ご主人様」
「てかご主人様は止めてよ……」
「では女王様と」
「却下！」

バルゴさん、ルーシィさんの腰に付けてある鞭を見て判断しまし
たね…。

まあ一般の人が鞭を持ち歩いてたらそついう趣味かと思えますよ
ね。

「では姫と」
「そんなところかしらね」
「そんなところなのか…」
「つか急げよ」
「では、行きます」

そう言つとバルゴさんの足元に魔法陣が発生し、一瞬にして外とのトンネルが形成された。

外の状況が見えない中で、よく出来ますね。

私には恐らく無理です。

「おーし、この穴を通つて行くぞ」

「よ、っつ」

ナツさんの方を見ると、カゲに肩を貸して立たせていた。どうやら一緒に連れて行くみたいですね。

「あ？何してんだ、ナツ」

「俺と戦つた後に死なれちゃ、後味が悪いんだよ」

カゲをズルズルと引き摺りながら、穴の中に入って行くナツさん。私とエルザさんはカゲがその言葉を聞いている事を知りながら、小さく笑つた。

「我々も行くぞ」

「おう」

『はい』

「あい…」

そうして私達はバルゴさんが掘つた穴を進み、駅の外へと脱出した。

第十二話 竜と死神

『これはまた、凄いですね…』

外に出ると、暴風が駅全体を覆っていた。

どうやら中よりも外の方が風の被害が大きそうですね。

『……さて、私も行きますか』

眼下で翼を生やしたハッピーさんとナツさんが飛んで行くのが見え、私もその後を追った。

エルザさん達の方は魔道四輪がありますし、大丈夫でしょう。飛べる者は、空から先に行ってますよ。

私は背中から生える白い翼を一撫でし、高く飛ぶ。

あまり見られたくありませんからね。特にギルドの仲間には。

……あ、マカロフさんとギルダーツさんは別ですよ？

もう私の正体を知られていますからね。

『っと、しかし難しいですね…』

ナツさん達を見失わない様に飛んでいます。これが結構難しいです。

人間の姿でバランスを取るのがこれほど難しいとは予想外でしたし。

あと単純に、私の方がスピード出るんですよね……。つまり追い越さない様に加減するのも難しい。

この依頼から帰ったら練習しないとイケませんね。

「ウオオオオオオ!!これがハッピーのMaxスピードだア!!」

ふう、やっとエリゴールに追いつきましたね。

ナツさんも炎を推進力にしただけあって、速い速い。

私は一度近くの岩場に隠れ、翼を身体の中へと戻した。

『ん、』

これ、ちょっと痛いんですね。

要は無理に骨を動かして皮膚を裂いているわけですから。

回復にも数秒ほど時間を費やしますし。

『……ふう』

おおよそ、人体では絶対に鳴らないような音が終わり、翼が生えていた場所を軽くさする。

よし、傷も回復しましたし痛みも引きましたね。

「チクシヨー!フラフラ飛びやがって!降りてこい!」

「調子に乗るなよ、蠅が!」

『調子に乗ってるのは貴方の方です……よッ!』

「ぐは…ッ!」

全く無警戒だったエリゴールの背後に跳躍し、その背中を殴る。
油断してくれたお陰で、綺麗に入りましたね。

ふう、私もストレスが溜まっているんです。覚悟してもらいましょ。
う。

「ルーツ!エルザ達は?」

『今頃、魔道四輪で此方に向かっていていますよ』

「そうか。……ん？ ルーツはどつやって来たんだ？」

『そんなことより、今は目の前の敵ですよ』

「おう！ それもそうだな！」

意外と鋭いナツさんの質問をはぐらかし、エリゴールに意識を向けさせる。

これは後で言い訳を考えておいた方がいいですね。

「チツ、邪魔な蠅がもう一匹……」

『この先の街へは行かせません。貴方はここで倒します』

【曉】を抜き、その切っ先をエリゴールへ向ける。

「これでも龍ですから、戦闘は好きですよ？」

無意識に口角が上がっていくのが分かった。

「行くぜ！ オラァー！」

「フンー！」

最初にナツさんが手に炎を纏って攻撃する。

エリゴールは背後に居る私を警戒しながら、その攻撃を鎌で防ぐ。見ている限り、やはりナツさんより戦い慣れていきますね。

暗殺系の依頼ばかりを受諾しているだけのことはあります。

しかし……

「ぐ……ッ！」

『空へは行かせません』

戦闘経験も殺し合いの経験も、私の方が上ですよ。

ナツさんと距離を離し、再び空へと行こうとするエリゴールに斬り

かかる。

今の私達に空を飛ぶ方法はありませんからね。

一度制空権を取られてしまうと、攻撃の手段が無くなってしまいます。

『ナツさん！今です！』

『よっしゃー！火竜の……』

「っ!?あのガキ、コイツごと攻撃する気が……!」

「咆哮!!」

「ストームウォール……!」

エリゴールが咄嗟に風の壁を展開させ、ナツさんの咆哮を防ぎ切った。

魔風壁といい、相当強力な防御魔法をお持ちのようですね……。

「テムエも邪魔だア！ストームリンガー暴風波!!」

『な、……か、はッ!』

咄嗟に攻撃を防ごうとするも、風は私ではなく、私の足元そのものを崩した。

バランスを崩した瞬間、エリゴールは私を線路の上から蹴り飛ばした。

線路の下は、どこまでも続く奈落。

『ッ……さいごうくわんくわん災厄紅雷!!』

「ぐああああああ!!」

下に落ちる直前、エリゴールに向かって雷を放つ。

仕方ありません。後はナツさんに頼むことにしましょう。

「ルーツ……、ルーツ!!!」

線路から身を乗り出し、声を荒げるナツさん。
いや、貴方まで落ちたら本当に洒落にならないので止めて下さいね？

『頼みましたよ！』

ナツさんの姿が見えなくなる前に、私はそう叫んだ。
そして濃霧に包まれ完全に姿が見えなくなった時、空中でクルリと一回転して止まった。
背中からはバサバサと風の音が聞こえてくる。

『本日二回目、ですね』

翼を傷つけない様に気を付けながら、【暁】を背中にしまつ。
さて、どうやって上に登りましょうか…？

「ルーツ!!」

『頼みましたよ！』

そう言って、笑いながら落ちて行つたルーツ。
あのルーツが簡単に死ぬとは思えないが、この高さから落ちたら夕
ダでは済まないだろう。

「クソ！エリゴール!!」

本当は今すぐにも助けに行きたいが、その前にエリゴールを倒さなければならぬ。

葛藤の中、ナツは自分の感情に身を任せた。

仲間を傷つけられた怒り。その感情は魔力となり、ナツの力を一時的に増加させた。

「ストームメイル
暴風衣！」

ナツの魔力が上がったことを察したのか、エリゴールは全身に風の鎧を纏う。

だがナツは構わず、そのまま攻撃に移った。

「火竜の鉄拳!!」

「フン、こんなものか」

「どうなってんだ!? 炎が、消えちまう!」

「まるで効かん」

風の鎧にナツの攻撃は掻き消され、エリゴールに届く事はない。

「ストームメイル
暴風衣は常に外に向かって風が吹いている。分かるか? 炎は向かい風には逆らえねエ!」

「んだとっ」

「炎は風には勝てねエんだ!!」

風が強さを増し、ナツの身体をジリジリと後ろに下げる。

一瞬でも気を抜けば吹っ飛ばされそうな程の強風。

ナツは腕をクロスにして防ぎながら呟く。

「くそつたれ、まるで台風みてエだな…」

「もはや炎は届かん! ストームシュレット!」

「クソ……！」

自身の防御を固めたまま、エリゴールは風の弾丸を打ち出す。ナツも必死に攻撃を避けながら、反撃する隙を見つける。

「うおおおおお!! 届けエ!!」

炎を推進力に使いながら、空にいるエリゴールに近づく。

しかし、攻撃が届く前にナツの身体は吹き飛ばされ、地面へと叩きつけられた。

その様子を、エリゴールは高笑いしながら見下した。

「ハッハッハ！何をやっても無駄だア！」

「炎どころか、俺が近付けねエ！クソ……！」

「どうした小僧。そんなものか？もう少し骨のあるヤツかと思ったが……」

エリゴールはそう言いかけると、何かを思い出したように笑った。まるで、侮辱するかのようだ。

「ああ、白銀のルーツも大したことは無かったからな。当然か」

「っなんだとテメエ!!」

「今頃は奈落の底でくたばってるだろうよ！」

「アイツが……ルーツが、そんな簡単に死ぬわけねエ!!」

ナツはそう言いながら、自分の拳を堅く握りしめた。

それはまるで、自分に言い聞かせているみたいだ。

事実、ナツはエリゴールの言葉を完全に否定出来なかった。

あの高さから落ちたらタダでは済まないし、自身さえも思ったからだ。

だが認める訳にはいかない。

今自分に出来るのは、ただ信じるだけ。

ルーツは頼むと言った。頼まれたからには……やり通す！

「同じ所へ送ってやるぜ！全てを切り裂く風翔魔法、エメラ・ハラム翠緑迅」

「エメラ・ハラム翠緑迅だって!?そんなの食らったらバラバラになっちゃうよ!!」

ナツの後ろにいたハッピーが、エリゴールの魔法に驚く。

しかし、もう魔法は止まらない。

……いや、止まる筈が無かった、というべきだろうか。

「ぐ……ッ、あの時のか……」

突然エリゴールが苦しげな呻き声を上げ、その場に膝をついた。

エリゴールの脳内には、ルーツが最後に放った攻撃の光景が映し出されていた。

ようやく、その時の痛みが身体へと現れたのだ。

そして同時に、エリゴールが纏っていた風が勢いを弱めた。

「うおおおおおおお!!!」

ナツはその隙を見逃さず、エリゴールへと突っ込む。

「火竜の……」

「しまっ、」

「剣角!!!」

全身に炎を宿し、突進する様はまるで

竜そのもの

そんな攻撃を受けたエリゴールは呆気なく空中へ飛ばされ、地面へ

と叩きつけられた。

その衝撃で懐にしまっていたララバイがカラリと音を立てて転がった。

「どうだハッピー！」

「あい！流石は火竜サラマンダーのナツです！」

第十三話 龍と笛の悪魔

「ナツー！」

「お！遅かったじゃねえか。もう終わったぞ」

「あい」

魔道四輪に乗ったルーシィ達がようやく到着した。
しかし、戦闘はすでに終わっている。

「流石だな」

「ケッ」

「そ、そんな！エリゴールさんが負けたのか!？」

満身創痍で倒れているエリゴールを見て呆然とするカゲ。
その顔は信じられないとも言いたげだ。

「こんなの相手に苦戦しやがって、フェアリーテイルの格が下がるぜ」

「ああ？苦戦？どこが？圧勝だよ。な、ハッピー」

「微妙なト」です」

ハッピーに肯定を求めるナツだが、相方は非常に残酷だった。
事実な所が余計に悲しい。

「何はともあれ見事だ、ナツ。これでマスターたちは守られた」

エルザの言葉で全てが終わったような雰囲気包まれる。
しかし、その空気の中ルーシィが周りをキョロキョロと見渡した。
それは何かを探しているようだった。

「ん？どっした、ルーシィ」

「ねえナツ、ルーツ知らない？突然いなくなって……」
「……………ッ!!」

ルーシイの言葉にハツと目を見開くナツ。

そして、線路の下に続く谷底を見た。

ナツの行動にエルザ達3人もその意図に気付いた。

「まさか、この下に落ちたのか!？」

「そんな……!」

「おいおい、いくらアイツでもここから落ちたらタダじゃ済まねエぞ」

固唾を飲み、真剣な顔持ちで下を見るナツ達。

その様子を当の本人が頬をぱりぱりと書きながら見ていた。

『あの、そんなに真剣な顔をされたら出て行きにくいのですが……………』

……………。

静かな場にそんな声が聞こえてくる。

そしてたっぷり3秒置き、全員が一斉に振り返った。

「ルーツ!!?」

『はい。ルーツです』

「え、なんで!?落ちたんじゃ……」

正直、重傷を負っていると思っていた。

だがそんな予想を裏切り、ルーツは五体満足どころか掠り傷1つ負っていないかった。

心配して損したと思えるほど、全くの無傷である。

『ええ。だから登ってきました』

「登って？」

『丁度ハシゴがあったので』

「ごめん。何言ってるか分からない」

理解が追いつかなかったのか、頭を抱えるルーシー。

ルーツの話を聞く限り、ここから落ちて、そこからハシゴで登って来たということになる。

もし今突っ込めるなら「じゃあなんで無傷なのよ！」と突っ込みた
い。

まあ、実際は本当に落ちた訳ではなく、翼を生やして飛んだのだが。

「まあいいじゃねエか。無事だったんだし」

「アンタは軽すぎー」

一番心配していたはずのナツがケロリと笑いながら言う。

そのお陰か、その場の雰囲気かふと和らいだ。

「よし、ついでだ。定例会の会場へ行き、事件の報告と笛の処分についでマスターに指示を仰ぐ」

「クローバーはすぐそこだもんね」

『ッ危ない!!』

話がついた所で突然ルーツが叫び声を上げ、仲間を突き飛ばした。
直後、魔道四輪が大きな音を立てて動き出した。

操縦しているのは……

「カゲ！」

「危ねエなア！動かすなら言えよ！」

「油断したなハ工共！笛は……フラバイ祝歌はここだアー！ざまあみる!!」

いつの間にかララバイを手にしていたカゲは、魔道四輪でクローバーへと去って行く。

その怪我でよくそんな体力があったなと思うほどの速さだ。

『してやられましたね』

「あんのヤロオオオ!!」

「何なのよ! 助けてあげたのにー!」

「追っぞー!」

ナツ達は若干の怒りを胸に、カゲの後を追った。

「いた!」

「じっちゃん!」

「マスター!」

日も暮れた頃、ようやく定例会の会場へと着いたナツ達。

全力で追いかけてきたとはいえ、向こうは魔道四輪。

もう遅かったかと思っただが、どうやら間に合ったようだ。

カゲを止めようとした時、誰かがナツ達の行く手を止めた。

「しっ! 今イトコなんだから見てなさい」

「ブルーベガサス
青い天馬のマスター!」

「あら、エルザちゃん。大きくなったわね」

ナツ達を止めたのは定例会に出席していたマスターだった。

よくよく周りを見ると、他のギルドマスター達もいた。

「どうした？早くせんか」

「……………」

止められている間にも、状況は進む。

カゲはすでにララバイを口元まで持ってきている。

あとはその笛を吹くだけ。

「いけないー！」

「黙ってなつて。面白エトコなんだからよ」

『エルザさん。ここはマカロフさんを信じましょう』

「だが…！」

しかし、いつまで経ってもカゲはララバイを吹こうとはしなかった。

何かに迷っている表情をしているカゲを見て、ルーツは静かにエルザを宥める。

そして、事の先を見守った。

「やあ」

「……………!!」

ララバイにグツと力を入れるカゲ。

だが、ララバイから音が聞こえることはない。

吹けばいいだけなのは本人も分かっている。

けれど、迷いの葛藤がそれを許さなかった。

「何も変わらんよ」

そんなカゲの様子を見て、マカロフが語り始めた。

まるで全てを知っているかのように、カゲを真正面から見据えて。

「弱い人間はいつまでたっても弱いまま。しかし、弱さの全てが悪ではない。元々人間なんて弱い生き物じゃ。一人じゃ不安だからギルドがある。仲間がいる」

マカロフの顔は語るにつれ、真剣さを増していく。

そこには確かにマスターとしての顔がある。

そして同時に、悪いことをした子供を叱る、「親」^{おと}の顔でもあった。

「強く生きる為に寄り添いあって歩いていく。不器用な者は人より多くの壁にぶつかるとし、遠回りをするかもしれん。しかし明日を信じて踏み出せばおのずと力は湧いてくる。強く生きようと笑っていける」

そこでマカロフは一度言葉を止め、ニカリと笑った。

「そんな笛に頼らなくても、な」

「」

カゲは持っていたララバイを力なく地面に落とし、両膝をついた。

ああ、自分は負けたのだとカゲは悟った。

単純な力でも、ましてや権力でもない。

ただ、「心」が負けたのだ。今の自分には持ち得ていない、その温かな心に。

「参りました」

涙と共に、そんな言葉が自然と出た。

決着がついたと分かったナツ達は、そろってマカロフの元へ駆け寄って行く。

「マスター！」

「じつちゃん！」

「じいさん！」

「ぬおおおっ!? 何故三人がここに!？」

「流石です！今の言葉、目頭が熱くなりました!!」

「痛ア！」

ガンガンと鎧にぶつけられるマカロフ。

エルザ自身に悪気が無いだけ、余計に夕チが悪い。

黙っていた反動なのか、それを切っ掛けにガヤガヤと騒ぎだすナツ達。

その様子を一步下がって見ていたルーツは、ふと何かの気配を感じ取った。

『この気配は……』

カカカ……。どいつもこいつも、根性のねエ魔導師共だ

穏やかだった場に、不気味な声が響く。

その声を辿ると、カゲの足元に落ちているララバイから紫色の煙がたちこめていた。

もうガマンできん。ワシが自ら喰ってやるっ

「笛がしゃべったわよ！ハッピー!!」

「あの煙……形になってく！」

紫煙は形となり、その姿を現した。

見上げると、そこには木を媒体とした巨大なモノが立っていた。

貴様等の、魂をな……

「な!？」

「怪物!!？」

まさしく怪物と呼ぶに相応しい巨体をした、不気味な生物。
その正体は大昔に黒魔導師ゼルフによって生み出された悪魔だ。
皆が驚く中、唯一、ルーツだけがその生物を平然と見ていた。

まあ自身もその生物並の生物並の巨体の持ち主なのだから当たり前前の反応
と言える。

それ故、ルーツの行動に迷いは無かった。

よつするに、敵は狩る。

『ハッ！』

ガアアアア!!

その悪魔が呪歌ララバイを発動する前に、ルーツは一気に切りかかる。

悪魔だろうがなんだろうが、媒体は木だ。

鋼鉄よりも恐ろしいほどの強度を誇る【曉】の攻撃に、その身体は
あっさりと切り裂かれ、よろめく。

「アイスメイク、槍騎兵ランスが！」

ゴオアッ！

ルーツの攻撃を機に、次々と攻撃を仕掛けるグレイ。

氷で出来た槍はララバイの身体に一撃で穴を開けた。

「な…なんて破壊力なの!？」

「今だ!!」

ララバイが体勢を崩した所でエルザは「黒羽の鎧」に換装し、すかさず攻撃に入る。

ナツも負けじと、ララバイの身体によじ登って行った。

「右手の炎と左手の炎を合わせて……火竜の煌炎!!」
ば、バカ……な……

「見事!」

『……あ、』

全員の攻撃を一齐に受け、倒れるララバイ。

その倒れ先にある物を見たルーツは、小さく呟いた。

そして頬をぽりぽりと搔き、心の中でマカロフに謝った。

「ゼレフの悪魔がこつもあつさり……」

「こ……こりゃたまげたわい!」

「かーかつかつか!」

「す、すごい……これが、フェアリーテイル妖精の尻尾!!」

ルーツを除き、満足気な顔でマカロフの所へ戻るナツ達。

その表情はまだ余力を残しているようだ。

「いきさつはよく分らんが、フェアリーテイル妖精の尻尾には借りができちゃった
なア」

「なんのなんのー!ふひゃひゃひゃ……ひゃ……は」

上機嫌に笑っていたマカロフの顔がある一点を見た途端に固まった。

そして、その場からそろりと音も立てず去る。

その行動に疑問を感じた他のマスター達は、自分たちの背後を見た。

全員がその光景に驚愕し、叫んだ。

「ぬああああああ!!定例会の会場が……粉々じゃ!!!」

「ははっ!見事に壊れちゃったなア!」

「捕まえるー!!」

「おし、任せとけ！」

「お前は捕まる側だー!!」

やる気を見せるナツだが、そのナツ自身が犯人なのだからやり切れない。

他のマスターからのツツコミを盛大に受けながら、フェアリーティルの一同は逃げ出した。

そんな中、ルーツがある人物に近付いた。

『すみません。ボブ様』

その人物とは、青^{ブルーベガサス}い天馬のマスター、ボブだ。

周りの躍起だっているマスター達とは違うと判断したルーツは、彼に話しかけた。

「あら、ルーツちゃん。なにかしら？」

『後に来る評議会の方に、コレをお願いします』

そう言っ^ラてルーツが手渡したのは、どこかボロボロになっ^ラた笛^{パイ}。いくら倒したとはいえ、恐らく媒体がある限り何度でも蘇るだろう。

もし放って置かれてもしたら大変なことになると、ルーツは他の人物に任せることにした。

「そうね。分かったわ」

『お願いします。では、私はこれで』

ペコリと礼儀正しく頭を下げたルーツは、逃走するギルドのメンバーに加わった。

第十四話 火竜 VS 妖精女王

ララバイの事件から数日経ったある日。
フェアリーテイルのギルド前には人だかりが出来ていた。
といっても全員、そのギルドのメンバーな訳ですが。

「ちょ、ちょっと！二人共本気なの!？」

「あらルーシィ」

『おはようございます』

慌てた様子でギルドに来たルーシィさん。
どっちら忘れていたようです。

ナツさんとエルザさんが戦う約束をしていた事。

「本気も本気。本気でやらねば漢では無い！」

「エルザは女の子よ」

「怪物のメスさ」

ふふ、エルザさんは酷い言われようですね。

逆に考えれば、それだけ実力があるということですが。

「だって最強チームの二人が激突したら…」

「最強チーム？何だそりゃ」

「あんとナツとエルザ、そしてルーツさんじゃない！フェアリーテイルのトップ4でしょ」

「はあ？くだんねェ！誰がそんなこと言ったんだよ」

『 그레이さん』

ルーシィさんの言葉をバツサリと切る 그레이さんの肩をちょいと

指で叩き、無言でミラさんの方を指す。

口は災いの元って言いますからね？

「あ…ミラちゃんだったんだ……」

女性は泣かせるものではありませんよ？

まあ、私も言えた立場ではないですが。

「確かにナツや 그레이 の漢気は認めるが、最強」と言われると黙っておけねエな。フェアリーテイルにはまだまだ最強者が大勢いるんだ」

「最強の女はエルザで間違いないと思うけどな」

「最強の男となるとミストガンやラクサスもいるし」

「あのオヤジも外す訳にはいかねえな」

オヤジ……ああ！ギルダーツさんですね。確かに強かったです。

あの時はリハビリがてらの組手だからお互い手加減していましたが、恐らく人間変身時の全快でもちよっと厳しいですね。

もし会う機会があったら、また遊びたいですね。

「ルーツも底が知れないしな」

『え？私、ですか？』

ギルダーツさんとの事を考えていると、不意に私の名前が聞こえてきた。

私はあまり、そういう話に興味が無いのですが…。

「コイツが大剣以外で戦った所、見たことないしな」

「つか討伐依頼受けた後、平然と次の依頼受けてなかったか？」

「ああそれ、俺も見たことある」

『偶々ですよ。それに、最強も最弱も興味ないですから』

そう。最強なんて称号は要らない。

私はただ、孤独でなければそれでいい。

まるで世界から拒絶されたような、永遠にも連なる虚無の時間。独りぼっちは、もう嫌です。あんな世界、三度も味わいたくは無い。

「ルーツ、さん……？」

『はい。どうかしましたか？』

「あ、いえ……！」

私としたことが、暗い表情が出てしまったのでしょね。気をつけなくては。

これ以上ルーシィさんを心配押させない様に、私は何でもない風を装って笑った。

「なんにせよ、面白い戦いにはなりそうだな」

「そうか？俺の予想じゃエルザの圧勝だが」

『ナツさんも強くなってきましたし、意外と良い線まで行くかもしれ
ないですよ？』

勝負の行方を予想しつつ、目の前の真剣勝負を見守る私達。

ふふ、何だか私が入った時の事を思い出しますね。

あの時は確か、ナツさんと戦ったのでしたね。

「こうしてお前と魔法をぶつけ合うのは何年振りかな……」

「あの時はガキだった！今は違うぞ！今日こそお前に勝つ！！」

「私も本気で行かせてもらうぞ。久し振りに自分の力を試したい。
……全てをぶつけて来い！！」

エルザさんはそう言うと同時に、赤色に包まれた鎧を纏った。

おや、宣言通り最初から本気みたいですね。

「炎帝の鎧!? 耐火能力の鎧だ!」

「これじゃナツの炎が半減されちまう!」

「エルザ! そりゃあ本気すぎだぜ!!」

周りがエルザの本気に驚く中、ハッピーさんがカナさん主催の賭けをしていた。

「やっぱエルザに賭けていい?」

「なんて愛のないネコなの!!」

『では私は大穴狙いのナツさんで』

「ルーツさんまで!」

やだなあ、ルーシイさん。冗談ですよ?

……え? 冗談に聞こえない、ですか?

あはは、私は意外と冗談好きですよ。

「私こーゆーのダメ! どっちも負けて欲しくないもん!」

「意外と純情なのな」

ルーシイさんは優しいんですね。

こつこつするのはその場の雰囲気とノリですよ。

台詞の最後に「冗談」と言っておけば基本何とかかなります。

便利な言葉ですよ。

「炎帝の鎧か……そうこなくちゃ。これで心おきなく全力が出せるぞ」

ナツさんの方も戦闘準備は整ったようですね。

いつの間にか審判になっていたマカロフさんが両者の顔を見て、片手を上げた。

「始めい！」

「だりゃっ!!」

先手必勝とばかりに、いきなり攻撃に出るナツさん。

しかし一直線の攻撃は動きを読まれやすい。

エルザさんもナツさんの先制攻撃を難なくかわし、剣で反撃に出る。

「ぐっ…！」

足を引つ掛けられ、転びそうになったナツさんはそのままの体勢で炎を吹いた。

安定のない炎のブレスは客席の方にまで届く。

「あちちー！」

「くらナツ！テメェー！」

ギルドメンバーからの野次が飛ぶが、戦闘に集中しているナツさんにその声は聞こえない。

見つめるのはただ一人、倒すべき相手。

エルザさんの剣とナツさんの炎がぶつかり合う、その瞬間　　鋭い音がその場に響いた。

その音にナツさんとエルザさんの身体がピタリと止まり、一時的に勝負が中止された。

「そこまでだ」

人混みをかきわけ、カエルのような顔をした人物が現れた。

一体誰でしょう？ギルドのメンバーではなさそうですが……。

「全員その場を動くな。私は評議院の使者である」

「評議院!」

「使者だって!」

「何でこんな所に…!!」

「あのビジュアルについてはスルーなのね…」

ルーシーさん、むしろそこに突っ込んだら負けな気がします。

しかし、本当にどうして評議院の使者が来たのでしょうか?

原因は正直有りませんが、今更……という気がしますね。

「先日の鉄アイゼンヴァルトの森テロ事件において、器物損壊罪他11件の罪の容疑で……エルザ・スカーレットを逮捕する」

「え?」

「何だとおおおおっ!」

第十五話 龍と霧の男

「やっぱりシャバの空気はつめえ!!最高のつめえ!!」

中に炎が入ったコップを持ちながら、ギルドを走り回るナツさん。
あの、溢さないで下さいね?飛び火になったら大変ですよ?

「自由で素晴らしい!!フリーダム!!」

「うおっ!やかましい!!」

「大人しく食ってる!」

「もう少し入ってれば良かったのに……」

『でも騒がしい方がフェアリーテイル、という気はしますね』

ナツさんがこんなにはしゃいでいるのも、前回のエルザさんの一件が原因だ。

逮捕されたエルザさんを助けようと評議院に乗り込んだが、蓋を開けてみるとそこはあくまでも“形式だけ”の逮捕。

すぐに帰って来られる所を、ナツさんの乱入で一日を牢で過ごす羽目になってしまったのだ。

そして今日、二人とも無事に帰って来た。そして今に至る。

「心配して損しちゃった」

「そうか!カエルの使いだけにすぐ“帰る”」

『……………』

「……………」

「さ、流石氷の魔導師!ハンパなくさみィ!」

妙案が浮かんだという顔をする 그레이 さんだが、ごめんなさい。

そのダジャレは正直どこかツボなのか分かりません。

「で、エルザとの漢の勝負はどうなったんだよ」

「漢って…」

「そうだ！忘れてた！エルザー！この前の続きだー!!」

元気なナツさんとは対照的に、エルザさんは帰って来てからの様子が可笑しかった。

何が変なのかと聞かれると答えに詰まりますが、まるで悩んでいるようにも見えます。

他の人に言ったら「あのエルザが？」とでも言われそうですね。

「よせ。疲れているんだ」

「行くぞー!!」

「やれやれ」

襲いかかってくるナツさんに溜め息を一つ吐き、エルザさんは斧を換装。

そして机と椅子もろともを木端微塵に破壊し、ナツさんは叩き飛ばした。

凄いい勢いで壁に衝突したナツさんは頭から血を流し、ぐったりと気絶した。

「仕方ない。始めようか」

「終ー了ー!!」

『始まる前にゲームオーバーですね』

「ぎゃははは!!だせーぞナツ!!」

「やっぱりエルザは強エー!」

「おい、この間の賭け有効なのか?」

「あゝあ、またお店壊しちゃって……」

各々がそれぞれの反応を見せる。

その様子をほのぼのとした気持ちで見ていると、不意に眠気がした。

「この不自然な眠気、もしかして魔法でしょうか？」

「あ、」

「！」

「これは！」

「くっ……」

「眠っ」

全員が突然気絶したように眠りに落ちる。

まあ、私は睡眠の耐性があるので多少は抵抗出来ますが。しかし、凄い強力な眠り魔法ですね。

私ですら意識をハッキリ保たないと眠りに落ちそうです。

そして寝静まったギルド内に、黒いコートを着た人物が入って来た。

「丁寧な顔や髪までも隠しており、唯一分かるのは目だけですな。」

「ミストガン」

マカロフさんがそう呟いたのを聞き、私は彼に近付いた。どっちら敵ではないようですな。

『ミストガン様、ですか。お会いするのは始めてですね』

「ッ!? ミラ・バルカン……?」

『……………え?』

私を見た瞬間、ミストガン様は明らかに狼狽えた。

そして私にとって、信じられない名前を告げてきた。

ミラバルカン

確かにそう言った。

その名は最も忌々しく、私が憎悪と後悔を向けるべきモノ。

あまりの衝撃に何も言えずにいると、ミストガン様は小さく首を横に振った。

「いや、まさかな。アイツの髪は紅い……」

『(紅い髪、だとツ!?馬鹿な、アレが存在しているはずはない……!)』

アレは消滅したのだ。

あの日、シュレイド王国が滅亡した日に……。

「すまない。名を聞いても良いか」

『……ルーツだ。ミストガン』

「そうか。よろしく頼む」

一人納得した奴とは裏腹に、我が心は晴れない。

自分が何を喋っているのかすら曖昧とは、情けない。

これでは他の龍に顔向けなんぞ出来ぬな。

……ふっ、気を取り直しましょう。

「行ってくる」

「これー眠りの魔法を解かんかつー!」

私が精神を落ち着かせている間に、ミストガン様は依頼を受けたようですね。

あの方が何を知っているのか分かりませんが、今度会う時には話してもらいましょう。

何故、あの名を知っていたのか。その理由を。

「伍、四、参、弐……」

依頼を受けたミストガン様がギルドから出ると同時に、眠っていた方たちが一斉に起きた。

良かった、彼等が寝ていて。あんな情けない姿を見られずに済みました。

「……この感じはミストガンか!？」

「あんにやるオ!」

「相変わらずスゲエ強力な眠りの魔法だ!」

「ミストガン?」

最近入ったばかりのルーシィさんは知らないみたいですね。かく言う私も、今日が初対面だった訳ですが。

「フェアリーテイル妖精の尻尾最強の男候補の一人だよ」

ルーシィさんの近くにいたロキさんがそう答える。

しかし、ルーシィさんの存在に気付いたロキさんが挙動不審な様子で彼女から離れて行った。

ある程度の見当はついてますが、どうしてそこまで星霊魔導師を避けているのでしょうか?

どちらかと言えば、彼は星霊魔導師を好く立場なのでは?

「どつという訳か誰にも姿を見られたくないらしくて、仕事をとる時はいつもどつやって全員を眠らせちゃうのね」

「なにそれ!? あやしすぎー!」

「だからマスター以外、誰もミストガンの顔を知らねえんだ」

「いんや、俺は知ってっぞ」

グレイさんがルーシィさんの質問に対して答えていると、頭上から声が聞こえた。

見上げると、2階の手摺りに寄りかかるようにして立っているラクサスさんがいた。

「ラクサス!!」

「いたのか」

「珍しいな!」

他の皆さんが言うように、ラクサスさんがギルドに居ることは殆どない。

仕事に出てる方が多いですからね。それは仕方ありません。

「ミストガンはシャイなんだ。あんまり詮索してやるな」

人を見下したような態度とは裏腹に、意外と優しい方なんですよね。

素直になれないというか、口下手というか…。

自分の気持ちに知らないフリをしている気さえしますね。

「ラクサスー!俺と勝負しろー!」

気絶していたナツさんが起き、次はラクサスさんに喧嘩を売る。

おや、案外復活が早かったですね。

「さっきエルザにやられたばっかりじゃねえか」

「そうそう。エルザごときに勝てねえよっじゃ俺には勝てねえよ」

「それはどっついう意味だ」

『まあまあ、エルザさん。落ち着いて下さい』

若干雰囲気が悪くなった中でも構わず、ラクサスさんは言葉を続け

る。

「俺が最強ってことか」

「降りてこい！コノヤロウ！」

「お前が上がってこい」

「上等だ!!……ぎゃっ」

そう言って走り出すナツさん。

しかし2階へ上がろうとした時、腕のみを巨大化させたマカロフさんに止められた。

まあ、規則ですからね。2階へ上がれるのはS級の魔導師だけです。

「2階には上がってはならん。まだな」

「ははっ！怒られてやんの」

「ふぬう……」

「ラクサスもよさんか」

「フェアリーテイル妖精の尻尾最強の座は誰にも渡さねえよ。エルザにもミストガンにも、あのオヤジにもな。俺が最強だ！」

誰が最強でも良いですが、仕事に行くならこの一触即発の雰囲気はどうにかしてからにして下さいね？

「たいへーん……」

ラクサスさんの最強宣言から翌日、ギルド内にミラさんの声が響いた。

「どつやら何か焦っているみたいですね。」

「マスター！2階の依頼書が一枚無くなってます！」

「!!」

『それはまた、大変ですね』

ミラさんの言葉に室内がざわめく。

マカロフさんも飲んでいたお酒を吹きだした。

「それなら昨日の夜、泥棒猫がちぎって行ったのを見たぞ。羽のはえた、な」

「ハッピー!？」

「つーことはルーシイも一緒か!？」

「何考えてんだアイツ等!」

「S級クエストに勝手に行っちゃまったのか!？」

「これは重大なルール違反だ。じじい！奴等は帰り次第、破門だよな」

ラクサスさんはさらに「あの程度の実力じゃ帰ってもこれない」と話し、笑った。

うーん、私は意外と何とかかなりそうな気がしますけどね。

まあ彼等のやっていることは違反なので、それ以前の問題ですが。

「ラクサス!!知ってて何で止めなかったの!？」

「俺には泥棒猫が紙キレくわえて逃げてった風にしか見えなかったんだよ。まさかあれがハッピーで、ナツがS級行っちゃったなんて思いもよらなかったからなァ」

怒る、というより若干キレかけのミラさんに対してそう言い訳するラクサスさん。

しかし、その言い訳はまかり通りませんね。

羽の生えた猫なんてハッピーさん以外にあり得ませんし、ラクサスさんほどの実力者なら持って行かれた紙キレを認識することだって難しくはない。

つまるところ、ラクサスさんは知っていて見逃したのでしょうか。

見逃した行為が良いか悪いかと聞かれれば悪いですが、ラクサスさん自身に非はないですね。

結局、行動を起こしたのはナツさん達なのでから。

「マズイのう……消えた紙は？」

「呪われた島、ガルナです」

「悪魔の島か!!」

え……。ナツさん達、あの島に行っただんですか？

なんともまあ、勇気がありますね。

「ラクサス！連れ戻して来い!!」

「冗談。俺はこれから仕事なんだ。テメエのケツをふけねえ魔導師はこのギルドにはいねえ。……だろ?」

「今ここにいる中でオマエ以外誰がナツを力づくで連れ戻せる!!」

「ルーツがいるだろ。アイツならナツも言うこと聞くんじゃねえか? 懐いてるしな」

『やだなー、ラクサスさん。それこそ冗談は止めて下さいよ』

あの島には絶対に行きません。

いえ、行けるなら行きますけどね?

前に仕事の帰りに近くを飛んで通った際、変身が解けそうになったんですよ。

急いで離れたので籠に戻る事はありませんでしたが、それ以来は極力近付かないようにしています。

恐らくは魔法を解く、何かがある場所なのでしょう。

『私もこれから仕事なんです。ナツさん達のごことは他の方にお任せしますよ』

冷たい様ですが、無理なものは無理です。

私は皆さんに軽く会釈し、ギルドを出た。

恐らくグレイさん辺りが行ってくれることでしょう。

第十六話 S級クエスト

ボオオオオオオッ

汽笛を鳴らし、黒い煙を上げて汽車が発進した。

私が今回受けた依頼は、珍しく討伐系の依頼だ。

なんと言いますか、依頼内容が少し気になったんです。

勿論、私の杞憂ならそれに越したことはありませんが。

「あ？」

『え？』

取り敢えず立っているのも何だからと席に座ろうとした際、そこにはすでに先客がいた。

先程まで顔を会わせていた、見慣れた先客である。

「なんでお前がここにいるんだ」

『依頼先の町がこの先なんですよ』

私が依頼を受けたのはミオナという町だ。

小規模な町だそうです。自然が美しい町として有名らしいです。

この時期だと色とりどりの花と梅が見られるそうですね。

『ラクサスさんもこの先の町で仕事ですか？』

「ああ。まさか同じ汽車に乗ってるとはなァ」

『ふふ、そうですね。それはそうと、お隣、よろしいですか？』

「好きにする」

『では失礼させていただきます』

汽車の中で立ち話もあれだろうと、ラクサスさんの隣に座らせても

らった。

『ラクサスさんはどこの町まで?』

『ミオナって小せえ町までだ』

『おや、奇遇ですね。私もその町ですよ』

『はア?他の依頼を回す余裕なんてねエだろ、あそこ』

同じ町での仕事。その事実にはラクサスさんが怪訝な顔をした。

恐らくラクサスさんが受けた依頼はS級のものでしょね。

それほどの実力者を必要とする町が他の仕事を依頼するわけはない。

確かにそうですね。大きな街ならまだしも、ミオナは小さい町ですし…。

『どんな依頼だ?』

『討伐の依頼です。鮮やかな色をした鳥が怪物を操って町を襲わせているので倒して欲しい、』と』

『ほうよ』

私が質問に答えると、ラクサスさんが何かの紙を私に見せてきた。

そこには、私が受けた内容と同じ依頼が書かれていた。

しかし、違つのは報酬額が3倍で、依頼のランクがS級だということ。

『報酬とランクが違いますが、同じ依頼ですね』

一体どういふことでしょうか?

もしかして、依頼のランクが上がったのでしょうか?

そして古い依頼書が破棄される前に、私が受けてしまった。

そう考えた方が妥当ですね。

『なんにせよ、どつやら手違いがあったみたいですね』

「そうみてエだな」

『では私は次の駅で降りる事にします。お仕事頑張って下さい』

S級クエストとなれば、私は受けられませんからね。

正直依頼の内容は気になりますが、それは後でラクサスさんから聞くつもりですよ。

「なんならテメエも来るか？」

『……はい？』

潔く諦めようとした矢先、ラクサスさんから爆弾発言が投下された。

失礼ですけど、貴方そういうこと言う人でしたっけ？

私はてっきり「足手纏いな奴が来なくて清々したぜ」とでも言われるものかと…。

「S級クエストはS級魔導師しか受けられねエが、同行はありだ」

『つまり、ラクサスさんの仕事の手伝いとして一緒にしても良い、というんですか？』

「ああ」

短く返事をしたラクサスさん。

その顔を見るとバツが悪そうな顔をして視線を逸らされた。

これは、あれですね。照れてますね。

なんだか微笑ましくなった私は、彼の「好意に甘えることにした。

『よろしくお願いします』

「…邪魔だけはすんなよ」

『はい』

不器用ですけど、やっぱり優しいですね。
……いつもこの態度で接していれば、皆さんの誤解も解けるのに。

第十七話 ミオナ町

『ん、やっと着きましたね』

ミオナ町の最寄駅に着いた私は、グツと腕を伸ばす。
流石に長時間座っていると疲れますねー。

ラクサスさんはそんな私を無視して、スタスタと町の方へ歩いて行った。

『置いて行くななんて酷いですよ』

「のんびり突っ立ってる奴が悪い」

『ふふ、それはすみません』

お互い冗談を交えながら、ある程度舗装された道を歩く。
人が来ることはあまりない町ですが、シーズンになると観光客で賑わうそうですよ。

あとはたまに写真家や作家の方が来るそうだから。

確かに景色も良いですし、良いアイデアが浮かびそうな所ですね。

『ラクサスさん、』

「分かってる」

私が穏やかな表情のままなのに対し、ラクサスさんは怪訝な顔で周囲を見ている。

まあ私も内心、警戒はしてますよ。

だってあまりにも平和すぎるんですよ、ここ。

受けた依頼はS級のもの。それも討伐です。

それなりの規模の被害を予想していたにも関わらず、森は平和そのもの。

小鳥やそれ以外の小動物もちらほら見かけます。

普通、動物は自分よりも驚異の存在がいたら逃げるものです。

『私達の勘違いなら、それで良いですけどね』

「フン」

むしろ勘違いであって欲しいものです。

疑り深いのも考えものですし、ね。

「キヤアアアアアッ!!」

『!!』

不意に誰かの叫び声が聞こえ、私達はその方向へ駆け出した。

それにしてもラクサスさん、雷を使うだけあって速い速い。

初めて見ましたが、私の紅雷と相性が良さそうですね。

ウホーウホオー!

「いや……こないで!」

森を抜けると、そこには魔物に襲われている女性。

あの魔物は確か森バルカン、でしたか。

全く、最近バルカンという名につくづく縁がありますね。

「オラー!」

ウホホオオオオ!!?

『おっと、逃がしませんよ』

ラクサスさんの先制攻撃を受けた森バルカンは鳴き声だか悲鳴だ

か分からない声を上げ、森の方へ逃げ出した。

私は森へ入られる前に【曉】を抜き、その身体を一刀両断した。流石に女性の視界に入れるモノではないので、死体はすぐに森の中に放り込みました。

あとは森の生物たちが処理してくれることでしょう。

『大丈夫ですか？』

「は、はい…。あの、貴方たちは…？」

周りを警戒するのはラクサスさんに任せ、私は地面に座り込んでいる女性に声を掛けた。

掠り傷はありますが、それ以外で目立った傷は無さそうですね。良かった。

『私達は依頼を受けた妖精の尻尾の魔導師です』

「貴方達が…！お願いです！町を守って下さい！」

『勿論です。町に案内してもらえますか？』

「はい…」

襲われかけていたにも関わらず、女性はスクツと立ち上がった。

手が少し震えているので恐怖が無くなった訳ではなさそうですが、強いですね。

必死に自分を保っているのでしょうか。

「いちばんです…」

私達はその女性に案内され、町へと移動した。

町は噂に違わず色どりに溢れた花に囲まれ、胸一杯の香りに包まれている。

いやー、花粉症じゃなくて助かりました。

「村長ー！」

町に着くと、女性はある人物に駆け寄って行った。
ふむ。ガタイがしっかりとした人ですね。

お陰で身体中に巻かれている包帯が酷く痛々しいです。

「イナ！無事だったか…！」

「あの方たちのおかげです！」

「あの方たち…？」

女性に言われ、村長さんが私達の方を見た。

そして女性に一言二言話して帰らせると、こちらに近付いてきた。

村長と言われる割には、随分と若いですね。30代そこそこ、
でしょうか？

「イナを助けて下さって感謝します。魔導師殿」

『ミラ・ルーツと言います。こちらのラクサスさんの助手として同行
させて頂いています』

「助手…ですか」

『はい。なので依頼の詳細は彼にお願いします』

私はそう言うと、ラクサスさんの半歩後ろに下がった。

今回、私の役割はサポート。依頼に関してどうするのか、その決定
権はラクサスさんだ。

方針が決まるまでは黙って情報を集めることに徹するまで。

「分かりました。詳しい話は私の家でいたしましょう」

真剣な眼差しで頷く村長さんに、私達も頷き返した。

第十八話 彩鳥

場所は村長さんの家へと移り、私達は村長さんと向かい合つように座っている。

お互いに一息ついた所で、村長さんが口を開いた。

「さて、まずどこから話すべきか…」

「最初っからだ」

「そつだな…」

村長さんは目を閉じ、数秒ほど経ってから開けた。
その目はしっかりと私達を見据えている。

「始まりは二ヶ月ほど前になる」

二ヶ月前

ミオナは元々小さな“村”だった。
段々と人口が増えるにつれ、いつの間にか“町”と呼ばれるほどに
なったのだ。

「村長ー、こっちの木はどうしますか？」

その名残か、町の人達はいつまで経っても町長じゃなくて村長呼びだ。

「その木は雨に強い。家の建築に使おう」

人口が増えたことで、我々は土地を広げようと開拓に励んでいた。勿論、村であった頃の自然の豊かさを破壊しない様に細心注意を払って。

森に住む動物を驚かさないう、開拓は人の手だけで行っていた。何年掛かるか分からなかったが、それが自然に対する私達の敬愛の念であった。

「西側も大分片付きましたねー」

「ああ、最初の頃は何年掛かるかと思っていたがな」

「人間やれば出来るもんですね」

笑いながらも、手は休めない。

そして町から大分離れた時、それは起こった。

「おい、なんだアレ？生き物か？」

男の1人が少し先を指し、首を傾げた。

その指の先を追って行くと、鮮やかな色をした何かが動いていた。木に阻まれよく見えなかったが、チラチラとまるで踊るように動いている。

「風か何かかじゃないか？」

「でも今は時期じゃないだろ。それに、風も吹いてない」

鮮やかな色というのは町の人間には見慣れた物だ。

毎年、春から夏にかけて数百種類もの数の花が芽吹く。

だが今は秋。花は咲くどころかゆつくりと紅葉と共に枯れ、散っていく。

「見に行くか」

「それしかないな」

そう言っつて、私達は鮮やかな色をした何かに近付いて行つた。

この頃の私達は、森に住む動物に対しての恐怖心があまりなかった。

どちらかと言えば同じ森に住む仲間。共存していける生き物だと持っていた。

けれど二ヶ月前のこの日。その認識は覆された。

~~~~~

それは歌いながら踊っていた。

リズムを取り、軽快な足取りでステップを踏んでいる。

その行動だけでも驚きなのに、ヤツの体は優に8mを超えていた。

喉元の大きな袋を目一杯膨らまし、ラッパのような口で歌っている。

体と同等に大きい足に踏まれ、地面に倒れていた大木が悲鳴を上げて潰れた。

「なんだ、あれは……」

無意識の内に呟いた言葉。

返答など返ってくるはずもなく、無言が流れる。

耳の横をすぎる風が、妙に大きく聞こえた。

ウツホ！ウホウホ！

「バルカン!?」

動けずにその場を見てみると、鳥の声に誘われたのか森バルカンがやってきた。

二体、三体……と数を増やしていく奴等を見て、私達は「マズい」と直感した。

そして奴等に見つかる前に、その場を静かに退散した。

「ど、どつするんですか、村長……」

「……魔導師ギルドに依頼しよう。私達の手に負えるものではない」

少しだけ考えた挙句、私は魔導師ギルドに討伐の依頼をする事に決めた。

「しかしこの町に来た魔導師は全員、ヤツが操る怪物に倒されてしまった……」

『成る程。それで難易度が上がったという訳ですか』

「はい。もはや並の魔導師ではどつしようも出来ないと思ひまして」

確かに、あの鳥だけを倒すなら未だしも、呼び出されたモンスターとも戦わなければならない。

半ば強制的な一対多数の戦闘は予測不可能なため、かなり戦い辛い

ものだろう。

「フン。行くぞ、ルーツ」

『はい』

事情を聞き終えた私達は、さっそく討伐に行こうと立ち上がる。話を聞いてなお事も無げな様子の私達に、村長さんは椅子を倒しながら身を乗り出した。

「っ、今からですか!? ヤツは手強い…。それ相応の準備をしてから…」

「今まで誰が来たかは知らんが、俺をそんな雑魚共と一緒にすんじやねエよ」

『彼はS級魔導師です。その称号は伊達ではありませんよ』

ラクサスさんの眼光にたじろぐ村長さんに、私はそつと微笑んだ。全く、一般人にそんな威圧をしては駄目ですよ？

村長さんはあくまでも依頼人なんですから。

「それだけではありません！ ヤツは特定の縄張りを持たない。森に詳しい人を案内人に…」

『御心配は無用です』

「ですが…」

『覚えていますから』

森も、臭いにも。

大体の森の構造はこの町に来る前に把握している。

村長さんの「ヤツ」という正体も、今の話を聞いて確信した。

やはり予測が当たりましたね。

「さっさと行くぞ」

『あ、置いて行かないで下さいよ』

早足で村長さんの家を出て行くラクサスさん。

私は呆然としている村長さんに軽く会釈し、後を追いかけた。

「…それで？」

『え？』

私の方を見ずに、ラクサスさんはそう言い放った。

思わず首を傾げれば、目線で答えを催促してきた。

ああ、気付いていたんですね。

『推測ですが、名前はクルペッコ。強さはそこそこですが、自身はあまり戦わず、他のモンスターを呼び出します』

ラクサスさんは見ていない様でよく見えていますね。

いつ私知っている事に気付いたのでしょう？

まあ、知られて困ることはないですが。

「聞いたことねえな」

『でしょうね。私が前に居た場所だけに生息するモンスターです。絶滅したとばかり思っていましたか…』

場所、というよりは世界…でしょうか？

それより、私はクルペッコが存在していることに驚きを隠せませんよ。

二ヶ月前というと、私がココに来た時期より少し後ですね。

もしかして他の彼等も来ているのでしょうか？

クルペッコという前例がある分、否定は出来ませんね。



『話を戻しますが、彼等は火、または雷を発生させる器官を持っていません』

「何？」

『両翼に火打石と呼ばれるモノがあつて、それを打ちつけて発生させているみたいですね』

「どっちにせよ、最初に翼を使えなくすれば訳ねエな」

『ええ、そうですね』

私はラクサスさんの言葉に頷きながら、まだ見ぬ彩鳥に向かって同情の念を送った。

種族が違つとはいえ、同じく翼を持つ身ですからね。

## 第十九話 討伐完了！帰還ならず？

『こっち、ですね』

「本当に合ってるのか？」

『はい。間違いありません』

森に入った私達は、クルペッコの臭いを辿りながら走る。

懐疑的な目を向けてくるラクサスさんですが、心配する必要はありませんよ。

なにせ彼等の臭いは少々異質ですから。

『大分町から離れましたね』

「ああ」

後ろを振り向けば、生い茂る木々ばかりが目映る。

かれこれ5km以上は離れてますね。

あまり奥へは行きたくないのですが…。

『っと、ちょっと止まって下さい』

「あ？見つけたか？」

『見つけましたが、これは移動している最中ですね』

結構なスピードで移動している。

恐らく地上ではありませんね。

となると、答えは1つ。移動方向は……おや、丁度良い。

『ラクサスさん。今から十秒後、真上に攻撃できますか？』

「ハッ！誰に言ってるやがる」

『ふふ、頼もしい限りですね』

私は【曉】に、ラクサスさんは掌に雷を溜める。  
鋭い音が不規則に鳴り、お互いの雷は相乗効果のように激しさを増  
していく。

『……………今ですー！』

「オラア！」

ふと私達の身体に影が重なる同時に、真上に攻撃を放った。  
直後、爆発音が聞こえ、足元の影がどんどん大きくなっていく。  
私とラクサスさんはそれぞれ左右に動き、落ちてくるそれを避け  
た。

ギヤウ！ア、ア、アアアア！

「聞いてた通り、馬鹿デカイな」

周りの木を薙ぎ倒しながら動き回るクルペッコ。  
その目は血走っており、嘴からはだらだらと涎が落ちている。  
先程の攻撃で両翼を貫きましたからねー。  
相当痛いことでしょう。……………実際本人も痛いって言ってますし。

……………え？言葉が分かるのか、ですか？

勿論分かりますよ。完璧ではなく、あくまで感覚的にですが。  
今のクルペッコの言葉を人間風に言うなら、

「痛ってー…何すんじゃこのヤローー!!」

って感じですよ。

これくらいなら人間でも分かると思いますけどね。

クエクエクエ！アオーウー！

「他のヤツを呼ばれたら面倒だ。ちゅちゅやるぞー」

『はい…』

ラクサスさんが全身に雷を纏ったのを確認すると、私も【曉】を握り直す。

先手を取ったのはラクサスさんで、一直線に鳴き袋に向かって行く。

やはり声を封じに行きましたか…。

ガアアアアア！

攻撃してくるラクサスさんを敵に認識したのか、口から胃液を吐きだすクルペッコ。

確かアレは発火性の強い胃液、でしたね。

全身雷状態のラクサスさんが直撃したら冗談にならない威力で爆発しますね。

「…」

『そのまま突っ込んで下さい…』

本能的なのか、それを避けようとラクサスさんに向かって叫ぶ。

一人で戦っているのではないと、ちゃんと自覚して下さいね？

『災厄紅雷…』

私は【曉】に雷を纏わせ、斬撃と共に胃液に攻撃を飛ばした。

音の煩さに関しては文句言わないで下さいね。

流星にどうしようも出来ませんので。

心の中で言い訳をした直後、鼓膜が麻痺するほどの轟音が鳴り響いた。

「ラァァァァァ！」  
ギャウウウウ！！

轟音に竦みあがるクルペッコに対して、ラクサスさんは容赦なくその鳴き袋を狙う。

動かないモノほど当てやすいのは無い。クルペッコの鳴き袋が破裂したように裂け、大粒の血が地面を濡らした。

ああ、お腹が減ってくる臭いが鼻を擽りますね。ラクサスさんは顔をしかめています。

~~~~~

身体を不安定に揺らしながらも、華麗に踊りと歌を歌うクルペッコ。

意外と打たれ強いですね。素直に感心します。

「チツ、潰したのに歌えんのか」

『喉自体は健在ですからね』

あくまでも潰したのは鳴き袋だ。

歌うという行為が出来なくなった訳ではない。

まあ歌ってる途中で空気が抜けるような音がしますし、完全に無駄だったというわけでも無さそうですが。

クエ…！クエ！

苦しそくに鳴きながら、両翼の爪を強く打ちつける。

これは、来ますね。

『炎、来ますよ』

「分かってる」

クルペッコの動きを観察しながら、後ろへ避けるタイミングを見計らう。

足を少しずつ下げ、重心を移動させる。

一步、二歩……今ッ！

クエエエー！

『！！』

紙一重で炎を避けた私達だが、発生した爆風によって身体が吹き飛ばされる。

気管が焼けるような痛みには耐えながら、荒々しく地面に着地する。

これはちよっと、息をするのが辛いですね。

クルペッコからしたら鳴き袋をやられた仕返しですね……。

苦笑いを浮かべながら、さてどうしたものかとラクサスさんに視線を向けた。

「……、……!!!」

わあ、なんて凶悪は悪人面でしょう。

同じく気管を負傷したのか言葉は無いですが、思いつきり顔が「殺す」って言ってますね。

お願いですから私まで攻撃しないで下さいね？巻添えとか御免ですよ？

ブオオオオオオ！バウッ！バウッ！

何かのモンスターの鳴きマネをするクルペッコ。

けれどラクサスさんは目もくれず、閃光のような雷を発生し続けている。

ああ、はい。これ完全に怒りで私の存在忘れてますね。

現に帯電し切れていない雷が私の方にまで来てますし。

『……仕方ありませんね』

静かに呟き、避難するように木の枝まで跳ぶ。

私はここで他のモンスターが来ない様に見張ってますよ。

「……」

ラクサスさんの周りで遊んでいた雷が何本もの光と共に集まり、やがて一本の姿へと収束されていく。

高密度のエネルギーに堪え切れなくなった大木が地面ごと干乾び割れる。

……流石の私もこの攻撃は受けたくないですね。想像するだけで背筋がゾツとします。

「くたばれ!!」

ッ!!!

凄まじい轟雷の音に悲鳴は掻き消される。

木々を焼き、地面を抉り、空気を裂く。

もはや焦土と化した場所には、それが消えてもなお肌を刺すエネルギーが残留している。

『お疲れ様です。ラクサスさん』

その光景に肩を竦め、私はラクサスさんの横に降り立った。

声を掛けると、ラクサスさんはどこか怠慢な動きで私の方を見た。

「……あア。ルーツか」

『いや今、完全に私のこと忘れてましたよね?』

「るせエ」

目逸らしは肯定とみなしますよ。
しかし、今は深く突っ込むつもりはありません。

あんな攻撃をした後ではお疲れでしょうし、討伐完了の報告を村長さんにしなければ。

この焦土と化した森の弁解を兼ねて。

『肩貸しましょうか?』

「要らねエよ」

そう言って手を払い除けられるも、あまり力は無い。
これは見た目よりも大分魔力を消費してますね…。
怒りに乗じた攻撃は厳禁という見本ですね、これは。

「…テメエ今、ムカつくこと考えてねエか?」

『あはは。一体何の事でしょう?』

疲労していても鋭いですね…。

私って顔に出やすいのでしょうか?

取り敢えず一度町に戻ろうと、踵を返す。

『「な…ッ!?!」』

その時、私とラクサスさんの間に、青紫色の電光が走った。

第二十話 龍の力

その姿を見て、全身の肌が粟立つ。

いえ、正確には“姿”ではなく“現象”でしょうか？

「何だ、アレ……」

『……嘘……』

「ルーツ？」

黒い霧。正体の分からない、謎の闇。

私がココに来る事になった原因。

もし今飛び込めば、私は……

『(元の、世界に)』

「おいルーツ!!」

『っ！あ、はいー!』

ラクサスさんの怒鳴り声に肩を揺らしながら返事をする。

そして頭を振り、余計な思考を排除する。

何も考えるな。何も感じるな。何も想うな。

今は目の前のことだけに集中しろ。

私の今の役目は、ラクサスさんのサポート！

「正気に戻ったかよ」

『ええ。』心配をお掛けしてすみません』

サポートをするはずが、逆にさせてどうするのじゃしょうね。

肩の力を抜き、現実を認識する。

目に映るのは彩り鮮やかな紅き鳥。

紫電の光を纏い、焦土に降り立っている。

『クルペッコの亜種、ですね』

「色が変わっただけ……じゃなさそうだな」

『彼等は炎の代わりに雷を放電します。強度も何故か倍以上に硬くなってますね』

クルペッコは原種も亜種もあまり強さに差がないと思っていましたが…。

この認識は改めないといけませんね。

ギャウウウウウ!!!

血走った目で叫び声を上げる紅彩の鳥。

先程のクルペッコが進化した姿ですね…。

原因は恐らく、あの正体不明の闇。

一体どんな原理があつてこうなつたのでしょうか？

「雷か…」

『ラクサスさん？』

「あ？なんでもねえよ」

なんでもない、という割には感慨深い顔で呟いていましたが…。

ま、深く突っ込まないことにしましょう。

『しかし、少々不利な戦況になってしまいましたね』

私が周りを見渡すと、ラクサスさんも今の状況に気付いたようだ。木々を踏みわけ、地ならしと共に次々と姿を現すモンスター。

10、20……まだまだ来ますね。

「チッ。さっきの叫び声に呼ばれたか」
『そうみたいですな』

鬱陶しそうに数多のモンスターを睨みつけるラクサスさん。
ふう、と小さく息を吐き、私はラクサスさんに背を向けた。

「ルーッ？」

『ラクサスさんは鳥の方をお願いします』

「ハッ、テメエ一人でこの数をやるってか？」

『ええ。そのつもりですよ』

「……あ？」

ラクサスさんの言葉を肯定すると、背中越しに視線を感じた。
恐らくは睨みつけられてるのでしょっね。

彼の感情は行動に出るから分かりやすいですね。

『数匹の見逃しは許して下さいね』

「手エ抜いたら殺す」

『ふふ、恐いです……ねー』

勢いよく地面を蹴り、剣を振るう。

何匹かは派手な鮮血と共に地面に倒れ、こと切れる。

私はその内の一匹の返り血をワザと被り、少しばかりラクサスさん
から離れた。

モンスターといえど、突き詰めれば獣。

血の臭いに当てられたモンスター達は私の方へとその視線を向け
る。

『いれならもっ少し離れても問題なそっね』

クルペッコとラクサスさんの雷に怯えているのか、モンスター達は私の方へと入り乱れてくる。

好都合だと笑みを深くし、その場から一気に離れた。

時折モンスター達がついてくるのかを確認し、ラクサスさんが居る方向へ向いたモンスターには微弱な雷を浴びせて注意を引く。

見逃すかもしれないと言いましたが、簡単に見逃すほど私は優しくありませんよ？

一応こと戦闘においては、一定のプライドもありますし。

ガルル…！

バウッ！バウッ！

『おっと、』

後ろから物凄い瞬発力で私との距離を詰めてきたアイアン・ドッグ。

噛まれそうになりましたが、身体を捻ってなんとか避ける。

野生の獣はコレがあるから怖いですね。

ガアアアアアア！

『やて、と』

もうある程度ラクサスさんからは離れましたし、そろそろ良いでしょう。

私はその場に留まり、後ろから来るモンスターを切り伏せた。

キャン…！

『ここなら手加減せずに済みますね』

血のついた剣を振るい、背負い直す。

流石にこの数相手に剣一本で挑むのは骨が折れますからね。

これだけ離れれば誰の目に入ることもないでしょう。

周りに人の気配も臭いもしませんし。

『限定解除』 ドラゴンフォース 『』

古き龍の言葉と共に、次々に身体に異変が生じる。

最初に牙と爪。そして黒目の部分が縦に伸び、有鱗目となる。最後に龍の鱗が全身に現れる。

ドラゴンスレイヤー
滅竜魔導士の方とは少々異なるドラゴンフォース。

龍本来の力を一時的に開放した私の姿だ。とはいえ、完全に龍の姿に戻る訳ではありませんけどね。

完全な解除では無く、あくまでも限定的なもの。それでも力は人間の時の3倍ほど増えますが。

『ひまじめまじょうか』 『』

自然と口角が上がり、目の前の獲物を睨みつける。

強い者が生き、弱い者が死んでいく。ここからは弱肉強食の世界。何匹たりとも逃したりはしない。

私は両手に雷を纏い、それを振り下ろした。

『祖龍の紅雷』

ギャオオオオオン!!

いくつもの雷が地面を走り、10匹近いモンスターを一瞬にして丸焦げにする。

ふふ、あと何回攻撃すれば全滅するでしょうか…?

ゴアアアア!!

『遅いですよ。祖龍の鉤爪』

猪のようなモンスターが一直線に突き進んで来るのを真正面から見据え、頭部に爪での一撃を与える。

頭蓋骨が割れるような音と共に、そこから手を引き抜く。

粘りつくような血を舐めれば徐々に芳醇な味が口内に広がる。

ああ、本当に久しぶりですね。生の肉を食べたのは。

『ふふっ、あはははは!!』

龍本来の力に、美味しそうな御馳走。

徐々にテンションが上がってきましたね。

たった数カ月しか経っていないのに、悠久の時を生きる私が久しぶりに感じるとは。

私は随分とフェアリーテイルでの生活を楽しんでいたようですね…。

グギャアアアア!!!

『おや、向こうの戦闘が終わってしまいましたか』

森を引き裂く黄色い稲妻が見えるのと同時に、甲高い悲鳴が聞こえてきた。

どうやら決着がついたみたいですね。

……折角テンションが上がってきた所ですが、仕方ありません。

『名残惜しいですが、これで終わりです』

昂ぶった感情を何とか静め、周りの空気を吸い込む。

ラクサスさんの稲妻が出ている内に決めてしましましょう。

『祖龍の息吹』

雷の威力を抑え、拡散の如く広範囲にその力を振り撒く。
流石に咆哮だと森の被害が天災並になってしまいますからね。
今ならラクサスさんの雷でカモフラージュが出来ますし、そこそこ
が妥当です。

しかし、まあ……

『流石の私も疲れましたね』

ドラゴンフォースを再び封印し、人間時の姿へと戻る。

負担が倍に押し掛かるんですよえ、コレ。

人間とは全くもって不便なモノです。それでも関わると決めたの
は私自身ですが。

『ラクサスさんの方はどうなったのでしょうか？』

勝ってはいましたが、負傷が気になりますね。

私は疲労後の気だるさを感じながら、ゆったりとラクサスさんが居
る方向へと歩き出した。

第二十一話 龍、帰還

『これは、また…』

ラクサスさんが居る場所に来ると、焦土が輪にかけて酷くなっていた。

足元にあった黒焦げの木の破片を掴むと、大した力を入れている訳でもないのに音を立てて割れ、砂へと還って行った。

これはもう木炭とかそういう域を越してますね。灰です灰。

「テメエの方も終わったのか」

近くの無事だった木に寄りかかり、魔力の回復を図っているラクサスさん。

戦闘中に服が破れたのか、上半身裸のまま普段のコートを羽織っている。

ミオナにラクサスさんサイズの服ってありましたっけ？

『ええ。お疲れ様です、ラクサスさん』

「…お前それ以上近付くなよ。血生臭エ」

『え？…ああ、すみません』

しかめっ面をしたラクサスさんに言われ、自分の姿を見直す。

そつえば注意を引くために返り血を浴びたんです。

血って中々色が落ちない上にしばらく臭いが残るんですよ…。

私もミオナで服を調達しないとイケませんね。

「行くぞ」

『すみませんが先に行って貰えませんか？』

「あ？」

『少々用事がありまして』

歩けるまでには魔力が回復したのか、町の方へと歩を進めるラクサスさん。

やはり若いと魔力の回復力が早いですね…。

ま、それはそれとして、私は静かにラクサスさんに笑いかけた。

一瞬怪訝そうな顔をしたラクサスさんですが、無言で私から視線を外した。

これは勝手しろ、ということでしょうか？

『すぐに戻ります』

ラクサスさんの背中にその言葉を掛け、私はある方向へ足を向けた。

そこはラクサスさんが最後に放った攻撃の先。

つまりは、あのクルペッコの所。

私は足に力を入れ、焦土になった道を駆ける。

もう手遅れかもしれませんが、確認したいことがあるんですよ。

『ん、アレですね』

黒焦げの木に囲まれ、力無く倒れているクルペッコ。

もう立つ体力も残されておらず、虫の息だ。

だが微かに呼吸の音が聞こえる。

私はクルペッコの傍に腰を降ろし、語りかけた。

『《我が声が聞こえるか？》』

っ、かの……りゅっ…？

聞こえづらいが、話せる。

私はそのことに安堵し、矢次に言葉を紡いだ。

『《そつだ。我が問いに答えよ、彩の鳥》』
なこゆえ…ひと、こ……

『《答えよ、彩の鳥。どうやってここに来た》』

彼の言葉を見殺ししてしまったが、もう時間が無い。
こつとして話せるだけでも奇跡に近い。

蝋燭の炎が最後に激しく燃えるのと同じ現象が彼に起こっている
だけに過ぎない。

やみこ、よばね……きづいたら……

『《…そうか。済まなかったな》』

闇に呼ばれた。

恐らくは私と同じく、あの謎の黒によってここに連れて来られた。
原因も理由も分からない。その正体すら掴めない。

むしろアレは自然現象の一部なのか、それとも何らかの人為的作為
が働いたものなのか……

自然の現象ならば良い。だが人の手が加えられているのなら、放つ
ておくわけにはいかない。

黙って踊らされているというのは、癩に障りますし。

たのみが……きこつて、ほし……

『《申してみよ》』

このみを、くらつて……もらい、たい

『《我で良いのか》』

しほぬものども、より……どしきゅうの……あなたの、かてに……

『《彩の鳥…》』

くろしつ、くれ……たの……む……

クルペッコはそれっきり口を閉ざし、命を終えた。
私は死した身体を愛おしく撫でながら、微笑んだ。

『頼まれずとも、私はアナタを喰らいましたよ』

同郷という理由だけではない。

未知の世界に来てなお、己が種の本能を忘れなかったアナタだからこそ、私が喰うに値する。

糧というならば、存分にその力を私の中で発揮すると良い。

『いただきます』

私はそう言って、クルペッコの身体に齧り付いた。

血肉が魔力の回復を促進し、各部分が私の堅殻をより強固なモノへと変化させていく。

人間時では見た目的な変化はありませんが、皮膚の下の筋肉がより硬くなっていますね。

まあ今回は微々たるものですが。取り込めたのは電気石くらいでしょう。

『…………ふっ、っ馳走様でした』

口周りに付着した血を拭い、その場を立つ。

もうここに用はありませんし、早くミオナの町に戻りましょう。
あまり遅いとラクサスさんの機嫌を損ねますし。

血しか残っていない跡をそっと見直し、その場を去った。

ミオナに着くと、すぐにラクサスさんを見つけた。
どつやら村長さんと話し合っている最中みたいですね。

「え、えーと……森の一部が壊滅……ですか」
「ああ」

……なんとも間の悪い時に帰って来てしまいました。
そして破壊した本人は一切の悪気も反省も見られませんね。
まあ私も気にしていないので人のことを言えた義理ではないので
すが。

『ラクサスさん』
「ルーツ、かえ」ひっ……！だ、大丈夫ですか!？」

ラクサスさんの言葉を遮る村長さん。意外と勇者ですね。
一瞬とはいえ怯えられたのはショックですが、流石に血濡れの状態
では苦笑するしかありません。
普通に考えれば、これが一般的な反応ですし。

『ええ、問題はありません。もしよろしければ、井戸かシャワーをお借
り出来ますか?』

「私の家でよければ使って下さい」

『ありがとございます。ご好意に感謝します』

「いえいえ！滅相も無いです！」

凄いい勢いで首を横に振る村長さん。……痛くないのでしょうか？
私は村長さんの首を心配しながら、ラクサスさんの方を見た。

『依頼の報告はどうなったのですか？』

「説明はした」

「はい、受けております。それで、その……森の一部が壊滅、という話ですが……」

『正確には壊滅というより焦土と化しています。申し訳ありませんが、森の再生には少々時間が掛かると思います』

「再生……。そうですか、分かりました。この度は討伐の依頼、町を代表して感謝致します。今晚はどうぞ私の家でお休み下さい」

丁寧に頭を下げ、クルペッコが討伐されたことを町の人達に報告しに行った村長さん。

いやー、穩便に話が終わって良かったです。

アレ以上話しを引き伸ばされるのの後が面倒臭いんですよー。

「おいルーッ」

『はい。何でしょう？』

「あの森が再生するのに何年掛かる？」

『ざっと200年くらいです』

「……お前な……」

ラクサスさんの質問に軽く答えると、酷く複雑そうな顔をされた。嫌ですね、嘘は言っていないですよ？森の再生には時間が掛かると言っただじゃないですか。

え？“少々”？龍にとっては1000年や2000年なんて“少々”の時間ですよ。

そもそも最近の定義も龍の間では1000年単位ですし。

『土や木、それを含めた自然系の魔法を使える魔導士がいればもう少し早いですよ』

「そりゃそうだが……。まあ、俺達が考えることじゃねえな」

『助言する程度で良いと思いますよ。それより、私は早く水を浴びた』

いです』

もう血も渴き切って瘡蓋みたいになってますね。

服も硬くなってますし、早く新しい服を用意しないと。

あ、そうそう。服と言えば……

『ラクサスさんは服、どうするんですか？ 流石にコートだけ、という訳にもいきませんよね？』

「テキストにそこらで買った」

『では、ついでに私の分もお願いします』

「あ？なんで俺が……」

『私が行ったら確実に入店拒否されるでしょう？ サイズはラクサスさんよりワンサイズ落とした物でいいので』

「……チツ、仕方ねエな」

『ふふ。お願いしますね』

不機嫌そうに歩いて行くラクサスさんに笑いかけ、私は村長さんの家に向かった。

家は無人でしたが、先程シャワーの許可は頂いたので気にせずお風呂をお借りした。

流石は村長なだけあって結構広いですね。

『よごごよご』

身体にへばり付いた服を無理やり脱ぎ、近くにあったカゴに入れる。

渴いたと言いましたが、服と密着していた部分はまだ粘り気がありますね。

長時間も血に塗れていると流石の私でも不快ですし、早く入って落としてしましましょう。

『えーと、シャワーの取っ手は…』

未だにお風呂は慣れませんか。

浴槽は熱いですし、シャワーの威力は弱い。

普段は湖に飛び込んだり、滝で洗い流しているからちよつと物足りないです。

水の冷たさは申し分ないですが。

『ああ、これですね』

シャワーの取っ手を捻ると、頭上から水が降ってくる。

その冷たさに興奮していた身体が鎮まっっていくのを感じた。

しばらく水を浴び、髪にこびり付いた血を乱暴に擦った。

結構力を入れないと落ちないんですね！。

毛先だけなら切ってしまえば良いのですが、今回は頭から被っちゃいましたからね…。

『丸刈りに出来れば楽なんですけど』

無駄に長い自分の髪を摘まみ、呟く。……まあ出来ないんですけどね。

髪なのに結構な強度ありますし、例え切っても次の日になったら元通りに生えてくる。

我ながら面倒臭い髪ですよ、本当に。

『わっ、もう良いでしょっ！』

鳴くような音を立ててシャワーを止め、髪の水を絞る。

足元の排水溝から赤い液体が流れていくのを何気なく見た後、お風呂場から脱衣所へ出た。

着用していた服をタオル代わりにして髪を拭いていると、居間の方

へ続くドアが開いた。

「……ルーツ」

『ああ、ラクサスさん。服を買って来てくれたんですね。ありがとうございます』

「……………」

『ラクサスさん…?』

呼びかけてみるも、返事が無い。

というより何故かガン見されている。

『あの…』

「男、だな」

『いや男ですよ!?!何でそんなにしみじみと!?!』

正確には雄ですが、性別の括りに関しては同じ意味合いです。

むしろ何故そんな事を言われたのが不思議ですよ。

ハッキリ言っただけです。

「つか意外と戦闘傷多いんだな、お前」

『生きていれば色々とありますからね。それより、そろそろ服を着たいのですが…』

「ほらよ」

『ありがとうございます』

片手に持っていた紙袋を差し出され、私はその中身を取り出した。

白のカッターシャツに黒のスラックス。そして少し長めのえんじ色のパーカー。

私はそれに着替え、着ていた服を紙袋の中へ仕舞った。

「ついでに受け取っけ」

ふとラクサスさんなら何かの束を投げられた。
手に取ってみると、お金である。

『……まさかこれ、報酬金ですか？そつだとしたら要りません』
「あ？」

『元々ラクサスさんの依頼でしたし、私はそれに同行させて頂いた身
ですから』

私はラクサスさんのお金を返す。

本来なら受けられなかった依頼ですし、むしろ私の方が報酬金を払
いたい位です。

丁重にお金の受け取りを拒否すると、ラクサスさんが苛ついた目で
私を見た。

「安く見てんじゃねエよ」

『ラクサスさん……？』

「報酬つっーのは依頼の完了だけじゃねエ。依頼を完了した自分の能
力を含めての金額だ。正式の依頼じゃねエならまだしも、テメエの力
はタダ同然か？あ？」

ラクサスさんの言葉に、私は思考した。

正直、自分の力に価値があると思っただけではありません。

あくまでも生きて行く上で身に付けた必要最低限のこと。
空気を吸うのと同じ感覚の必要性。

もし私自身に価値を見出すとしたら、それは爪や牙、鱗などの身体
の部分。

力自体に価値があるとは思いませんでした…。

『……分かりました』

けれどそれが人のルールであるならば、受け止めましょう。
私はラクサスさんから拒否した報酬金を頂き、紙袋の中に入れた。

「それじゃあ俺は行く」

『え？泊まっていられないのですか？』

「この先に用があったからついでに受けた依頼だ。居る理由はねエ」

S級をついで扱い、ですか。

なんとも未恐ろしい限りですね。

……ああ、だから私の同行も許可して下さいましたんですね。

『そうですか。ではお気を付けて』

「ハッ、誰に言ってやがる」

軽く笑って踵を返すラクサスさん。

私は彼を町の入り口まで見送り、一日をミオナで過ごした。

そして次の日、フェアリーテイルへと帰還した。

第二十二話 報告

ミオナでの仕事が終わわり、やっとマグノリアへと到着した。

そつえばギルドへ帰る途中にエルザさんを見かけましたが、後ろに般若が見えましたね。

一体何を怒っていたのでしょうか？

『只今帰りました』

「ルーツ！良かった、無事だったのね！」

ギルドへ入ると、ミラさんが安堵したような顔で駆け寄ってきた。

周りもどこかホツとしたような顔をしていますね。

『無事とは、どういことですか？』

「ごめんなさい！私、S級クエストになった依頼書を外し忘れてて…」

『ああ、それならラクサスさんに同行させて頂いたので大丈夫ですよ』

「え？ラクサスに？」

『はい。行く途中に偶然会ってクエストの難易度が変わったことを教えてもらいました。最初は断ったのですが、ラクサスさんから同行の許可を貰ったので御一緒に』

「あのラクサスが…」

私の話を半信半疑な顔で呟くミラさん。

けれど私の事を疑うより、私が無事だったという事実安心していいようにでした。

「心配をお掛けしてしまっただけです。」

『所で、一つお聞きしたい事があるのですが』

「何かしら？」

『先程エルザさんとすれ違ったのですが、何かあったのですか？なに

やら怒っているみたいでしたが…』

「えっと、ナツ達が無断でS級クエストに行った事は知ってるわよね？」

「……そういえば、悪魔の島に行ったのでしたね。

私は絶対に近付きたくない場所ですが。

そつと横目で周りを見れば、ナツさん達の姿は無い。

どつやらまだ帰って来ていないみたいですね。

『もしかして、エルザさんがその話を聞いて迎えに行ったのですか？』

「そうなの。連れ戻しに行ったグレイも帰って来てなくて…」

『なるほど』

連れ戻す途中で依頼に巻き込まれたか、ナツさん達の口車に乗せられたか…。

考えられる理由は色々ありますが、エルザさんが行ったのなら安心でしょう。

行けるものなら私も行きたいですが……心苦しいですね。

『もし無事に帰って来ても、アレがあるわね…』

『…ああ、アレですか。それは覚悟してもらおう他ありませんね』

遠くを見ながら、帰還後のナツさん達に同情の念を送る。

流石に私もアレだけは嫌ですからね…。

『それはそうと、マカロフさんは居ますか？』

「ええ、奥の部屋に居るわよ」

『今回のこと、報告して来ますね』

「内容を話してくれば私がするわよ？元々、私の不注意で起きたことだし…」

『そんなに気にしないで下さい。不安な顔をされるより、笑顔でいて

くれた方が嬉しいです』

「ルーツ…。うん、ありがとう」

『どういたしまして。では、報告してきますね』

元気になったミラさんにそう告げ、私はマカロフさんの部屋へと向かった。

私がさっきミラさんに言ったことに嘘はありませんが、それだけが理由ではない。

正直、ミオナでの内容は広まって欲しくありません。まだ確信も出ていませんし…。

『マカロフさん、いますか？』

部屋の前に立ち、木の扉をノックする。

中の気配が僅かに動き、返事があった。

「ルーツか。入って良いぞ」

『失礼します』

「帰って来たのじゃな。依頼はどうじゃった？」

『同じ依頼を受けていたラクサスさんに同行させて頂きました』

「ラクサスと、じゃと？」

ミラさんと似た様な反応に少しだけ苦笑が零れた。

その心中は分かりませんが、マカロフさんとミラさんはラクサスさんに対して同じ評価なんですね。

私は意外と良い人だと思えますけどね。素直になれない不器用さがありますけど。

『それで依頼の内容ですが、マカロフさんには話しておこうと思いましつ』

「何かあったのじゃな」

『ええ。依頼自体はごく普通でしたが、依頼された討伐対象に問題がありました』

「問題じゃと？」

『大きさは8mあり、見た目は色鮮やかな鳥です。名をクルペッコと言います』

「……聞いたことないの」

アゴに手を当て、悩んだ末の言葉を聞いて「やはり…」と心の中で呟いた。

名前は違っても同じ特徴のあるモンスターがいることも考えましたが、マカロフさんを見る限りそれも無さそうですね。

私は覚悟を決め、全ての経緯を話すことにした。

『マカロフさん。私が龍だという事実はご存じですね』
「しむ」

真剣な面持ちで頷くマカロフさん。

私がフェアリーテイルに入った日、知られている事を知った時は驚きましたよ。

どうやらギルダーツさんに届けて欲しいと言われていた手紙に書かれていたそうです。

それは別に構いません。驚いたのは、私を龍だと知ってギルドに入れたマカロフさんの行動です。

ギルドを出て行けと言われる覚悟をしていたのに、事実を確認されて終わり。

あまりのあっさり感に拍子抜けして二回も聞き直しましたからね…。

ふふ、我ながら呆れる行動でしたよ。

『これから話すのは憶測の範囲にすぎません。が、私にとっての真実でもありません』

「話してみよ」

『……私は恐らく、遙か太古、もしくはこの世界とは異なる世界から来た龍です』

「どうしてそうじゃ？」

『私はある日、不思議な現象に遭い、気付いたら森に居ました。その現象が何なのかは分かりません。けれど私が異なると言った理由は、私が居た場所に“魔法”という概念が存在しないからです』

そう言つと、マカロフさんは目を見開いた。

けれど口を挟むことなく、私に話の続きを促してきた。

『けれど私は魔法が扱える。元々魔力があつたのか、この世界に来て魔力というものに適応したのかは定かではありません。ですが、雷を操る力も人へ変身する力も、この世界に来てからはハッキリと魔法だと思える何かがあります。』

それ以前はただ漠然と使っていた力が魔法という存在を知って限りなく完璧に理解出来ています。……いえ、力自体に理解“させられた”というのが正しいでしょう』

「…成る程のう。元々魔力があつたかもしれん、というのが遙か太古と言つた理由か」

『はい。まあ私が何処から来たのかは別にどうでも良いです。問題なのは今回討伐したモンスターが、私が居た世界のモンスターだったという事です』

私が居た世界のモンスターが来ているのだとしたら、かなり不味い。

古参の者なら理性での話し合いも可能ですが、若い子たちは気性が荒い。

そもそも言葉自体が通じない可能性もありますし。

『クルペッコには厄介な能力がありますが、個体自体は弱い部類に入

ります。クルペッコ程度で手こずっているようでは他のモンスターが来た時、必ず生態系が崩れます』

生態系というのは、人も例外ではない。

もしこれで肉を見れば見境なしのイビルジョーや三度の飯より戦闘が好きならジャンが現れたら人類はあっさり滅亡しますね。

あの子たちは本当、私でも関係なく襲ってきますし。

まあ2・3回ほどぶちのめして海のご真ん中に捨てれば正気に戻って素直に話を聞いてくれますが。

結局のところ力での解決しかないと思うと頭が痛い話ですよ。

他の子達は何も言わずに首を縦に振ってくれるというのに……。

「壮絶な話じゃのう……」

『そこで頼みがあります。もしマカロフさんでも見聞きしないモンスターの情報があれば教えて欲しいのです』

「それは別に構わんが、どうするつもりじゃ？」

『……分かりません。ですが、同郷の者として放っては置けません』

マカロフさんの言葉に思考してみるも、答えは見つからない。

私自身、どうして良いか分からないからだ。

けれど私は本能で感じた。このまま放って置いてはいけない、と理解出来ないのなら本能で動くまで。

こういつ時、野生の勘は鋭いですよ？

『ただ1つ決まっているとしたら……』

「ん？」

『フェアリーテイルを害する者は、誰であろうと許しはしない。……
という事だけです』

殺気混じりに呟いた後、私は笑みを浮かべた。

このギルドは私にとって、とても大切なモノですから。

「うむ。分かった。何か情報があった時はお前さんの耳にも入れよう」

『ありがとうございます。では、私はこれで』

丁寧に頭を下げ、部屋から出る。

酒場の方に出ればいつもと変わらない喧嘩の騒動が始まっている。

ああ、私はやっぱりこのギルドが好きです。

例え今見ている光景が、永久に過ぎゆく一瞬の出来事だとしても……。

『いつかこの感情も、記憶と共に忘れられるのでしょうかね』

でもせめて、その「いつか」が来るまで、私は……

「あ……！」

「す、すまんルーツ……」

『……ふふ』

感傷に浸っている最中、私の頭上に中身が詰まった酒樽がぶちまけられた。

お酒は嫌いではありませんが、全身ずぶ濡れになるくらいなら嫌いになっても良いです。

ふふ、最近はよくずぶ濡れになりますね。水難の相でも出ているのでしょうか？

しかし、今はそんな考えは置いておきましょう。

『普段は見ていることが多いですが、分かりました。そんなに喧嘩を売りたいなら買いますよ』

「いや、待て待て待て……」

「わざわざじゃ……って【曉】はシャレならん……マジで……」

『行きますよ』

「ギャー！」

「来んなー！」

【曉】を片手に喧嘩に混ざる。

いえ、前々からちょっと混ざってみたかったですよね。

見ているだけでは除け者のような寂しさを感じていましたから。

「漢なら拳で語れー！」

「ルーツが混ざるなんて初めてじゃない？」

「ミラちゃん！呑気に言ってるだけで助けてー！」

「あ、悪いね。僕これからデートだから」

「ロキ！テメエだけ逃げようたってそうはいかねェ！」

皆の反応に笑みを零し、少しだけ後悔した。

まあ今更止めませんけどね。楽しくなってきましたし。

それに……

『ふふ、誰一人として逃がしませんよ？連帯責任です』

逃げる獲物を見ると、追いかけたくなるでしょう？

第二十三話 嵐の前の静寂

「白銀殿が来て下さって本当に助かりましたぞ！」

『いえ、そんなことは...』

私はとある遺跡調査のため、少しばかりマグノリアを離れていた。なにせ今回依頼された遺跡は海の底で発見された遺跡ですから。まあすぐに帰れる距離ではありませんが。

「謙遜することはありません！見て下さい！このザックザクのお宝を」

船に揺られながら、依頼主のザエル様が黄金に輝く金貨を指さす。運が良い事に、今回調査した遺跡は海の底にあったために誰も調べることが出来なかった遺跡でした。

盗賊や海賊、トレジャーハンターに荒らされることなくそのままの形を保っていたようです。

中も複雑な天然の迷路になっており、ある一定の場所まで来ると水圧と激流で身体が大変なことになるという恐ろしい遺跡ですよ。

『喜んで貰えたようで何よりです』

「追加の報酬は本当にいららないと？勿体無いですよぞ！」

『今回の依頼はあくまでも“調査”が主です。財宝に関してはただの副産物に過ぎません』

「ふむふむ。流石は噂に名高い白銀殿ですな！」

別に名高くはありませんが、褒め言葉は受け取っておきましょう。

私は財宝に夢中になるザエル様に話しかけ、調査の報告をした。

『じいちゃんらの遺跡には文字が無いみたいです』

「むむ、文字が無い…とな？」

『はい。その代わり、流れる水の強弱や方向にある法則が見られます』
「何!?して、その法則とは!？」

財宝のせいで狭い船がさらに更に狭くなっている。

ザエル様がずっと身を乗り出したため、私は海へ落ちるギリギリの所で身体を何とか支えた。

『そこまでは分かりませんが、壁の僅かな凹凸によって流れが変化しているようです』

「なんとという奇抜なアイデア！」

『ただ長時間も水流に晒された結果、擦り切れている部分もあるので法則にある程度のズレが生じていると思います』

「痛恨のミス…しかし、遺跡の時代にはそれが出来る何者かが居たということだな！」

人知れぬ遺跡に対して情熱を燃やしているザエル様。

それは良いのですが、あまり大きな動きをしないで下さいね？

ただでさえ重い財宝が乗っていますし、下手をすれば転覆しますよ。

『他に知りたいことがあればもう一度潜りますよ』

「いやいや、もう十分！研究のし甲斐があると分かった以上、これから先は自分で調べることにしよう。仲間と共にな！」

『そうですか。それは良いですね』

仲間という単語にふと笑みを零し、遺跡の研究が無事に進むことを祈る。

このポジティブな思考を持ってさえいればどんな困難にも負けることは無さそうですね。

「それはそうと、ものは相談なんだが…」

『はい。なんでしょっ？』

「よくよく見れば白銀殿の服も底知れぬ古風な気品を感じる。是非譲っ」りません』

「ではここに有る財宝と交換』しません』

「言い値で』売りません』

「く…っ！中々の強敵…！」

そんなに恨みがましい目で見られても絶対に手放しませんよ。

これは私が所持している中で唯一、元の世界の物ですからね。

元の世界に未練があるかどうかの話も置いて、思い入れのある逸品です。

どんなに大金を積まれても渡しません。

そもそも私にとってお金はそんなに重要視するような物でもありませんし。

『諦めて研究に専念して下さい』

「研究者に諦めるという文字は無い！常に追求に追求を重ね、真実を解き明かす！」

『……取り敢えず、依頼は終了ということでご宜しいですか？』

「うむ！構わんぞー！」

話を逸らすように依頼を終わらせ、船を陸の方へと移動させる。

そこでふと、何か大きな影が私達に重なった。

潮風の匂いと共に、嗅ぎ慣れた匂いが私の鼻を擦った。

「か、海賊船…！まさか財宝を狙って!?白銀殿、全速力で逃げますぞー！」

船頭には凶悪な龍の頭を形とったレリーフ。

帆には何故かジャック・オ・ランタンにも似た髑髏。

そしてナイフとフォークが書かれている。……変わった海賊旗ですね。

『いえ、その必要はないと思いますよ』

「何？どついう意味だ？」

『それは……』

「おーい！ルーツ！」

訝しげな顔をしているザエル様に説明しようとした時、丁度海賊船から声が降ってきた。

見上げると、ナツさんとグレイさんが海賊船の手摺りから顔を出してきた。

……いえ、ナツさんは単純に酔っているだけですな。

下からではよく見えませんが、匂いで誰が居るのかはわかります。恐らくはエルザさん辺りが強奪したのでしょうか。この海賊船を。

『私の仲間が、強奪済みですので』

「む……ハハハ！いやはや、頼もしい限りですな！」

一度呆気に取られた顔をするも、すぐに豪快に笑いだすザエル様。私が言つのもあれですが、肝が据わってますね。

「ルーツ！」

『ああ、ハッピーさん。お久しぶりですね』

「あい。エルザが引き上げるか？だって」

『確かにそちらの船に乗った方が早く着けそうですね』

「こちらは先程荷物が増えて重くなってしまいましたし、出来るなら乗せてもらえると助かります。」

ザエル様にも確認を取ると、二つ返事で了承を貰った。

「じゃあエルザに伝えてくるね」

『いえ、引き上げの必要はありませんよ』

「？」

『そうですね……甲板から少し離れてもらえるように伝えて下さい』

「あいー」

『あ、ちょっと待って下さい。戻るならザエル様も連れて行ってもらえますか？』

「猫殿、よろしく頼むぞー」

海賊船に戻ろうとするハッピーさんを引き留め、ザエル様のことをお願いする。

二人が海賊船に戻るのを見届けると、私は海の中へ潜った。

『（やっし…）』

誰の目も無くなった所で、私は背中から翼を生やした。

数回ほど羽ばたいて海の中での動作を確かめると、さっきまで乗っていた船の位置を確認する。

光の反射で輝く水面に、二つの影が浮かんでいる。

あの大きい影は海賊船ですね。その脇にある小さい影が私の乗っていた船でしょう。

その影に狙いを定め、翼に魔力を行き渡らせる。

そして思い切り力を溜め、影に向かって垂直に飛んだ。

『ん、』

身体が船にぶつかる瞬間、掌で船を押し上げ、そのままの勢いで船を推進させる。

水飛沫が海へと戻る前に翼を隠し、船を持ち上げたままの体勢で海

賊船の甲板に着地した。

勢いと重さの所為か、着地した海賊船が僅かに揺らいだ。

『……………ふっ』

そつと溜息を吐き、持っていた船を静かに降ろす。

顔へばりつく髪に少しばかり不快感を感じながら、頭を振って水を飛ばす。

「まさか船ごと飛んでくるとは、な」

『引き上げてもらうより早いでしょうっ？』

「だからって普通は飛んでこないから!!」

呆気にとられている海賊の人達を前に、ルーシィさんのツッコミが冴えわたる。

ルーシィさんは会つごとにツッコミのキレが増してますね。

まあ今はそれより、早く船を動かしてもらおう事にしましょう。

『船長さん』

「ひいーは、はははいー!」

『船を動かしてもらえますか?』

「へいー! アニキー!」

『え、あに…!?』

初対面なのに怯えられたのは少しショックですが、その後の言葉に全てが吹っ飛んだ。

アニキってなんですか、アニキって。

第二十四話 龍と幽鬼の支配者

喧嘩し、怒られ、また喧嘩し、それでも尚、背中を預けられると信頼出来る仲間。

仲間は家族で、ギルドは帰る家だ。

だから私は“いつも”のようにそれが続くのだと思っていた。

目の前の光景を見るまでは

『じ、れは…』

「俺達のギルドが!!!」

巨大な鉄の釘を何本も打たれ、建物としての形を保っているのがやっとだと思えるほどに破壊されたギルド。

マグノリアに帰って来た時、街の人達が私達を見てひそひそと話しているのは聞こえていましたが……。

『これが原因だったのですね』

流石に予想の範疇を超えていますよ。

闇ギルドならまだしも、正規のギルドに喧嘩を売ってくるなんて考えもありませんでしたからね。

多少の小競り合いならあるとは聞いていましたけれど。

「ファントムよ」

『ミラさん…』

「悔しいけど、やられちゃったの……」

悲しみと、怒りと、悔しさで。

複雑な感情が入り乱れる顔をし、瞼を伏せるミラさん。

ナツさん達はミラさんの言葉を聞いて、事の原因を問い詰めようとギルドの中へと急ぎ足で入って行った。

私はもう一度ギルドの現状を見直し、破壊の原因である鉄の釘に手を触れた。

『……成る程』

鉄の属性なんて初めて見ましたが、龍の属性も混ぜってますね。ですが私たち龍とは少々異なる力……恐らく、ナツさんと同じ。とすると、これをした相手は滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーですか。

『龍の子に、あまり手を出したくは無いのですが…』

私にとって滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーはヒトと龍の共存を体現してくれた、可能性のある愛しい人間。

出来るなら戦いたくない。敵になりたくもない。

どうかここで手を引いて欲しい。私がまだ、理性を押さえることが出来る内に。

「ルーツ、」

『…』

後ろから声を掛けられ、我に戻る。

振り返ると、どこか心配そうな顔をしたミラさんが居た。

おや、ナツさん達と中に入らなかつたのですね。

「何を考えてるのか分からないけど、あまり思い詰めないでね」

『……ふふ、私なら大丈夫ですよ。ありがとうございます』

「なら良いけど…」

『私はこのまま帰ります。マカロフさんに動く気は無いでしょう』
『？』

「ええ。ギルド間の武力抗争は評議会で禁止されてるから」

それを聞いて安心した。

恐らく今回の被害はギルドの建物のみ。

ギルドの仲間には怪我人はいなさそうですね。

もしいたらマカロフさんが黙っているはずありませんし。

『では、今日はこれで失礼します。依頼の報告は後日に』

「待って、ルーッ」

『?』

踵を返そうとした時、ミラさんに止められた。

何か用事でもあるのだろうかと振り向いた時、私の身体は静止した。

「おかえりなさい」

笑顔。

先程までの複雑な感情を全て覆い隠すほどの、笑み。私もその顔に釣られように笑った。

『はい』

返事をし、今後こそ本当に踵を返した。

そして寝床へと帰る途中、私は認識を再確認した。

『やはり人間は強く、愛おしいな』

そんな暖かな心とは裏腹に、現状は悪い方へと歩みを進める。

私の淡い期待など、簡単に踏み潰して……。

次の日、それはマグノリアの南口公園で起こった。

偶然近くを通りかかっていた私は、驚きと戸惑いの声に誘われそこに向かった。

だが公園に着くと、自分の目を疑うような光景があった。

「レビィちゃん…」

「ジェット…ドロイ!!」

私より先に来ていたルーシィさん達が、中央に生えている大木を見上げている。

いや、正確には大木に磔にされている三人。同じギルドの仲間を。痛々しい傷と共に、レビィさんの身体に付けられた、とあるギルドマークが目を引いた。

『……………ファントム』

自分でも驚くほどの低い声が、唸り声のように空気を這う。手を引いて欲しいと願った。敵にはなりたくないと思った。けれど、仲間^{かそく}を傷つけられたのなら、いくら同胞でも許しはしない。

「ボロ酒場までなら我慢できたんじゃないかな…」

「…マスター」

「ガキの血を見て、黙ってる親はいねえんだよ」

群がる野次馬から、マカロフさんが姿を現す。

言葉は冷静だが、反対に沸騰しそうなほどの魔力が身体を包みこんでいる。

マカロフさんの持っていた杖が、悲鳴をあげて砕け散った。

「 戦争じゃ 」

その一言で、私の中の何か引き千切れる音がした。
精々今の内に楽しんでおけ、亡霊。
これから、本当の地獄が待っているのだからな。

フェアリーテイルとファントムは仲が悪いのに、ギルド同士はそこ
そこ近い距離にある。

つまり何が言いたいのかということ、襲撃するには丁度良いとい
うことだ。

「フェアリーテイル妖精の尻尾じゃ あああああっ!!!」

ファントムのドアをナツさんが特攻よろしくぶち壊し、マカロフさ
んがそう宣言する。

そして、戦いの火蓋は切られた。

「な…っ…」

「おおおおお……らあッ!!!」

「ぐわあああ…」

「て、てめえ…!!」

「誰でも良い!!かかって来いやア!!」

ナツが両手に炎を纏い、敵の方へ突っ込んでいく。

驚きで固まっていた何人かはその攻撃で机ごと吹っ飛ばされた。

ふふ、流石はナツさん。

「調子に乗るんじゃないやねえぞコラ!!!」

「ア?」

「ぬうおおおお!!」

そしてグレイさん、エルフマンさんも敵陣へと身を乗り出す。

それを皮切りに、次々と妖精と亡霊が入り混じる戦闘があちこちで始まる。

私も背中【曉】を抜き、刀身に紅雷を纏わせた。

『さいやくしんらい【災厄紅雷】』

仲間にあたらない様に気を配りながら、広範囲に電撃を放出する。

倒れた屑共には目もくれず、次の獲物に視線を走らせる。

攻撃を逃れた何匹かはマカロフさんの所へ向かったが……実力も計れんのか?

「ぐああああっ!!」

「ば、バケモノ……!!」

「貴様等はそのバケモノのガキに手エ出したんだ。人間の法律で自分を守るなどと、夢々思うなよ」

「ひ……っ!!」

案の定、巨人化したマカロフさんにあっさりと潰され、戦意すら失った。

恐怖しか残らない奴等に、立ち上がる勇氣は無い。

「ジヨゼー!!出て来んかア!!!」

「どこだ!!ガジルとエレメント4、どこにいる?!!」

マカロフさんとエルザさんが敵の名を叫んでいる。
私は怒りのまま【曉】を振り抜き、周囲を見渡した。
それらしい強さを持った者は此処にはいない。
……いや、1人だけ居るな。まだ嗅ぎ慣れない臭いが、1つ。

「エルザ！ここはお前たちに任せる。ジョゼは恐らく最上階。ワシが
息の根を止めてくる」

「お気を付けて」

マカロフさんが上へと続く階段を昇って行く。
そしてその姿が見えなくなった時、臭いが唐突に近付いてきた。

「はアー!!」

「な、なんだアイツ！味方まで!?!」

腕を鉄へと変化させ、自身の味方ごと攻撃する。
恐らくアイツが、私達のギルドを襲った張本人。
頭がそう認識すると、瞳が焼けるように痛みだす。

『がぁアアぁぁアッ!!』

視界が紅く染まり、爪と牙が僅かに伸びる。

閉じ込めたハズの龍の力が、微かに漏れ出しているを感じる。

だが、それがどうした。

「ウ、ぐ、ぐ……」

紅雷を纏った【曉】が龍の子の腕に当たる。

鉄と剣が鈍い音を立ててぶつかる。

お互いに龍の属性を帯びた武器だ。

大した決定打ではなかつた。

『誰に牙を向けたのか、分からせてやるわ』

「ハッ、クズの分際で…!!」

剣を受け止めている腕が、不自然に膨れ上がる。

私は剣を引き、その場から後ろへ下がった。

と同時に、鉄が枝分かれしたように周囲へ飛んでいく。

その攻撃は先程と同じく仲間まで巻きこんでいる。

『仲間まで攻撃するか、龍の子』

「避けられねえよつなクズが悪いのわ」

言い方は悪いが、ある意味正論ではある。

そもそも邪魔にならないように逃げればいいのだ。

それを、何を思ってたか近付いてくる奴も悪い。

所詮は同士討ち。自滅し、数を減らしてくれるのは好都合だ。

「テメエのことは知ってるぜ、白銀のルーツ」

『そうか。龍の子の耳に入っているとは嬉しい限りだ』

「実際見たが、テメエのどこが、白銀、なんだか」

龍の子の言葉に違和感を感じ、ふと自分の髪を見る。

白いが……一部、紅が混ざっている。

『っ、っ』

その色に心が揺らぐ。

私は紅く染まった髪を握り締め、静かに息を吐いた。

落ち付け。私は誓ったはずだ。もう二度と、あんな惨劇は起こさな
いよ。

頭が冷静になっていくのと同時に、紅い視界が他の色を取り戻していく。

僅かに漏れ出していた龍の力も、少しずつ塞き止められていく。

「隙だらけだぜ！」

『この程度、隙とは……』

「ガジルー!!俺が妖精の尻尾フェアリーテイルの滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーだア!!」

剣を構え直そうとした時、ナツさんの横槍が入って来た。

凄いい勢いで飛んでいく龍の子……いえ、ガジル様に、私は何だか笑いがこみあげてきた。

「ルーッーコイツよこせ!俺がやるー!」

『ふっ、く……ッあははは!』

「る、ルーッ……?」

『あははッ、あー…可笑的い。ふふ、ナツさんのお好きにどうぞ』

「おっしゃー!」

やる気に満ちた顔でガジル様の方を見るナツさん。

よこせ、なんて……。一応獲物を横取りする自覚はあるんですね。

私は怒りの毒気を抜かれ、クスリと笑った。

『ありがとうございます。ナツさん』

仲間を傷つけられた怒り。

同胞の子に会った愛おしさ。

その二つの感情が私の中に存在している。

敵に向けるには、あまりにも矛盾した感情。

だから自分の心を制御し切れずに怒りに狂った。

あのままだと、私は昔の私に戻るところだった。

「オラァ!!」

『気配の消し方が甘いですよ』

「ぐえっ!」

襲いかかって来たファントムの一員を【曉】で払い飛ばす。

そして、慈しむように笑った。

確かに敵ではありませんが、彼もまた私が愛でる人間の1人に過ぎません。

勿論、レビィさん達を傷つけた代償は支払ってもらいますが。

『掛かってくるのならお相手致しましょう』

剣を握り直し、周りを見渡す。

その時、地面が唐突に揺れ始めた。

圧倒的な魔力に建物が堪え切れなくなり、所々に罅割れが走る。

「な…何だ!」

「地震!」

慌て始めるファントムとは対照的に、フェアリーテイルの全員は口元に笑みを浮かべる。

分かっているからだ。この地震を引き起こした人物を。

「これはマスター・マカロフの“怒り”だ。巨人の逆鱗……もはや誰にも止められんぞ」

「ひ…ひい!!」

「ウソだろ!?ギルド全体が震えて…ッ!」

「覚悟しろよ。マスターがいる限り、俺達に負けはない」

力強い魔力に、フェアリーテイルの士気が高まる。
しかし、何故でしょう。安心感とは裏腹に、嫌な胸騒ぎがします。
こういふ勘ほど外れていて欲しいものですが……。

『!!』、ねは…ッ』

物凄い勢いで、空气中に魔力が放出されている。

この消費されている魔力の持ち主は、私が先程感じた人物と同じモノ。

『マカロフ、さん…?』

私がそう呟いた時、背後から何か落ちてくるような音がした。

第二十五話 時間稼ぎ

「魔力が……ワシの魔力が……」

「じっちゃん!」

「マスター!!」

正直目を疑いましたが、落ちてきたのはマカロフさんだった。あれほどの魔力が何故か枯渇し、衰弱しているの是一目瞭然。

『退いて下れよ……』

マカロフさんの傍に寄っている人達にその声を掛け、私は咄嗟に大気中に漂っていたマカロフさんの魔力を掴み取った。

掴めたのは僅かばかりだったが、それを彼の身体へと還す。

今のマカロフさんは、言わば正常に呼吸が出来なくなったのと同じ。

例え気休めだろうが無いよりはマシという状態だ。

「マスター! しっかり!」

「ありえねえ! どうやってたらマスターがやられるんだ!」

「一体、上で何が……」

マカロフさんがやられたことで、ギルド内に動揺が広がる。

逆に、相手側の士気は一気に膨れ上がった。

「いけるぞ! これで奴等の戦力は半減だ!」

「今だ! ぶっ潰せ!!」

此方側に隙が出来たことを見逃さず、怒涛の如く攻め始めるファン

トム達。

まさに形勢逆転の展開。このままでは本当に潰されかねないと私が危惧した時、エルザさんが立ち上がった。

「撤退だ！全員ギルドに戻れ!!」

「バカな！」

「漢は引かんのだー！」

「オレはまだやれるぞ！」

「私も！」

言葉は好戦的だが、心の迷いは吹っ切れていない。

動揺したままで勝てるほど、恐らくファントムは弱くない。

マカロフさんを倒した敵もいることですし、このままでは分が悪いでしょう。

「マスターなしではジョゼには勝てん！撤退する！命令だ!!」

現状を冷静に判断したエルザさんがそう指示すると、渋々だが撤退の気配を見せ始めた。

相手もそれが分かったのか、追い打ちをかけてくる。

「逃がすかア！妖精の尻尾!!」
フェアリーテイル

私は撤退する彼等とは逆方向、つまり相手に向かって走る。撤退命令に背く訳ではありません。

けれど誰か1人がある程度の時間を稼ぐ必要がある。

『エルザさん！先に行ってください！』

「な…っ、ルーツ！お前1人では…！」

『大丈夫です。殿は任せて下さい』

向かってくる相手を何人が薙ぎ払い、振り向きざまに笑う。
何か言おうとしたエルザさんですが現状を見て、私の役目が必要だと悟る。

そして苦渋に迫られたような顔をして、一言だけ言い放った。

「必ず帰って来い！」

『承りました』

ここで負けるつまりは毛頭ありません。勿論、勝つつもりもないですが。

私の役目はあくまでも時間稼ぎですから。

「逃がすな！やれー！」

「おおおおお!!」

『行かせませんよ』

唯一の入り口の前に立ち、行く手を阻む。

撤退した彼等を追うには私の後ろを通らないといけない。

無論、私に通す気はありません。

「たかが1人だ！」

「そうだ！やっちまえ！」

攻撃してこようとしている彼等に対して、静かに笑みを見せる。
敵の足を止める事に関しては、少しばかり自身がありますよ。
何も武力行使だけが強さでは無いと教えて差し上げましょう。

『とまれ』

「ッ……!!!」

殺気に龍の力を織り交ぜ、言葉を紡ぐ。

魔力が一切こもっていない、ただの声。

けれど意味有る言葉は時に絶大な力を持ち、影響を与える。人の間ではこの力を、言霊」と言っていましたね。

『それ以上近付いたら、相応の覚悟をしてもらいましょうか』

【曉】を真っ直ぐ伸ばし、切っ先を相手に向ける。

得も言われぬ静寂の中、ごくりと固唾を飲んだ音が聞こえた。

『(これで時間稼ぎにはなるでしょう)』

獲物を見るような目で彼等を見ながら、内心は穏やかに笑っている。

この力は万能ではありません。所詮はただの言葉に過ぎませんし、強い意志さえ持っていれば簡単に突破出来ます。

それが出来ないのは、無意識の内に私の方が格上の存在だと認めているからです。

非暴力による拘束。時間を稼ぐ上で、これがもっとも有効な手段です。

私にとっては、ですが。

「ハッ……！」

『！』

嘲った笑い声が頭上から聞こえてくる。

私は咄嗟に【曉】を盾にし、落ちてくる攻撃を防いだ。攻撃してきた人物に、少しばかり驚愕した。

『…先程、気配の薄い方と本部に戻られたのでは？』

「ギヒヒッ。そのつもりだったんだが……なア！」

両手を鉄に変え、何度も打ちこんでくるガジル様。
ふむ。これは少々キツイですね…。

「こんな所でのんびりしていいのか？ 白銀」

『おや、それはどついう意味でしょう』

「本部にいる女のことだよ」

本部…。

ああ、そういえばルーシイさんを捕まえたと話していましたね。
けれどそれについて心配することは一つもありません。

『ルーシイさんは逆境に屈するほど弱い方ではありません』

「捕まるような奴が弱くねエだと？ 面白い冗談だな」

『それと』

「あ？」

『私の仲間を、あまり言めないで下さい』

ルーシイさんの話を聞いていたのは私だけではない。

もう一人、聴覚に優れた方がいる。

「^{サラマンダー}火竜か」

『ええ、ナツさんなら必ずやってくれます』

「フン。それよりテメエは、自分の心配をしたらどうだ？」

攻撃を防いでいると、不意に彼がニヤリと笑った。

その様子を怪訝に思っていると、私の耳に嫌な音が聞こえてきた。

『……………ッ…』

私は周りに紅雷を放電さえ、その隙にガジル様と距離を取った。

そして、手に持っている【曉】を横目で見た。

まさかコレを狙っていたとは、本当に驚きですよ。

「ギヒヒッ…もう使いモンになんねェなァー！」

そこには、刀身の中央に深い亀裂が走った【曉】の姿。

同じ場所ばかり集中的に攻撃していると思ったら、破壊が目的ですか。

『中々やりますね』

「さっさと来いよ。隠してんのか知らねェが、テメェも滅竜魔導士だろ」

『!!』

武器を破壊されたことにも驚きましたが、ガジル様の今の言葉の方が驚きが強いですね。

一体いつ、私が龍に通ずる者だと分かったのでしょうか？

あまりそれらしい行動はしていなかったと思うのですが…。

『正確に言えば、私は滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーではありませんよ』

「シラを通す気か？」

『いいえ、真実ですよ』

穏やかな笑みを彼に向け、【曉】を頭上に掲げた。

雷が流れるように【曉】へと蓄積され、漏れた雷が不規則な音を立てながら輝く。

その強烈な光に影が行き場を失くし、まるで光から逃げるように私を中心に伸びて行く。

『出来れば避けて下さい』

「上等だ。来いよ」

目が眩むほどの光はその場を白に染め、一瞬にして消えた。
残ったのは、静寂。

.....

「.....あ？」

たっぷりと間を置き、声が響く。

その張本人はルーツがいた場所を見た。だが、そこには誰もいない。

「あ.....あのクソ野郎！逃げやがったな!？」

役目通りに時間稼ぎを終えたルーツは、目眩ましの合間に撤退していた。

何とも言えない空気の中、鉄竜の叫び声が木霊した。

『時間稼ぎは出来たでしょうか？』

一定のリズムでフェアリーテイルのギルドへと走る。

アレ以上の時間稼ぎは少々難しいですね。

ガジル様が言霊を破ったことで、相手側の空気も緩み始めていましたし.....

それに、私も武器を失ってしまいました。

『まさか破壊されるとは予想外でした.....』

よくよく考えてみれば作ってから一度も修理・修繕をしていませんし、壊れた原因も当たり前といえれば当たり前ですね。

自業自得な結果とはいえ、武器を失ったのは厄介です。

『……手加減、どうしましょ…？』

武器が無いということは、つまり私自身が戦わないといけない。不味いです。非常に不味いです。

ここ最近は武器の使い難さを理由に、私自身の手加減を忘れかけている。

いや、ちょっと本当に待って下さい。人間相手の手加減ってどれくらいでしたっけ…？

『帰ったら早く直してしまいましょ』

加減を間違えてしまう前に。

こればかりは人間の中で暮らす上で死活問題ですね！。

『…』

考え事を終えると、丁度ギルドに辿り着いた。

追手のことも考慮に入れていたのですが、どうやら杞憂になったようです。ね。

ほっと安堵の息を吐き、鉄の釘が除去されたギルドに足を踏み入れる。

「あー！痛エー！」

「まさか俺達が撤退するハメになるとは…」

「悔しいぜえ!!」

傷を負っているものの、どっちら皆さん無事なようです。ね。

「ルーツ！」
「帰って来たのか！怪我はねエか!?」
「1人だけで無茶しやがって！」
『ただいま戻りました。マカロフさんは?』
「ポーリユシカさんの所に運ばれたぜ」
『そうですか…』

まだお会いになったことはありませんが、腕は確かだと聞いたことがあります。

マカロフさんも古い知り合いだと言っていましたし、心配することは無さそうですね。

「つかお前の方はどうなんだよ」
「あの人数相手に足止めしてたんだろ？」
『武器が壊されました』
「武器だけかよ。化け物が」
「いや、化け物だろ」
『あはは、酷いですね。しまいには泣きますよ?』

若干引き気味の彼等に冗談を飛ばし、もう一度周りを見渡す。
そして、部屋に置くに座っている彼女を見つけた。
傍らにはナツさんも一緒に居る。

『お帰りなさい。ルーシィさん、ナツさん』
「あ……ルーツさん」
「ルーツ！テメエ1人だけファントムに残りやがって！ずるいぞ！」
『ふふ、それはすみません』

怒るナツさんを言葉だけでさらりと避ける。

私の声にゆったりとした動作で顔を上げるルーシィさんですが、そ

の表情は暗い。

随分と浮かない顔をしていますね。

「どーした？まだ不安か？」

「ううん。そういつのじゃないんだ……なんか、ごめん……」

ルーシィさんの表情に気付いた 그레이さんと エルフマンさんが近付いてくる。

「まあ、お金持ちのお譲様は狙われる運命よ。そしてそれを守るのが漢」

『お金持ちのお譲様？』

「そういや、ルーツはまだ聞いてなかったな」

エルフマンさんの言葉に首を傾げると、 그레이さんが説明してくれた。

どうやらルーシィさんはこの大陸でも有数のお金持ちで、ハートフィリア財閥の令嬢とのこと。

私自身はお金に興味が無いので漠然としたイメージしかありませんが、結構凄い家のお譲様らしいですね。

そして、ファントムはルーシィさんの父親からの依頼で、彼女を連れ戻そうとしている……と。

成る程。それでルーシィさんは自分に負い目を感じているんですね。

「ルーシィ、何で隠してたの？」

「隠してた訳じゃないんだけど……家出中だからね。話す気にもなれなくて」

それはそうでしょうね。

自分が家出した話をするほど、ルーシィさん自身も割り切っている

訳では無さそうですし。

「パパが私を連れ戻すためにこんなことしたんだ。最低だよ。……でも、元を正せば私が家出なんかしたせいなんだよね。」

「そ、そりゃ違うだろ！悪いのはパパ「馬鹿！」……あ、いや、ファントムだ！」

「私の身勝手な行動で皆にこんなに迷惑かけちゃうなんて……。本当にごめんね。私が家に帰れば、済む話なんだよね……。」

「そーかア？」

黙ってルーシイさんの話を聞いている中、ナツさんが笑いながら話
す。

彼女の迷いと決意を、分かった上で。

「この汚ねー酒場で笑ってさ、騒ぎながら冒険してる方がルーシイ
て感じだ」

「……………」

「ここに居たいって言ったよな。戻りたくねエ場所に戻って何があん
の？妖精の尻尾フェアリーテイルのルーシイだろ。ここがお前の帰る場所だ」

『そうですよ。ルーシイさんはルーシイさんです。貴女がどこの家の
人だとか、そんなこと誰も気にしていませんよ』

「ナツ…ルーシ…」

ルーシイさんが堪えるように目に涙を浮かべる。

え、あ……な、泣かせるつもりは無いですよ!!

どうしましょう!?私、人間のあやし方なんて知らないですよ!!

「泣くなよ、らしくねえ」

「そうだ！漢は涙に弱い！」

「だって……」

取り敢えず、すんと鼻を鳴らすルーシイさんの頭をそつと撫でた。人間が泣くのは体温調節の他にストレスの軽減になると誰かが言っていましたし、ここは我慢せずに泣いてもらいましょう。ずつと自分のせいだと気を張り詰めていたようですしね。

しかし、そんなことも束の間。

どこからか鈍い音と共に地響きがギルドを揺らした。

「な、何だ!？」

「外だー!!!」

外を見張っていたアルザックさんの言葉に、全員がギルドの外に出る。

そこで、全員が目の中の光景に驚愕した。

これは流石に、予想外過ぎますね……。

「想定外だ……まさか、こんな方法で攻めてくるとは……」

「ど、どつする……!」

目の前には、六足歩行で移動する建物。

一番上に掲げられているギルドマークから察するに、恐らく
ファントムロード
幽鬼の支配者のギルド本部そのもの。

『まさか拠点ごと移動してくるとは、考えもありませんでしたね』

「こちらの動揺など気にも留めず、相手の攻撃が無慈悲に開始された。

第二十六話 反撃

「あれは……」

ファントムのギルドの入り口部分が開き、そこから砲台のような物が出てきた。

先端部分から酷く濃縮された高魔力が集まっていますね……。

「魔導集束砲だ!!」

「ギルドを吹っ飛ばすつもりか!?!」

あれほどの魔力を一点に撃たれたら、ギルドの破壊だけでは済みませんね。

それ以前にこちら側の命も結構危ないのですが。

『皆さ、「全員伏せるオオオオオ!!」』

攻撃を受け止めようとした私の言葉を遮り、エルザさんがタオル一枚で身体を隠して出てきた。

……取り敢えず、服を着てから出てきて下さい。

そして、彼女はそのままの恰好で前に飛び出た。

「エルザー!」

「どつする気だ!?!」

エルザさんは走っている途中で鎧を換装させ、砲台の前に立ちはだかった。

あの鎧、かなりの硬度を誇っていますね。一体何の素材を使っているのでしょうか??

「ギルドはやらせん!!」

「金剛の鎧!?!」

「まさか受け止めるつもりじゃ……」

「いくら超防御を誇るその鎧でも……!」

「よせ!エルザ!死んじまうぞ!」

だが全員の言葉を受けてもなお、エルザさんの意志は揺らがない。ファントムの前に悠然と立ち、魔導砲を睨みつけている。

私も前に出ようとしたが他の人達に止められた。

「エルザ!」

「ナツ!ここはエルザを信じるしかねえんだ!!」

ナツさんの方も 그레이さんに羽交い締めになれ、止められている。さて、どうしましょうか……。私の見立てでエルザさんが受け止められる確率は五分五分。

ファントムの攻撃は土台が安定している分、いくらか有利でしょうか?

けれど私が出ていける雰囲気でもありませんし……ここは 그레이さんが言った通り、エルザさんにお任せしましょう。

「ふせろォー!」

エルザさんがそう言った瞬間、ファントムの魔法が発射された。

轟音と共に一点に集束された魔法が海を裂き、大地を砕く。

その攻撃にエルザさんの前に魔法陣が発動し、お互いの魔力の削りあいが始まった。

最初こそは堪えていたエルザさんも、その足を徐々に後ろへ下げられていく。

「ぐあぁあぁあぁあっ!!」

鎧の罅割れる音とエルザさんの叫び声。

それらを全て飲み込むように魔力が弾け、暴煙が舞った。

「エルザーー！」

『エルザさんー！』

煙が晴れるのも待たず、匂いだけで彼女の所へ向かう。

どうやらナツさんの方も向かっているみたいですね。

そして煙が晴れた時、私達の後ろにあるギルドは堂々とその姿を見せた。

「エルザ！おい、しっかりしろー！」

ナツさんの方が私より早く着き、彼女の肩を支えていた。

これは……大分、不味いですね。外傷も酷いですが、魔力もほとんど無いに等しい。

早くどこかで休ませないといけませんね。

《マカロフ……そしてエルザも戦闘不能》

ファントムのスピーカーから声が聞こえてくる。

痛手を負ったこちらに、追い打ちをかける気でしょうね。

《もう貴様等に凱歌はあがらねエ。ルーシィ・ハートフィリアを渡せ。今すぐだ！》

けれどフェアリーテイルに、そんな揺さぶりに屈する人は誰一人としていない。

「ざけんじゃねエ！」

「仲間を敵に差し出すギルドがどこにある！」

「ルーシイは仲間なんだ！」

「そーだ！帰れ！」

「ルーシイは渡さねエ！」

声に反応したのか、エルザさんが地面に伏したまま顔を上げた。

「仲間を売るくらいなら死んだ方がマシだッ！！」

「俺達の答えは変わらねエ!!お前等をぶっ潰してやる!!」

近くにいた私は、エルザさんとナツさんの怒声に痛いくらいに肌を刺された。

鼓膜まで破れそうなほどの、ビリビリとした感覚。

私は少しばかり驚き、小さく笑った。

『これだから、人間というものは……』

愚かで、哀れで、浅はかで、卑しくて……美しい。

圧倒的な絶望を受けてなお、人はそれでも立ち上がる。

そんな人間が、私は愛おしくて堪らない。

良いギルドに入りました。良い仲間に巡り会えました。

私も、ルーシイさんも……ね？

《ならば更に特大のジュピターを食らわせてやる!!装填までの15分、恐怖の中で足掻け!!!》

その言葉の直後、ファントムのギルドから黒フードを被った奴等がぞろぞろと出てきた。

魔力は感じますが、生きた匂いがありません。人ではないみたいです

ね。

……人で無いなら、手加減の必要はありませんよね？

『ふふ、上等ですよ』

ゆらりと立ち上がり、背中の【暁】を抜く。

魔力を籠めることに亀裂が広がりますが、どうせ壊れるならいっそ清々しいくらいに散らせた方がスッキリします。私が。

『災厄紅雷』

【暁】を振り、視界に見える敵を一掃する。

それと同時に魔力に堪え切れなくなった【暁】が音もなく砕け、粒子のごとく消え去った。

若干の喪失感が手に残りますが、また作れば良いだけの話です。今はそれよりも……

『どちらが喰われる立場か、ハッキリさせましょうか』

口角を上げ、足が2本ほど無くなったファントムを睨みつけた。

第二十七話 龍、負傷

『さて、ナツさん』

『お、おっ…』

喪失感のある手を握り、ナツさんに振り向く。

若干引き気味なのは気のせい……ではさそうですね。

確かにやり過ぎた感がありますが、あれぐらいで引き下がるような相手でもなさそうですね、別に後悔はしていません。

『殴り込み、行きましょつか？』

親指でファントムのギルドを指さし、笑顔を浮かべる。

顔を引き攣らせたナツさんも私の言葉を聞き、犬歯を見せた。

「おう！ハッピーー！」

「あいせー！」

ハッピーさんの翼^{テラ}でファントムのギルドに向かって行くナツさん。私は近くに居た仲間^{仲間}に重症のエルザさんを頼み、カナさんに話しかける。

あれで終わりでないみたいですからね。

『カナさん、ギルドをお願いします』

「分かってる。さっきのはジョゼの魔法【幽兵^{シエイド}】。人間じゃない」

カナさんの言葉を肯定するように、霧散した黒い霧が元の形に戻りつつある。

結構な威力で撃ったのですが、復活が早いですね。

少々自信を失くしてしまっそうですね。

「ジュピターのことはアンタとナツに任せたよ」

『はい。承りました』

肩を軽く叩かれ、私もファントムのギルドに乗り込んでいく。

どうやらナツさんはハッピーさんと一緒に砲台の方に行かれたみたいですね。

ならジュピターの方はナツさんに任せて、私は下の方から潰していくとしましょう。

あまり強い方を相手にすると、手加減に困りますし。

「おい！来たぞ！」

「白銀のルーツだ！」

ファントムに乗り込むと、さっそく敵がぞろぞろと集まって来た。

向こうから来て下さるなんて好都合ですね。

『言っておきますが、手加減はしても容赦は致しませんので』

どっぞそのつもりで。

私は静かに笑みを浮かべ、身一つで敵の中に入った。

そしてただ純粋な力のみで彼等に拳を振るった。

「ぐあッ！」

「クソ！やっぱり化け物がコイツ！」

『ふふ、いい加減言われ慣れて来ましたね…』

飛んでくる魔法を素手で返しながら自嘲を浮かべる。

全くもって慣れとは恐ろしいものですね。

私が言えたことではないのですが。

「死ね！白銀！」

「今度こそくたばりやがれ！」

私を囲むように、八方から魔法が次々と放たれる。

力で勝てないなら数で勝負、とでも思ったのでしょね。

無い知恵を絞り出して考えたのなら評価するべきなのでしょうが

……それは少し、私を嘗め過ぎてはいませんか？

『……………』

その場で微動だにせず、私は立ち尽くした。

直後、耳元で魔法が爆ぜる音と共に黒煙が視界を覆った。

「よし、当たった！」

「流石の白銀も、あの魔法をくらって無事に済む訳がねエ！」

「このまま畳みかけるぞー！」

「「「「おぉー!!!」」」」

勇猛果敢な鼓舞が煙越しに聞こえてくる。

このまま黙っていても良いのですが、今の私は優しくないのでからね。

『その程度ですか？』

笑顔を張り付けたまま、煙を腕一本で薙ぎ払う。

開かれた視界には驚愕した表情の敵が映った。

本当に「信じられない……」という顔をしていますね。

「……………マジでバケモンか、こいつ」

いい加減聞き飽きましたよ、その台詞。
たまには違う言葉でも使ってみてはどうでしょう？

『今度は私の番です』

片手で服についた汚れを払いながら、もう片方の手を相手に向ける。

所々に紅い光と鋭い音を出現させて、“それ”は徐々に広がっていき

肌を逆なでするような感覚を感じ取ったのか、何人かは私から後退し距離を置く。

そんなことしても、もう遅いんですけどね。

『災厄紅雷』

空間に満たされた、微弱に放電された電気。

その電気の威力を一気に上げた瞬間、周りは閃光に包まれた。

悲鳴は豪雷の音にかき消され、光が収まった後に残されたのは口から黒い煙を出している数多の人間。

確認のために周辺を見直し、死人が出ていないことに安堵の息を吐く。

……良かった、全員気絶しているだけのようですね。

『お、っしょ…っしょ』

不意に地面が大きく揺れ、僅かばかり体勢を崩した。

そのままどうなるかと様子を伺っていると、振動はすぐに止んだ。

地震、という割には少し変な揺れ方でしたね…。

『少し急ぎませうか』

何となく嫌な予感に駆られ、廊下へと続いているであろう扉を開ける。

そして廊下に足を踏み入れようとした時、ゾクリとした悪寒が全身を襲った。

『ッ……！あ、く……!？』

思考するよりも早く、体が本能的にその場から離れる。

徐々に戻ってくる理解と感覚に、私は混乱せざるを得なかった。

右肩から感じる鋭い痛みはゆっくりと広がり、服を真っ赤に染め上げていた。

第二十八話 比類なき同族

頭に手を入れられ、直接かき混ぜられているような思考。

正常に働かない頭の隅で、単純な疑問が断片的に浮かび上がった。

『(怪我…？我が？)』

いくら本来の姿で無いとはいえ、この体の硬度は高い。

それこそ、並大抵の攻撃ではかすり傷一人つかない程には。

それに、攻撃を食らう前のあの感覚…。

『く、ククツ、ハハハハハ！』

ああ成る程、合点がいった。

我もそうだったのだ。そういう奴もいるだろうよ。

一人納得し、口角を上げて牙を剥き出した。

『随分な挨拶ではないか！』

姿の見えない虚空に向かって叫ぶ。

一拍の間を置き、小さな笑い声はその場に響いた。

『あはは、キミが弱くなっただけじゃな……がっ、』

『そこか』

未だに私の目は相手の姿を捉えきれないが……声が聞こえれば十分だ。

紅雷を全身に纏い、全力でその空間を振り抜いた。

確かな手応を感じるとほぼ同時に、直線上の壁が轟音を立てて崩壊した。

「痛ったた…」

勿論、あれだけで終わる奴ではないのは承知済みだ。

僅かにただよう煙の中から、黒い影がゆらりと立ち上がった。

「ちよつとさー、喋ってる時に攻撃するなんて性格悪いんじゃない？」

『生憎と育ちの良い生活をしていないのでな』

「アハ、それは偶然。僕もだよー！」

仕返しとばかりに我が居た地面に焼け焦げたクレーターが出来上がる。

空中に跳んで躲せば追撃に蒼い雷が迫り、紅雷で相殺した。

衝撃の余波は払いのけて地面に着地し、ようやく全貌が見えた相手に笑いかけた。

『挨拶はこれぐらいで良いだろうっ？なあ』

麒麟』

その言葉を投げかけると、アイツの殺気が僅かばかりに和らいだ。

「えー？折角楽しくなってきたところだったのにー！」

『貴様はいつも間が悪い。だから仲間外れにされるのだぞ』

「僕は戦いが好きただけだよ。弱い奴らが悪い」

獰猛な笑みを浮かべながら、堂々と胸を張る。

相変わらず露出の激しい服だ。確かに動きやすそうではあるが。

懐かしさに興奮していたが、段々と熱も冷めてきた。

思考の方も冷静さになってきましたね。

危ない危ない、あのまま暴れていたら取り返しの付かない事態になっていました。

『それより、どうしてアナタがここに？』

「ありゃ？もう戻っちゃったか。残念。」

『質問に答えてもらえますか？麒麟』

「はいはい。分かりましたよー」

おどけた様子で両肩を竦めた麒麟が諦めたように語りだす。

どうやら麒麟は数日前に突然この大陸に来たらしく、原因も不明。強い人を探していたら偶然にも私の気配を見つけ襲撃した、と。

『麒麟はここがどこか分かっているんですか？』

「全然。でもチラホラと強い気配はあるし、どうでもいいよ」

強者がいるという理由だけであっさりと元の場所への未練を捨てる麒麟。

楽な性格してますね。ある意味羨ましい限りですよ。

「で、ルーツは」じで何してる訳？」

すでに興醒めしたらしく、周りをキョロキョロと見渡しながら聞いてくる。

麒麟のその行動に、私も疑問を感じた。

『今ギルドに所属しているのですが…』

「えっ、ギルド？キミが？……………ブフッ」

アナタはしていないのですか？

そう言おうとした矢先、麒麟に遮られた。

それも抑えきれない笑い声で。

「アハハハッ！ギルドーギルドーギルドだって!?あれだけ人との関わり合いを避けていたキミが!？」

完全に冗談だと思われたらしく、お腹を抱えて笑われる始末。

最後の言葉に苛立ちを感じながらも、麒麟の笑いが治まるまで黙った。

しばらくすると、喉から「ユウ」という音を出しながら涙目で私を見返してきた。

いや、何軽く呼吸困難になりかけてるんですか。

『言っておきますけど、冗談じゃないですからね?』

「はあ……はあ……ぶふっ……」

『聞いてます?』

「あはは、聞いている聞いている」

顔が笑っていますが、まあいいでしょう。

これ以上付き合っていたら時間の無駄になりそうです。

一応疑問も解決しましたし。

『麒麟はギルドに所属していないんですね』

「あのさ、ルーツは僕を笑い殺す気?」

『そんなつもりは毛先程もありません』

ばっさりと言葉を切り捨て、踵を返す。

だいぶ時間を許してしまいました。ナツさんの方は大丈夫でしょうか?

「あれ、もう行っちゃうの?僕全然闘り足りないんだけど」
『アナタに関わっている暇はありませんので』

最初はファントムに所属しているから攻撃してきたのかと思っていましたが、違うのならもう用はありません。

ここに現れたのもお得意の空気を読まない行動のせいでしょうし。

「ふーん。ま、別に良いけど。ここにはルーツ以外の強い奴いなさそうだし」

麒麟は肩を竦めると、何でもなさそうに言葉を続けた。

「あ、そういえばアイツも来てるよ。ほら、ルーツの大っ嫌いな赤い

……」

『黙れ小僧。殺すぞ』

「こっわーい！あははー」

放った殺気をさらりと受け流され、面白そうに笑われる。

そのまま蒼い雷撃で近くの壁を破壊すると、崩れた瓦礫に足をかけながら振り返った。

「また来るねー！」

『出来れば一度と会いたくありません』

「いやん。ルーツのいけずー」

私が苛立ちを感じる頃に麒麟はすでにいなくなっていた。相変わらず素早さに関しては何を超えますね。

だからこそ捕まえられずに厄介なのですが。

流石は麒麟の王とでも呼びましょうか。

『……少々厄介なことになってきましたね』

小さく溜息を吐き、麒麟とは逆方向にその場を駆けた。

今はギルドのことだけを考えましょ。